

歯学部ニュース

平成28年度第2号（通算130号）

特集 歯学部卒業おめでとう
口腔生命福祉学科10期生までの軌跡
活動の場を海外（世界）に広げて
大学間連携共同教育推進事業

目 次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 小貫和佳奈・木村 龍弥・牧口 由依・正村 美里	
平成28年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	9
須田 大亮・山田友里恵・渡部 桃子	
平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
臨床研修修了にあたり	15
渡辺 真光・伊藤 元貴	
総務委員会だより	17
前田 健康	
特集2 口腔生命福祉学科10期生までの軌跡	24
口腔生命福祉学科の10年 -新たな10年に向けて- 葭原 明弘	
歯学部で「社会福祉を学ぶこと」の意味 高橋 英樹	
口腔生命福祉学科を卒業して 米澤 大輔	
新潟市職員として就労して 永井 里美	
口腔生命福祉学科を卒業して 下内 美樹	
口腔生命福祉学科を卒業して 赤塚 眞奈	
准講会の活動について	33
准講会の活動について 齊藤 一誠	
特集3 活動の場を海外（世界）に広げて	34
SCRIP報告 土門 久哲・武田 涉	
SSSV報告 石田 陽子・高村 文香	
海外医療支援活動報告 照光 真	
歯科外来に着任して	43
田代美佐子	
看護・診療支援部便り	45
山田麻衣子	
准教授に就任して	46
組織再建口腔外科学分野・准教授 片桐 涉	
特集4 大学間連携共同教育推進事業	48
前田 健康	
魚島 勝美・秋葉 奈美	
サマースクール	54
加来 咲子・金 珉廷・大野田美祈	
留学報告	60
北見 公平	
学会受賞報告	62
小島 拓・北見 公平・隅田 賢正・坂上 馨・渡邊 賢礼	
小松 万記・平原三貴子・土門 久哲・前川 知樹	
診療室・講座紹介	71
う蝕学分野教授 野村由一郎	
口腔解剖学分野助教 川崎真依子	
素顔拝見	78
黒川 亮・川崎 勝盛・高橋功次朗	
留学生紹介	81
Farah Omari	
ポリクリを終えて	84
嶋田菜奈子・松崎奈々香	
早期臨床実習を終えて	86
相澤 知里・相馬 歩	
医歯学祭を終えて	88
歯学部歯学科3年 松田きよら	
部活動紹介	89
スキ一部 清水慎太郎・剣道部 森川 雄太	
学会報告	91
同窓会だより	93
教職員異動	97
編集後記	108



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第47期生の皆さん、口腔生命福祉学科第10期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、今日の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていたご家族、保護者の皆様方のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部の教育課程をすべて修了し、学士の称号を与えられて、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

新潟大学歯学部は、昨年、創立50周年記念式典を挙行し、新たな半世紀へと踏み出しました。この50年の間に歯科界を取り巻く状況は大きく変わりました。歯学部設置当時（1965年）は歯科医師不足とむし歯の洪水で、地域歯科医療に貢献できる人材、いわゆるdrill、fill、built（歯を削って、詰めて、かぶせる）のできる人材養成が求められていました。爾来50年、社会情勢は大きく変わり、歯学部設置前の昭和35（1960）年に男性65.32歳、女性70.19歳だった平均寿命が平成25（2013）年にはそれぞれ80.50歳、86.83歳となりました。また平成25（2013）年の高齢化率は25.1%（男性22.1%、女性27.8%）となり、平成72（2060）年には39.9%に達し、2.5人に1人が65歳以上になるとの推計が出されています。従って、今までの歯科医療も健常者型から高齢者型へ大きく転換す

ることが求められています。そのため、歯学教育も今また大きな変曲点を迎え、文部科学省では歯学モデル・コア・カリキュラムの大幅改訂が、厚生労働省では歯科医師国家試験出題基準の改訂が共にリンクしながら進められています。これらの改訂のキーは「超高齢社会」ですが、加えて「グローバル化 globalizationへの対応」です。新浪剛史前ローソンCOEは「グローバルな人材に求められる要素は多様性 diversityの理解である」と、また日産のカルロス・ゴーンCOEはグローバル化の時代で大切なことは、「identityを失わず、多様性を受け入れることである」（日経新聞「私の履歴書」）と述べています。本学歯学部で学んだ口腔保健医療福祉というidentityを基盤とし、diversityの時代であるグローバルな現代での皆さんの健闘を祈念いたします。活躍するためには何が必要でしょうか？それは、異文化適応性 adaptability to cross culture、言語能力 ability in language、法令遵守 abidance、そして専門能力 ability in specialtyといわれています。皆さんのidentityの確保には専門能力を常に高め、維持することが不可欠なことはいまでもありません。

超高齢社会の中、国は歯学に対し、健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決を期待しています。しかし、社会は口腔医療・保健・福祉のプロフェッショナルとなる皆さんに対して、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。また、社会は専門的知識やスキルを維持・向上させる責任も求めるため、皆さんにはさらに一層の

常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるためには、今日この日に、改めてこれからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。学而不思則罔（学びて思わざれば則ち罔し：人から学んだだけで、自分で考えることをしないと、何もはっきりとはわからない）です。

私事ですが、私は昨年11月に教授就任20周年を迎えました。20年前、若造の新米教授に、学外のある著名な教授から次のような激励の言葉ももらいました。「君がこれから教授職を務めるのに4つのEを常に忘れずに頑張りなさい」と。頭文字Eで始まる英単語がすぐに出てくるでしょうか？この4つのEはencouragement、enthusiasm、economics、entertainmentです。小さいながらも研究室を維持できたのも、また歯学部という大きな所帯を曲がりなりに運営できたのは、この4つのEを常に念頭に置いてきたことにあるかもしれません。Disneyの創始者

Walt Disneyは夢を実現させる秘訣は4つのC、すなわち、curiosity（好奇心）、confidence（自信）、courage（勇気）、constancy（一度決心したことを続ける一貫性）によって言い表せると思っています。中でも一番大切なのが自信であり、この自信、そしてたゆまぬ努力が皆さんのidentityを高めるのです。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも熱意を持って、応援していきたいと思います。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。すばらしい教育資源を有しています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待しています。





御卒業おめでとうございます

医歯学総合病院 副病院長 小林 正 治 (歯科担当)

歯学科第47期生ならびに口腔生命福祉学科第10期生の皆さん、またご家族の皆様、この度の卒業誠におめでとうございます。歯学部での課程をすべて修了され、晴れて学士の学位を授与されました。これまでの努力とその成果を讃えますとともに、光り輝く未来に対して心から祝福を申し上げます。

皆さんは今、新たな人生のステージに向かってスタートの場に立ち、将来への夢や希望と緊張感に包まれていることと思います。歯学科では、これからの歯学界をリードする人材を育成することを目的として様々な教育を行ってきましたが、そこで得た知識や技術は歯科医師としての基礎となります。歯学科を卒業された皆さんは、歯科医師国家試験に合格すれば4月から臨床研修歯科医師として1年間研修施設に勤務し、その後に臨床あるいは研究の第一線で、あるいは公衆衛生など歯科医療行政の分野で活躍することとなると思いますが、歯科医師として大きく育つためには新潟大学で学んだ基礎の上に何を積み重ねていくかが勝負となります。また、口腔生命福祉学科では、高度な歯科専門知識を有しつつ、保健・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントできる人材の養成を目的として教育を行ってきました。口腔生命福祉学科を卒業された皆さんは、歯科衛生士あるいは社会福祉士として、臨床や教育・行政の現場に進まれることと思います。皆さんには医療や社会福祉に関する広い視野と豊富な知識や高いスキル

がますます求められていきます。後進の指導もできる歯科医療や社会福祉のプロフェッショナルになれることを期待しています。

歯科医療は歯科界のみで完結するものではなく、医療全体の中の一分野としてその役割を果たすこととなります。近年では多職種連携がキーワードとなり、口腔ケアや周術期口腔管理、摂食嚥下リハビリテーションなど、歯科医師や歯科衛生士には他職種と連携して活動する場が広がってきています。また、歯科医療の対象も健常者型から高齢・有病者型へとその重点が変化して診療の内容や対応すべきリスクも大きく変化しており、こうした変化に対応し得る高い専門技能を有する歯科医師や歯科衛生士が求められています。医療の世界は日進月歩であり、生涯学び続けることが求められていますが、新潟大学歯学部の教育カリキュラムを修了された皆さんには、今後の長い生涯学習の道程を乗り越えていくために必要な基礎的能力がすでに備わっているものと思います。歯科界を取り巻く環境は必ずしも明るいものではありませんが、明確な目標を設定して地道に努力を重ねれば必ず素晴らしい未来が切り開けるものと思います。是非、知的好奇心を失うことなく、一歩一歩努力を重ねていただきたいと思います。

新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、これから様々な分野で活躍する皆さんを全面的に支援します。卒業した後もいつでも門をたたいて下さい。

卒業にあたり

歯学科6年 小 貴 和佳奈

6年間は短いようで、思い返せば相応に内容の詰まった時間でした。中高時代までとは比べようのないくらい自分の意思次第で何にでも触れることのできる環境でもあり、逆に容易に手を抜くことのできる環境でもありました。しかし、将来と直結する時間であることを年々自覚するにつれて、とても楽しい時期でしたが取捨選択の難しい時期でもありました。関心を持ったことだけに突っ走り、やるべき事を後回しにしがちだった私は特に余計なことばかりしてきたと多少なり認識していますが、それもまた今後、何か自分の糧になると思っています。勿論、反省点もあるのでそれは今後の課題です。何にせよ、卒業を目の前に「悪くない大学生活だった」と思っている自分に少しほっとしています。

悪くない、なんて書いてしまいましたが、それはもっと頑張ればよかったと感じてる自分の主観的な言葉であって、沢山の方々に支えて頂いた最高の学生生活でした。良いこともしんどいことも、一番解ってくれるのは同じ環境にいる人なのだと思いました。至らないことだらけの私はきっと許されたり許されなかつたりしつつも、6年間同じ場所に所属し続けられたことにとっても感謝しています。学生でありながら患者さんを診察させて頂いた臨床実習では、診療に関するだけでなく、社会人として生きてく上で最低限必要なことを先生方に指導して頂いたと感じていま

す。ご指摘頂いたこと、感じ取ったことは今後意識して過ごしていきます。また臨床実習をしつつも思ったのは、もう一度座学を受け直したい、ということです。覚えなければいけないこと、理解しなければならないことは膨大だけれど、それ全部必要なことだから！もっと頑張っておいて！と当時の自分に伝えたいです。実際に少しでも診療に触れられたからこそ、こう思うのかもしれないと思うと、やはり臨床実習は有難いものだったと実感しています。基礎から教えてくださった先生方もさっぱり解らないであろう学生の私に一生懸命伝えてくれていたのだと思うと、やり直せたらどんなに良いかと後悔しています。過去に戻ることはできないので、これからその分を取り返せるように頑張っていきたいと思います。

今の自分があるのは関わって下さった全ての人あってのもので。これからも着実に進んでいけるよう、大学生生活を忘れずに過ごしていきます。本当に有難うございました。



技工室にて。筆者は右。

卒業だ、飲もう！

歯学科6年 木村龍弥

6年間この歯学部ニュースの原稿の執筆担当をのりくらしとかわし続けてきたのですが、最後の最後でこの原稿を書くことになってしまいました。そんな自分のひきの良さなのか悪さなのかを考えつつ、この原稿と向き合っています。今回のテーマは「卒業に関して」ということなので、歯学部での6年間を簡単に振り返りながら原稿を進めていきたいと思います。

6年前初めてこの新潟の地に立ち、新潟大学歯学部の学生としての生活をスタートさせたのが遠い昔のことのように感じられるのは、年月のせいだけではないように思えます。

1年生の時は、歯学部生といいつつも教養がメインで、ほとんど歯学に携わる機会が無く暇を見つけては覚えたばかりのお酒を楽しんだりアルバイトをしてみたり、初めて住む新潟の地を散策してみたりなどの毎日でした。

しかし、2年生以降の歯学部生としての生活で思い出されるのは実習の数々です。3年生での解剖実習や4年生で畳み掛けてきた数々の臨床系の実習が印象的でした。しかし、数々の実習の中で一番辛かったのは、やはり5年生の後期から始まった臨床実習でした。

私の臨床実習は真っ黒でした。苦手な技工、書くのが大変な外科の所見、症例検討会用のパワーポイント作り、試問、様々なレポート、診療前後の先生とのディスカッション等々、思い返すときりがありません。たまに理不尽な事で怒られるなんてこともあり、筋が通らないなど愚痴をこぼしたこともありました。そのような実習の中で始末書の恐怖というのは大きいものでした。3枚貯まると実習停止、すなわち留年の危機なのです。私

のような不器用な人間は、いつどこでミスをしてしまい始末書を書かなくてはならない状況に陥ってしまうか分からないので、それはもうドキドキでした。(その恐怖が微妙なものになってしまった事件が実習の途中でいくつかありましたが、その事件については諸事情により割愛させていただきます。)

そのような生活の中での私の救いは「お酒を飲むこと」でした。単にお酒を飲むのが好きというのもありましたが、辛かった時「とりあえず飲もう」という一言でお酒に付き合ってくれた仲間(+先生)がいたというのが大きな支えでした。同じ辛さを味わった仲間内で愚痴などをこぼしつつ酌み交わす酒の味はちょっとだけ違う味がしました。

これから先、嫌な事は多々あると思うけれど、今と変わらず「とりあえず飲もう」の一言で集まれる仲間(+先生)とお酒と良い関係を築いていけたらいいなと思います。

最後まで私の稚拙な文章に御付き合い下さいまして誠に恐縮です。私のような学生が無事卒業を迎えることができたのも周りの多くの方の支えがあったおかげだと思います。お世話になった先生方、先輩後輩、周りの友人、両親に感謝したいと思います。ありがとうございました。



同級生と(筆者は後列の中央)

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 牧 口 由 依

「口腔は学年が上がるにつれて忙しい」と入学当初から聞いていた噂が、徐々に確信に変わっていきました。早いもので入学してから4年が経とうとしています。私が高校生の頃に思い描いていたキャンパスライフとは程遠いものでしたが、この4年間は毎日とても充実していました。

その中でもやはり印象に残っているのは、4年次の臨床実習です。実習が始まった当初は、12月まで本当にやっていけるのかと先が思いやられる毎日でした。月曜日に病院に向かう足取りは重く、木曜日の実習終了後は解放感に満ち溢れて学校に戻り「華の木曜日」を迎える…そんなことを毎週繰り返していました。実習では毎日学ぶことだけでなく、座学で学んだことと現場での実践とのギャップに戸惑い、悔しい思いをすることばかりでした。それでもひとつひとつの経験や失敗が積み重なって自信に変わり、患者さんから「ありがとう」と感謝された時にはそれが励みとなり、やりがいを感じることができました。

また、私は歯学部のバスケットボール部と全学の総おどりサークルに所属し、学業以外でも充実した日々を送ることができました。バスケ部では学科・学年を越えた仲間と共に同じ目標を目指し、デンタルでは女子部は2年連続3位という成績を収めることができました。総おどりサークルでは、1年次からの夢であった医歯学祭での演舞を今年度初めて叶えることができました。そしてもう一つ、おそらく初めてとなる口腔生命福祉学科の学生の親睦会も開催することができ、学年を越えたつながりを作ることができました。歯学科に比べ新しい学科とはいえ、少人数の学科であるにもかかわらず同学年以外はほとんど話したことがありませんでした。これを機に知っている後輩

が増え、特に臨床実習の引き継ぎの時はとてもやりやすく、学年を越えたつながりの大切さを実感しました。ぜひ来年度以降もこのような機会を作り出してほしいと思います。

「入学者のことば」として約4年前の歯学部ニュースには「ひとつひとつの出会いやつながりを大切にしたい」と執筆させていただきましたが、その思いを胸にこの4年間で得た出会いやつながりは私にとってかけがえのない財産になりました。

最後になりますが、不甲斐ない私に学ぶ機会を与え、成長させてくださった先生方、そしてなによりも4年間共に励まし合いながら過ごしてきた口腔生命福祉学科10期生のみんなには本当に感謝しています。この4年間での経験を活かし、今後社会に出て頑張っていきたいと思います。



筆者：前面と前列左から2人目

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 正村美里

期待より不安いっぱいだった入学式から、もう4年が経ってしまいました。慣れない土地での一人暮らしで体調を崩し、一週間入院してしまった事がつい先日の事のようにです。

学年が上がるにつれ、級友やサークル仲間との交流が増えていく中、自分の居場所や今やりたい事、やるべき事が湧き出てきて、ふと気が付くと卒業が目前となっていました。特に4年次は臨床実習と社会福祉現場実習、並行してPBL、講義、特論等に取り組みながらの就職活動、国試対策という、本当に目まぐるしい日々でした。

歯科の臨床実習では、実際の診療を前に緊張してしまい、行動に移せないだけでなく、歯科衛生士さんのような気遣いもできず、私には向いていないのではないかと悩んだ時期もありました。しかし、経験を積むうちにできることが増え、アシストを任せてもらえるようになったことで、歯科衛生士としてのやりがいや喜びを感じることができるようになりました。お忙しい中、不甲斐ない私に丁寧に指導して下さった歯科医師の先生方や、いつも優しく助けて下さった歯科衛生士のみなさんにはとても感謝しています。

また、歯科の実習と並行して行った福祉の現場実習では、地域包括支援センターに行かせていただきました。包括支援センターでは、高齢者の方の生活の様子や、その生活を支える社会福祉士等

の職員の方々の活動を見学させていただき、普段机上では学べないような、実際の福祉現場について学ぶことができたと思います。そこで出会った職員の方々や、たくさんの利用者さんとのふれあいがきっかけで、福祉の道に進みたいと強く思うようになりました。一か月という短い期間でしたが、毎日優しく親切に接して下さったみなさんのおかげで充実した時間を過ごすことができ、心から感謝しています。

人としては、まだまだ未熟な私ですが、この4年間大学で学んだ歯科の事をはじめ、色々な活動を通して経験した事、人との関わりや繋がりの大切さ、温かさを忘れる事なく、その人らしい人生を送れるような最大限のサポートが出来る、強く優しい社会福祉士になれるように頑張りたいと思います。この4年間支えて下さった沢山の方々に感謝し、少しでも恩返しができるよう努力したいと思います。ありがとうございました。



筆者：中央

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

大学院4年 須田大亮



まだまだ先が長いと感じていた大学院生活も振り返ると短かった気がします。4年間で学び得たものが少なく、内容が薄かったから短く感じるのだろうかと考えましたが、まさか、

そんなはずはありません。大学院入学前までは経験したことがないことを沢山経験してきました。そんな入学前まで特殊だった事柄が4年を経てもはや普通になってしまったため短く感じるようになったのだと思います。

組織再建口腔外科学分野の大学院生は4年間の最初の1年で口腔外科の臨床を学び、あとの3年は研究中心の生活を送ります。もちろん1年間の臨床からも刺激を受けましたが、研究中心の生活はそれまでの私にとって未知の世界であったため、当時の私には非常に大きな刺激となりました。

特に刺激となったものの1つ目が基礎の研究です。実験の計画、器具の調達、実験動物の仕込み、解析、結果の分析・考察、そして論文の作成と、研究に必要な過程を一通り経験することができました。基礎の研究には知識の他に、失敗を含めた多くの経験、そして意外にも体力が必要であるということがわかりました。研究をして発表する側になることで、他人の研究から知識を得る際の効率も上がったように感じます。卒業後の学習や研究に大いに活かすことのできるスキルを身につけたのではないかと思います。

刺激となったものの2つ目が海外での研究発表

です。大学院入学前もまさか私が海外で研究発表をすることになるとは思ってもいませんでしたし、発表直前も本当に私んかが発表してもよいのだろうか心配になったことも有りましたが、先輩先生方の助けのおかげで無事海外での発表をこなすことができました。初めての国外発表であった韓国の学会の後も、インドネシア、イギリス、タイと多くの国で学会発表の機会を頂きました。未熟ではありますが、英語で考えを伝えることの他に学術的な英語表現、そして英語の聞き取りが上達したと思います。

刺激になったものの3つ目には多くの歯科医院で診療をさせて頂けたことが挙げられます。幸いなことに、医局に依頼のあった様々な歯科医院や医療機関で診療のお手伝いをさせて頂く事ができました。歯科医院ごとに特色があるため、それぞれに合わせて診療することが始めは大変でしたが、慣れた頃には多くの経験を得るチャンスとなりました。

この他にも多くの人と接する機会やイベントに参加する機会を得ることができた大学院生活は濃密で有用な時間であったと考えます。今後はこの経験を活かして臨床と研究に力を注いでゆきたいと思っています。それがこの4年間でお世話になった人々への恩返しになるのではないかと考えています。



大学院修了にあたって

山田 友里恵

大学院に入学して4年。入学時は長い道のりのように感じていましたが、あっという間の4年間でした…といえるほど、さらりと過ぎ去った時間ではありませんでした。臨床・研究に毎日悪戦苦闘しつつ、本当に濃厚な大学院生活だったと思返しています。

1年目は臨床が中心の生活でした。学部生時代は、歯科麻酔は講義で理論を学ぶことが主だったので、正直入局するまで臨床の具体的なイメージをあまり持っていませんでした。まずは中央手術室での麻酔管理からスタートしたのですが、いざ始めて現場に出てみると、慣れない手術室で始めて経験する手技、機械操作ばかり。先生方が話す言葉の意味も理解できず、無能感に打ちひしがれて手も足も出ませんでした。しかし、指導医の先生から「しっかりしろ！先生は患者さんの命をあずかっているんだよ！」と激をとばされ、全身管理という歯科麻酔の仕事の責任の重さに身が引き締まり、安全に麻酔管理を行えるよう毎日必死で勉強しました。口腔外科や医科麻酔でも研修させていただきました。歯科麻酔の臨床では知り得なかったことをたくさん学ぶことができ、毎日が新しい発見と刺激に満ちていました。

2年生からは研究がスタートしました。瀬尾教授から「末梢神経再生過程におけるHedgehogシグナル伝達経路の役割の検討」というテーマをいただき、口腔解剖で研究のいろはを教えてくださいました。初めは実験動物のマウスを触るのも

ままならないほどで、ご指導くださった先生方には多大な労力とご迷惑をおかけいたしました。研究生生活は、振り返ってみると苦労や失敗の方が多かったです。しかし、へこんだ時は同じ口腔解剖の大学院生に励ましてもらったり、みんなで浴びるほど飲んで嫌な事は忘れて、なんとか挫けず今日までやってこられました。そんな中でも実験が上手くいったときや、予想もしなかった面白い結果に出会えた時は、鳥肌がたつような感動や興奮があり、気づけば研究に夢中になっていました。今までこれほどまでに何かに熱中したことはなかったのですが、研究との出会いは私にとって人生のターニングポイントだったと思います。3年を要してようやくひとつの仕事がまとまりそうですが、これが到達点ではありません。この大学院生活で培った研究の礎をもとに、歩みを止めず精進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

大学院修了にあたり、これまでご指導くださいました歯科麻酔学、口腔解剖学の先生方に改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科学分野 渡部 桃子

顎顔面口腔外科学分野の渡部と申します。学部生、研修医、大学院生、と、気づけば故郷山形を離れ新潟に来て、11年目に突入しております。大学に入学した当初はこれほど長く新潟にお世話になるとは思っておりませんでした。過ぎ去ると本当にあっという間に感じられます。11年間の思い返しますと、特に大学院の4年間は濃厚な日々を過ごせたように思います。その大学院の日々を少し振り返ってみたいと思います。

学部を卒業後、歯科総合診療部に歯科研修医として在籍していた際に、ローテーションの口腔外科研修で顎顔面口腔外科にお世話になり、口腔外科に興味を持ちました。この分野をもう少し深く学んでみたいという気持ちから、顎顔面口腔外科学分野への大学院入学を決意しました。

1年目は、ひたすら臨床で、口腔外科外来、病棟、麻酔科研修をさせていただき、大学病院ならではの幅広い症例をたくさん勉強させていただきました。臨床に携わるなかで、口唇口蓋裂に興味を持ち、2年目からは口腔解剖学の大峽先生のもとで、遺伝子改変マウスを用いた口蓋裂の発生についての研究をさせていただきました。はじめはマウスに触るのに毎度毎度緊張していたのが、懐かしく感じられます。

口蓋裂はヒトのもっとも多い先天奇形のひとつで、その発症メカニズムの解明は非常に重要であると考えます。まだまだ不明の点は多くあります

が、その発症メカニズムの分子的解明に少しでも携わることができ、興味を持って研究に取り組むことができました。また、国内の学会だけでなく、国際学会へも参加させていただき、英語でのディスカッションに苦い思いもしましたが、大学院生らしい非常に貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。

大学院生活は、研究、臨床、バイト、学生講義のお手伝いなど、目まぐるしい日々を過ごすこともありましたが、今思うと、何一つ無駄なことではなく、全てが自分の糧になっていることを実感しております。自分の興味のあるものに、腰を据えて4年間取り組める機会を得られたこと、尊敬する先生方、苦楽を共にしたもはや戦友とも呼べる院生仲間との出会いもあり、大学院に入学して良かったと思っております。大学院を修了し、今後は臨床のウェイトも大きくなると思いますが、以前とはまた違った視点を持って、臨床に従事できる気がいたします。

最後になりますが、ご指導いただきました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	西川 敦子 （口腔生命科学）	フィリピン国マングラウエ市における小児の公私立学校就学による齲蝕有病と成長発育、食習慣との相互関連
博士（歯学）	中島 努 （口腔生命科学）	Difference of tooth brushing motion between dental hygienists and mothers - Focusing on self-toothbrushing and caregivers' toothbrushing - (歯科衛生士と母親における歯磨き動作の比較 - セルフ磨きと仕上げ磨きについて -)
博士（歯学）	花崎 美華 （口腔生命科学）	Gender difference of tooth brushing motion and force on self-brushing and caregivers' brushing in dental professionals (歯科専門家におけるセルフブラッシングおよび介助磨き時のブラッシング動作・荷重の性差について)
博士（歯学）	大湊 麗 （口腔生命科学）	二段階口蓋形成手術法における硬口蓋閉鎖時期の検討 - 言語機能による分析 -
博士（歯学）	永井 孝宏 （口腔生命科学）	Eyelid development is controlled by mesenchymal microRNAs through regulating Wnt signaling (間葉のMicroRNAは、Wntシグナルを介して眼瞼の発生を制御する)
博士（歯学）	原 夕子 （口腔生命科学）	Hypoxic response of human oral mucosa fibroblasts in a 3D collagen lattice (コラーゲンゲル内で3次元培養したヒト口腔粘膜線維芽細胞の低酸素応答)
博士（歯学）	深井 真澄 （口腔生命科学）	口蓋裂患者における口蓋裂言語の心理的受容過程
博士（歯学）	渡部 桃子 （口腔生命科学）	Cleft Palate Caused by Ectopic Bone Formation in Mutation of Intraflagellar Transport Protein (IFT関連タンパク質変異による異所性の骨形成は口蓋裂を誘発する)
博士（歯学）	島田 惇史 （口腔生命科学）	Expression of anti - <i>Porphyromonas gingivalis</i> peptidylarginine deiminase immunoglobulin G and peptidylarginine deiminase-4 in patients with rheumatoid arthritis and periodontitis (関節リウマチおよび歯周炎罹患患者における <i>Porphyromonas gingivalis</i> peptidylarginine deiminaseに対する免疫グロブリンGとpeptidylarginine deiminase-4の発現)
博士（歯学）	根本 康子 （口腔生命科学）	Clinical and three-dimensional evaluation of combinational periodontal regenerative therapies using enamel matrix derivative and deproteinized bovine bone mineral with or without collagen membrane (エナメル基質タンパク及びウシ異種骨基質を用いたコンビネーション歯周組織再生療法におけるコラーゲン遮蔽膜の臨床的・3次元エックス線学的評価)
博士（歯学）	松田 由実 （口腔生命科学）	Ligature-induced periodontitis in mice induces elevated levels of circulating interleukin-6 but shows only weak effects on adipose and liver tissues (歯牙結紮によって誘導される歯周組織局所の炎症は血中インターロイキン-6レベルを上昇させる一方で肝臓および脂肪組織への影響は限定的である)
博士（歯学）	大森 裕子 （口腔生命科学）	日本人を対象とした矯正歯科治療前後の赤唇に関する形態学的研究 - 小臼歯抜去により治療したアンクルI級上下顎前突症例における矯正歯科治療前後の赤唇形態変化 -
博士（歯学）	上村 藍太郎 （口腔生命科学）	Inhibition of the degradation of 2-arachydonoylglycerol (2-AG) attenuated orofacial neuropathic pain following an injury to the trigeminal nerve in mice (口腔顔面領域の神経障害性疼痛に対する内因性カンナビノイドの鎮痛作用)
博士（歯学）	北見 公平 （口腔生命科学）	DNA repair via BRCA1 and BRCA2 is essential for craniofacial bone development (BRCA1 およびBRCA2 を介したDNA修復機能は頭蓋顔面骨の発生に重要である)

博士の専攻 分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	飯 泉 智 子 (口腔生命科学)	Effect of body posture on chewing behaviors in healthy volunteers (健常者において姿勢の違いがもたらす咀嚼運動の変化)
博士(歯学)	篠 原 千鶴子 (口腔生命科学)	更年期女性における口腔乾燥感と関連する因子の検討
博士(歯学)	浅 井 佑 介 (口腔生命科学)	Changes of nasal and oronasopharyngeal airway morphologies and nasal respiratory function following orthognathic surgery (顎矯正手術後の鼻咽腔気道形態と鼻呼吸機能の変化)
博士(歯学)	須 田 大 亮 (口腔生命科学)	The effect of bone mass and architecture on rat mandibular condyle after mandibular distraction (下顎骨延長後のラット下顎頭に対する骨量と骨微細構造の影響)
博士(歯学)	須 田 有紀子 (口腔生命科学)	拡散強調画像の多変量解析による下歯槽神経の分画
博士(歯学)	平 原 三貴子 (口腔生命科学)	Novel trigeminal slice preparation method for studying mechanisms of nociception transmission (侵害刺激伝達メカニズムの解析に有用な新たな三叉神経スライス標本作製法の開発)
博士(歯学)	山 田 友里恵 (口腔生命科学)	Autocrine-mediated Shh Signaling Pathway Regulates Inferior Alveolar Nerve Regeneration via Controlling Schwann Cells (オートクラインによるソニックヘッジホッグシグナル経路はシュワン細胞の調節を介して下歯槽神経再生を制御する)
博士(学術)	木 村 秀 喜 (口腔生命科学)	現在歯数20以上の75歳高齢者は「健康な食事」を摂取しているか? (Do community-dwelling 75-year-old elderlies with 20 or more teeth take "a healthy dietary pattern"?)
博士(歯学)	笹 嶋 真 嵩 (口腔生命科学)	Effects of oral function training and oral health status on the physical performance of the potentially dependent elderly: A randomized controlled trial (特定高齢者の身体機能改善に対する口腔機能訓練の効果および口腔健康状態の影響)
博士(歯学)	長谷川 真 奈 (口腔生命科学)	Measurements of Pharyngeal Barometric Pressure During Swallowing in the Healthy Subjects (健常者における嚥下時の咽頭内気圧変化の測定)
博士(歯学)	八 田 あずさ (口腔生命科学)	Experimental dryness sensitizes cool cells to capsaicin-mediated inhibition via TRPV1 (実験的な乾燥はcool cellのcapsaicinによる応答抑制をTRPV1を介して感作させる)
博士(歯学)	BABKAIR Hamzah Ali O (口腔生命科学)	Aberrant Expression of the Tight Junction Molecules Claudin-1 and Zonula Occludens-1 Mediates Cell Growth and Invasion in Oral Squamous Cell Carcinoma (口腔扁平上皮癌におけるタイト結合分子Claudin-1およびZonula Occludens-1の異常発現はがん細胞の増殖と浸潤を亢進させる)
博士(歯学)	村 上 望 (口腔生命科学)	一食を通じての食事量および食事動作の観察
博士(歯学)	坂 上 雄 樹 (口腔生命科学)	Anti-biofilm and bactericidal effects of magnolia bark-derived magnolol and honokiol on <i>Streptococcus mutans</i> (<i>Streptococcus mutans</i> に対するMagnololおよびHonokiolの殺菌ならびに抗バイオフィルム効果)

平成28年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 (口腔保健福祉学)	小 粥 照 子 (口腔生命福祉学)	緩和ケアが行われたがん終末期患者の看護必要度からみた口腔衛生管理の介入時期の検討
修士 (口腔保健福祉学)	佐 藤 茜 (口腔生命福祉学)	Relationship between oral feeding and oral health condition in dysphagic patients (摂食嚥下障害患者における経口摂取と口腔環境の関係)
修士 (口腔保健福祉学)	佐 藤 夏 奈 (口腔生命福祉学)	施設入所高齢者の生活機能および食事形態と口腔機能、嚥下状態および全身状態との関係について
修士 (口腔保健福祉学)	保 田 麻 里 (口腔生命福祉学)	Relationship between physical, oral and swallowing function in frail elderly patients (フレイル患者における身体機能と口腔および嚥下機能との関係)
修士 (口腔保健福祉学)	小宮山 実 里 (口腔生命福祉学)	県立がんセンターにおける地域歯科診療所との連携による食道がん周術期口腔機能管理の状況と口腔衛生状態の改善効果の検討
博士 (口腔保健福祉学)	野 上 有 紀 子 (口腔生命福祉学)	Dental caries prevalence and treatment level of neglected children at two child guidance centers (児童相談所における一時保護児童のう蝕およびう蝕処置状況に関する報告)
博士 (口腔保健福祉学)	岸 本 奈 月 (口腔生命福祉学)	介護保険施設における栄養管理、経口移行（維持）および口腔衛生管理に関する介護報酬の算定状況



臨床研修修了にあたり

臨床研修修了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 渡辺 真光

この度、執筆させていただきます。研修医の渡辺です。新潟大学歯学部を42期卒業後、4年間は国試浪人をしていました。臨床研修に伴う診療行為はほぼ5年ぶりの体験であり、研修開始に際して個人的には期待感よりも遥かに不安が大きかった、というのが正直なところですが、しかしいざ始めてみると、自分にとってはひたすら楽しく、充実していると感じる研修になりました。

例えば、基礎的な技工として、学生の頃はテンポラリークラウンや個人トレーの製作などを苦手に感じていました。今思えば本当に基本的な視点と知識が欠けていたからだと思います。そういった「穴」を、4月上旬の予備研修や個別の実習として改めて一から学べたことで、克服するのにこの上ない契機となったと感じています。

御世話になった先生が、「自動車免許を持っていることと運転技術が卓越なことは違う」と過去におっしゃっていた意味を痛感しました。

研修を通して再認識したことは技術面だけではありません。国家試験の問題では殆どが記載された所見のみから診断し治療内容を問われますが、実際の患者さんに接して最も強く感じたことは「如何に背景に目を向けられるか」でした。診療時間の延長が帰路を左右する患者さんもいれば、積極的加療をすべきでない患者さんもいらっしゃいます。ラポールの形成を図り歯科的教育を行っていく上で、患者さんのパーソナリティや診療毎の体調・都合等への意識は不可欠であると強く感じました。

技術と視点、その2つを意識して研修を行っていったこと、またブランクのせいもあり環境に順応するのに時間が必要であった自分にとって、当病院のAコースは最良の研修先だったと感じてい

ます。研修の一環として保健所の業務に触れたり、地域歯科保健を推進する先生方と接する機会に恵まれたりしたことも大きな収穫でした。

2017年度からは予防歯科の大学院に進学予定ですが、学生時代から目をかけてくださっていた宮崎先生に教えを乞う期間を短くしてしまったことは後悔しかありません。そもそも浪人を重ねてしまったことで多くの方の期待を裏切ってしまった罪悪感もあります。知識の拡充や間違ったクセの修正のために、浪人は必要なプロセスであったとも感じますが、今後は取りこぼすことの無いよう、また周囲の期待に沿えるよう、邁進していく所存です。

浪人時代から支えてくださった皆様、研修の場を提供してくださった藤井教授、指導医の伊藤先生はじめ総合診療部スタッフの先生方、本当にありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い致します。

そして国家試験を控えた皆さん、特に既卒生の皆さんは本番までの1年間、周囲からの共感を得にくい苦悩に曝されることも少なからずあるかもしれません。しかし、少なくとも私は今、歯科医師になれて良かったと心から思っています。環境だけでなく患者さんにも恵まれ、本当に充実した研修生活を送ることが出来ました。今はまだ漠然としていますが、目指すべき方向も見つけました。受験を越えれば視界が開けます。どうか頑張ってください。



研修医伊藤先生班（筆者：中央右側）

臨床研修終了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 伊藤元貴

今回、臨床研修終了にあたりという題目で原稿を書かせていただきます、伊藤元貴と申します。歯学部ニュースは学生時代からよく読んでいましたが、投稿は今回が初となります。私の1年間の臨床研修についてご紹介します。

歯科医師にせっかくなかったのだから、まず一般歯科で歯科治療をやりたいことに加え、口腔外科処置や周術期管理や全身疾患への対応を学ぶため口腔外科で研修したいという希望から、どちらも半年ずつ研修が可能なBコースを選択しました。

4月から10月までの半年間は新潟市内のニイガタクリニックで研修しました。朝8時から診療開始時間前までは勉強会、それがない日はファントム模型を用いたレジン充填や支台歯形成練習、天然歯を石膏に植立しての歯内療法実習などを行いました。実習は指導医の先生によりマンツーマンで直々にご指導して下さいました。

診療では一般的な歯科治療を幅広く経験させていただきました。新患や急患の対応も数多く行い、とくに急患時の対応では、診断した上でその日にどこまでの処置をするかとても苦慮することもありました。学生時代に苦手意識が強かった処置に対してはかなり自信がついた一方で、ちゃんとした治療を行うことができるようになるまでは、まだまだ研鑽が必要であると感じました。

クリニックでは診療に加え、歯科治療は個々の歯科的処置のことをさし、歯科医療は歯科治療によって最終的に患者の健康増進をはかるための包括的なものであるという考え方を学ぶことができ、とても濃密で有意義な半年間となりました。

後半は10月から新潟大学病院の顎顔面口腔外科で研修しました。病棟での業務を主体として、病棟ではチームに分かれて、入院患者の管理や治療

を行い、外来では指導医の先生の診療のアシストやマネジメント、新患の対応などを行いました。

対象となる疾患が多岐に渡ることさることながら、仕事そのものが自分1人で完結することがないというのが、口腔外科と一般歯科の一番の違いだと痛感しました。病棟においてはチームでの連携、情報の共有が必須です。

「治療をするのはほんの一瞬で、その前に患者の全身疾患や病状の把握、必要な検査の実施、診断、予後の推定、術後の管理とか色々考えると治療なんて全体のほんの一部だよ。」指導医の先生からいただいた言葉です。口腔外科だから、抜歯や手術を沢山行っているであろうという当初の安直な認識を改めることができました。また、周術期管理や全身疾患や薬剤など、勉強しなければならないことが山ほどあることに気づき、学生時代よりも教科書や専門書に目を通すことが増えました。

口腔外科で研修したことで、医療人としての必要な知識を持ち、有病者に対して適切な対応ができるようになってから、局所的な歯科のプロフェッショナルになるのも遅くはない、という考えを持つようになりました。

最後に、ご指導して下さった先生方や関わった看護師や衛生士や技工士さん、同期の研修医に感謝申し上げます。ありがとうございました。



病棟研修にて（筆者：右端）

歯学部長の選任について

前田健康歯学部長の任期満了に伴い、歯学部長選考が行われ、前田健康教授が歯学部長に選考されました（平成29年4月1日付）。これに伴い、歯学部の執行部は以下のように選出されました。

歯学部長 前田 健康

副歯学部長（評議員・学務） 小野 和宏

副歯学部長（渉外・建物） 小野 高裕

副歯学部長（広報・国際） 魚島 勝美

副歯学部長（研究） 寺尾 豊

副歯学部長・歯学科長 宮崎 秀夫

学部長補佐 大内 章嗣

口腔生命福祉学科長 葭原 明弘

平成29年度概算要求事項の内示について

平成29年度政府予算案が決定されたことにより、文部科学省より歯学部に関係する項目として以下の内示がありました。

◇基幹運営費交付金（機能強化促進分）

- 戦略① 新潟大学型質保証による学位プログラムの推進を中核とした教学システム改革〈人材養成システム改革〉

- ◇（プロジェクト）現代社会ニーズに応える実践的口腔医療人育成プログラム等による質保証システム構築－質保証による国内標準化教育モデルの策定・実践－

- 戦略② 「環東アジア」地域教育研究拠点形成と地域社会への還元システム構築〈社

会貢献システム確立〉

- ◇（プロジェクト）国際・地域ネットワーク構築による現代社会的課題の対応－グローバル環境下で育む地域・国際医療福祉貢献－

- 戦略③ 脳・神経科学分野はじめ連携・融合研究促進のためのネットワーク型研究体制転換等によるイノベーション・システムの確立〈イノベーション創出環境醸成〉

- ◇（プロジェクト）若手研究者が集うレジリエンスな口腔保健教育研究拠点の形成－ネットワーク型教員組織の構築と実質化による総合的な機能強化－

歯学部銘板の設置について

歯学部は昨年歯学部創立50周年記念式典、祝賀会を開催し、その際、燕市^{ぎよくせんだう}玉川堂より、歯学部銘板（花田晃治名誉教授書）をご寄付いただきました。この度、槌起銅器で作成された歯学部銘板を改修工事が終了した歯学部玄関に掲げました。



国立台湾大学歯学部、オーストラリア・Charles Sturt University歯学部、タイ・チュラロンコン大学歯学部、香港大学歯学部との部局間交流協定締結について

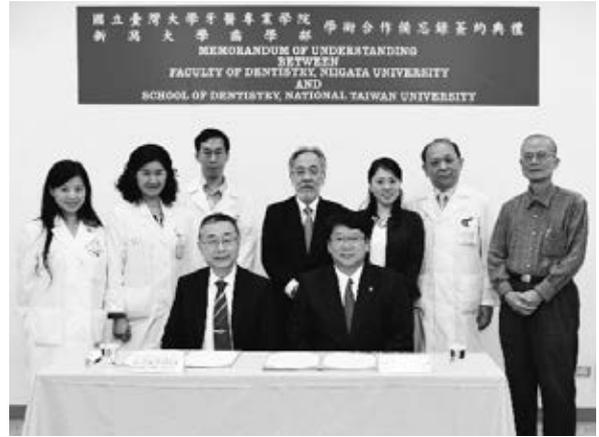
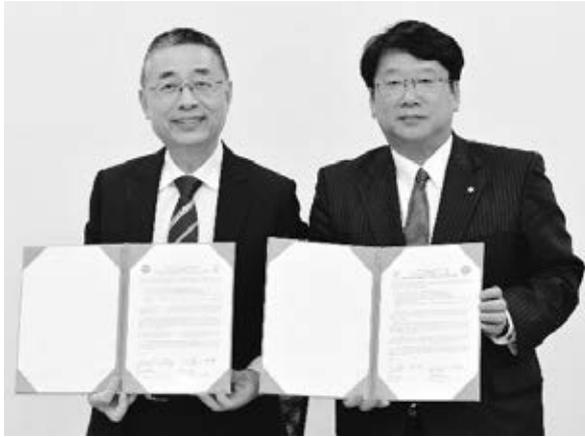
歯学部ではグローバル人材育成の目標の下、国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。

この度、台湾・国立台湾大学歯学部、オーストラリア・Charles Sturt University歯学部から部局間交流協定締結の強い要望を受け、手続きを進めてきましたが、手続きが完了し、前田歯学部長、魚島副学部長（国際交流担当）、照沼教授が平成29年1月18日に台湾大学歯学部を、また前田歯学部長、魚島副学部長（国際交流担当）が平成29年2月6日にCharles Sturt University歯学部を訪問し、部局間交流協定を締結しました。また2月11日にはタイ・チュラロンコン大学歯学部

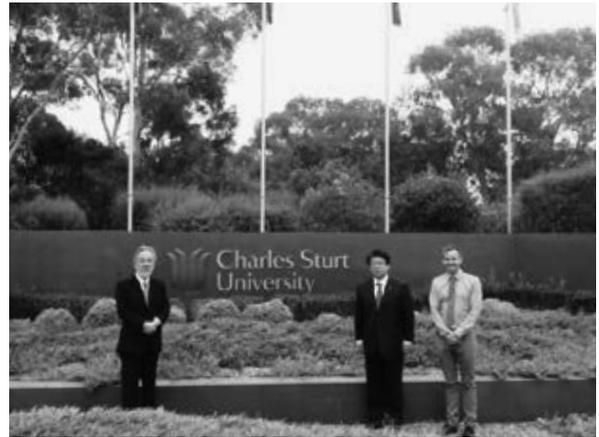
とさらに香港大学歯学部とも部局間交流協定を締結しました。

台湾大学およびチュラロンコン大学は台湾、タイのリーディング大学であり、またCharles Sturt University歯学部との締結は本学初めてのオーストラリアの大学との交流となります。この部局間交流協定には学生交流に関する事項も含まれており、これで、東南アジアからは始まった学生交流の輪が、欧米、南米さらには豪州と世界に広がっています。

またタイ・コンケン大学との大学間交流協定（責任部局：歯学部）も更新されました。



台湾大学歯学部との部局間交流協定調印式



オーストラリア・Charles Sturt University歯学部との部局間交流協定の様子



タイ・チュラロンコン大学歯学部との部局間交流協定調印式

国際シンポジウムの開催について (2月10日開催)

新潟大学歯学部は文部科学省機能強化経費の補助を受け、タイ王国プリンス オブ ソンクラ大学 (PSU) 歯学部と共催で、平成29年2月11、12日の両日、タイ王国サムイ島でInternational Symposium on Human Resources in Practical Ora Health and Treatmentを開催しました。C. Charoemratrate PSU歯学部長、前田歯学部長の開会挨拶のあと、3つのシンポジウム、口頭ならびにポスター発表、照沼教授、大峽教授、小野(高)教授らのKeynote Lectureが行われ、活発な議論が行われました。また12日にはインドネシア、台湾、タイ、ベトナム、ミャンマーの歯学部長が集まり、学生交流を含めた海

外交流についての意見交換を目的としたDean's meetingが開催されました。

本シンポジウムの目的の中には大学院生、若手教員の英語での発表能力の向上と海外ネットワーク形成があり、講演、質疑応答はすべて英語で行われました。これまでタイ、インドネシアで同様なシンポジウムを数回開催してきましたが、年々、英語でのプレゼンテーション能力が向上しているように思われると共に東南アジアの各歯学部の本歯学部に対する期待が年々高まっている様子がうかがえました。東南アジアの歯学部長からは次年度以降も継続して本シンポジウムの開催希望が寄せられています。



さくらサイエンスプランの採択

科学技術振興機構（JST）は産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指す「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」を実施しています（<https://ssp.jst.go.jp/outline/index.html>）。この度、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授が提案した「超高齢社会に求められる歯科医学研究Dental and orofacial research required in a super aged society」が平成28年度第3回募集に採択されました。

この取組は「世界的に高齢社会に向かっていく中で、歯科医療に求められるのは食べる機能をも

つ口腔の医療であると考え、その礎となる歯学研究について、新潟大学で行われている様々な研究を見学・体験する機会を与える」ものです。タイ・タマサート大学から2名、台湾・陽明大学から4名を招聘し、日本での研修の機会を与えるものです。計6名の研修生は平成29年2月1日～平成29年2月10日の間、来学し、井上教授以下摂食嚥下リハビリテーション学分野のスタッフのもと、最新の摂食嚥下リハビリテーションに関する研修を受け、帰国しました。井上教授は平成28年度日本学術振興会事業「ひらめきときめきサイエンス」にも採択されており、研究成果の社会発信に貢献する事業に単年度で2件採択されるという快挙となりました。

大学間連携共同教育推進事業 最終成果公開シンポジウムの開催について

新潟大学歯学部は平成24年度文部科学省 大学間連携共同教育推進事業に基幹校として採択され、東北大学歯学部、広島大学と共に「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」を推進してきました。このプログラムは3大学の特色ある教育資源を提供し合い、特色ある歯学教育の補完により3大学歯学部教育の高度化を目指すもので、本年度が最終年度となります。本事業の最終成果公開シンポジウムが平成28年12月2日に新潟市のオークラホテル新潟で開催されました。シンポジウムでは5年間にわたる事業成果について数値目標の達成状況、卒業時の臨床能力担保への対

応、海外共同派遣事業、共同講義およびサマースクール開催等についての取組成果が発表され、学外外部評価委員およびステークホルダー委員との総合討論に加え、外部評価を受けました。本取組の一つである臨床技能評価の基本コンセプトおよび評価方法は、近い将来全国的に導入される予定の臨床実習後技能評価試験への基礎データとして提供されることとなっています。なお、本事業は昨年度の間中評価ではA評価、また今年度実施されたフォローアップ評価でも指摘事項がなく、順調に事業が進行しています。



前田歯学部長による事業成果説明



総合討論の様子

デンカ（株）、デンカ生研（株）との 研究交流会開催について

新潟大学は昨年、デンカ株式会社と包括連携協定を締結しました。この度、平成29年1月24日に新潟大学駅南キャンパスときめいとにおいて、新潟大学歯学部およびデンカ（株）、デンカ生研（株）との若手研究者交流会を開催しました。本

歯学部の研究ニーズの紹介を行うと共に、研究成果の企業化への道を探る初めての試みとなり、予定時間を大幅に超える活発な議論が交わされました。詳細については寺尾教授が寄稿していますので、ご参照下さい。

ミャンマー・ヤンゴン大学歯学部への 医療チーム派遣

新潟大学歯学部はミャンマー・ヤンゴン歯科大学と部局間交流協定を締結していますが、Their Kyu前学長、Shwe Toe学長より、ミャンマーで患者の多い口唇口蓋裂患者に対する医療支援が要望されていました。平成27年度より、顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授と歯科麻酔学分野の瀬尾憲司教授による医療チームがミャンマーでの

医療支援活動を開始しました。今年度は平成28年12月19日から1週間ヤンゴンに滞在し、10例の手術を実施してきました。ミャンマーでは医薬品等が不足しており、いろいろな分野からの支援を必要としていますので、皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

平成28年度科学研究費審査員表彰について

日本学術振興会は学術研究の振興を目的とした科学研究費の業務を行っており、また学術システム研究センターにおいては、審査終了後、審査の検証を行っています。この度、宮崎秀夫教授と寺

尾豊教授が平成28年度科学研究費審査員表彰をうけました (http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/26_hyosho/hyousyou_2016.html)。

学生支援に対する寄付について

このたび、佐藤泰助様（故人 歯学科三期生）の「新潟大学歯学部の学生の将来のために役立てていただきたい」という御遺志にもとづき、ご遺族の佐藤京子様より500万円が新潟大学歯学部に

寄附されました。

そのご厚意に対して深く感謝申し上げますとともに、今後、佐藤泰助奨学寄付金として歯学部学生の奨学及び援助に有効活用させていただきます。

留学生交流支援制度（短期受け入れプログラム及び短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果が通知されました。この事業はこれまでショートステイ・ショートビジット（SSSV）事業として展開されてきましたが、一昨年度より、新たに留学生交流支援制度として発足したものです。歯学部から短期派遣事業（短期研修・研究型）として「3大学歯学部協働による国際歯科医療人育成プログ

ラム」、「歯学部学生の世界展開力涵養支援によるグローバル人材養成プログラム」の2件が採択されました。

なお、本事業による奨学金受給には各種制限が設けられており、特に成績不良の学生には奨学金を支給できないこととなりましたので、短期留学希望者は成績向上に努めるようお願いします。



口腔生命福祉学科の10年 —新たな10年に向けて—

口腔生命福祉学科長 葭原 明 弘

1. 教育理念と特色について

口腔生命福祉学科は、平成16年に全国に先駆けて「口腔や摂食・嚥下の専門知識をもち、保健・医療・福祉を総合的に担える専門家を養成すること」を目的に設置されました。教育理念は「保健・医療・福祉に関する深い理解と専門的知識に基づき、これらを総合的に思考・展開できる指導的人材を養成する」であり教育目標として「1. オーラルヘルスプロモーションを理解し、展開できる人材、2. 全人的保健医療福祉を提供できる人材、3. 自発的な生涯学習を行うことができる人材、4. チームワークに基づく効果的な業務が行える人材」を掲げています。

大島勇人学科長のもと、第1期生となる学生20人（男性2人、女性18人）、4人の専任教員と6人の予定教員（教授3、助教授1）という体制でスタートしました（集合写真参照）。設立当初はすべてが全くないところからのスタートになりますので、多くの苦労があったと推察されます。歯科衛生士を養成する4年制大学課程としては東京医科歯科大学口腔保健学科と並んで全国初の開設となりました。なお、東京医科歯科大学は社会福祉士国家試験受験資格については選択制のカリキュラムを採用しています。その後、広島大学歯学部など、歯科衛生士を養成する4年制大学課程が毎年のように設置されていきました。

ところで、口腔生命福祉学科が設立された平成16年には、新潟県中越地方をマグニチュード6.8の大地震が襲いました。この時、歯学部、医歯学総合病院等が実施する歯科医療救護活動において、避難所等における巡回口腔保健相談・指導のニーズが高かったことから、口腔生命福祉学科教

員も積極的に参加・協力しました。この時は、1年生しかいなかったため、実現できませんでした。平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震の際には、ある程度状況が落ち着いたところで関係者にご了解を頂き、希望学生を引率して、巡回口腔保健相談・指導のお手伝いをさせてもらうことが出来ました。歯科衛生士としても、社会福祉士としても得るものが多い、非常に貴重な体験になったのではないかと思います。

この10年間、学科長は平成16年：大島勇人教授、平成17年～19年：富沢美恵子教授、平成20年～23年：鈴木昭教授、そして平成24年～私葭原明弘と引き継がれていきました。現在、専任教員は、口腔保健学分野：9人、福祉学分野：6人です。この中で口腔生命福祉学科出身者は、米澤大輔助教（1期生）、諏訪間加奈助教（1期生）、および小田島あゆ子助教（2期生）です。

2. 教育方法について

当学科の教育方法として特徴的なのは、2年次からの専門教育にPBL（Problem Based Learning）を採用していることです。PBLとは実社会におけるケースを学習のきっかけとして、そこに潜む問題を拾い出し、小人数グループでの討議により問題を解決していく過程です。PBLの風景写真をご覧ください。具体的には、患者さん、または住民の経過をもとに書かれたシナリオから事実を拾い出し、その事実から生じる疑問や考えを話し合います。学生たちは疑問を解決する、または考えを検証するためにどのような知識が不足しているか確認し、学習課題を列挙します。その後、学生たちはグループから離れ、学習

課題について調査、自習し、1週間後に招集された際に、調査した結果をグループで共有、検討し、自分たちの考えが妥当であったか否か議論し、問題を解決します。単なる知識の詰め込みではなく、自ら考えながら問題を解決していく能力を培っています。

PBLの評価方法として改良版トリプルジャンプを京都大学高等教育研究開発推進センターと共同開発し、平成25年度から口腔生命福祉学科のカリキュラムに導入しています。改良版トリプルジャンプは、ワークシートによる筆記課題とロールプレイという実演課題を組み合わせ、2つの異なるタイプのルーブリックを用いたパフォーマンス評価です。これまでの経時的な評価結果から、学生の問題解決能力の向上が確認できています。

3. 大学院の設置について

歯科衛生士養成課程の修業年限延長や、社会福祉士および介護福祉士資格・養成制度の見直しが行われるなど、近年、保健医療福祉サービス従事者の質の確保が課題となってきています。加えて、介護・障害者福祉・医療関係者の側からの摂食嚥下リハビリや口腔ケアに対する関心や期待も急速に高まっています。こうした背景に鑑み、口腔を中心とした生命医療科学を基盤として、①高度な知識・技術を有し、総合的な口腔保健医療・福祉サービスの分野で指導的役割を果たせる実践的高度専門職業人、②口腔生命科学と実践的な社会福祉学領域との統合的・学際的研究および教育

を推進できる人材の育成を目的とした大学院修士課程の設置に向けて検討を進めてきました。平成19年12月3日に文部科学省より、新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻（修士名称は「口腔保健福祉学」として開設が認可されました。平成20年4月には2年制・定員6名の大学院口腔生命福祉学専攻修士課程（博士前期課程）が、平成22年4月には3年制・定員3名の同専攻博士後期課程が設置されました。本専攻は更に高度な知識・技術を身につけてステップアップを目指す口腔生命福祉学科卒業生への受け皿となることはもちろんですが、社会人枠も設定して、広く保健医療福祉の現場で働いている方にも門戸を開放しています。こうした方に入学して頂き、摂食嚥下リハビリテーションや口腔機能管理に関するリカレント教育の場を提供するとともに、多職種協働による学際的研究が広がっていけばと考えています。

4. これからの10年に向けて

口腔の健康は身体の一部として全身の健康に大きく関わっています。「元気で長生き」は全ての人たちの願いです。そのためには、口腔機能を健康に保つことが重要な意味を持っています。もちろん、口腔の健康だけで健康寿命の延伸を達成することはできませんが、口腔の健康なくして健康寿命の延伸はかないません。

近年、多職種連携の必要性が叫ばれるようになってきました。歯科においても、医師、看護師、



PBL風景

言語聴覚士、作業療法士、栄養士、管理栄養士をはじめ多くの方々と連携することが求められています。しかし、他職種との連携の構築は思ったほど簡単ではありません。特に歯科保健がテーマとなると、他の職種の方から歯科保健について声がかかる事例はそれほど多くありません。やはり歯科医師や歯科衛生士が主体となって活動を行っていく必要があります。

口腔生命福祉学科では学生全員が、歯科衛生士と社会福祉士の養成に向けたカリキュラムを受け、卒業により歯科衛生士と社会福祉士の国家試

験受験資格が得られます。したがって、彼ら、彼女らは、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスをもって社会に旅立っています。歯科衛生士も社会福祉士も仕事の対象は全てのライフステージに及んでいます。いずれの年代においても歯科の視点から福祉のことを考え、また福祉の施策に口腔の健康に関することを取り入れたりしています。

これからの卒業生の活躍を大いに期待しています。



2004-4 学科集合写真

歯学部で「社会福祉を学ぶこと」の意味

福祉学分野 高橋英樹

若者による社会福祉の認識は、概してステレオタイプである。多数の若者にとって、社会福祉は「高齢者介護」「障害者支援」などと同義とみなされる。巷に氾濫する情報は多様にみえてその指向には偏りがあり、情報を自らの“日常”という文脈のなかで意味づけるための経験に乏しい若者が、そのように認識してしまうのもまた当然である。仮に、父子家庭で育成する一時期の代替養育として児童養護施設を利用したとか、「不登校」によりスクールソーシャルワーカーと継続的に面接していた経験などがあつたとしても、それは極めて個別な事情に帰結する稀な経験であり、普遍的な社会福祉の範疇には属さない別次元の出来事と認識される。

そうした若者のステレオタイプな認識とは裏腹に、社会福祉は膨張を続けている。生活困窮者支援、成年後見等権利擁護、被虐待者支援など、近年、制度フレーム内に定位した分野だけでも枚挙にいとまがない。こうした事態は、長らくセーフティ・ネットとして機能してきた家族、地域、職場といった固定的な中間共同体の瓦解に比例するかのよう急激に前景化した。つまり、人々は中間共同体の拘束から“自由”になりつつある反面、人生のあらゆるステージに潜むリスクに対して一次的な防護壁を失いつつあり、それを補完する社会システムの必要性が構造的に生じたということもできよう。加えて、人々の「生き方」の多様性（diversity）尊重が共有の価値として意識されるなかで、これまでは「例外的な存在」とされてきた一群の人たち——ホームレス、ひきこもり者、自殺企図者、累犯障害・高齢者、LGBTなど、何らかの「生きづらさ」をかかえた人たちが決して社会の“暗数”ではなく、数多く存在する現実も可視化されつつある。こうしたなかで、私たちの社会は彼／彼女らを排除せず包摂する社会（≡共生社会）であろうとする言説が流布された。こ

のような変化が、社会福祉の膨張を動機づけ、駆動したと考えられるのである。

以上のような現実認識を踏まえ、「歯学部で社会福祉を学ぶ意味」を検討してみたい。自明ではあるが、歯学部は、口腔生命福祉学科において社会福祉士養成課程を履修し、将来的に社会福祉の分野で働くことを想定する学生だけで構成されるわけではない。学生の大多数は、歯科医師や歯科衛生士という歯科医療、口腔保健の分野での活動を想定している。こうした学生にとって、社会福祉を基礎付ける「ものの見方・考え方」に触れる意味は何か。

1つには、「社会的包摂」や「共生社会」といった理念を、単なる「お題目」ではなく、共同体を維持していくために必須な考え方であると認識することにある。「働く」ことや「学ぶ」ことは、単なる生計維持や自己実現の手段ではなく、共同体を構成する1人として、共同体を維持するために何らかの役割を果たすことにある。ましてや、歯学部で学ぶ学生には、専門知識・技術・態度に基づく「対人援助」が期待されている。対人援助は、強者が弱者に施すことではない。要介護高齢者は「いずれそうなるかもしれない将来の自分」であり、社会的養護を必要とする子どもや障害のある子どもは「かつてそうであったかもしれない自分」である。そうしたロジックを敷衍すれば、「社会的弱者」とみなされる人たちが社会的に排除されている人たちを「自分とは無関係な他者」ではなく、「拡張した自分自身」であり「同胞」であると認識することも可能になる。共同体を構成する他者は自分自身の拡張であり、「専門的な知見」を学びそれを基盤とした対人援助を行う行為は、この社会、この共同体を維持するために自らが受け持った役割を果たすことと同義である。そのような思考に到達するためには、「社会的弱者」とみなされる人たちが社会的に排除されている人

たちの現実を知り、そうした人たちへの支援やそのフレームがいかにして構想され形成されてきたかを明らかにする視点の取得（＝社会福祉を学ぶこと）が有効と考えられるのである。

もう1つは、社会福祉援助実践（＝ソーシャルワーク）に固有の「対象者との関係性」のあり方に接し、その考え方を循環参照することにある。ソーシャルワークは、その実践が生起して以降、「上から目線」で指導する援助者と、援助者が想定する「被援助者像」に合致する被援助者という「非対称な関係」から離陸し、援助者と被援助者との「対称的な関係」の構築を模索し続けてきた。それは、ソーシャルワークの歴史的展開における次のような経時的プロセスに見出すことができる。彼／彼女らの存在そのものを無条件で受け入れ（＝受容）、市民として当然の権利を認められていない者たちに本来の権利を付与し（＝エンパワメント）、彼／彼女らの欠点や不足（＝病理）に焦点をあてるのではなく強みや長所を見出してそこから理解するよう努め（＝ストレングス視点）、彼／彼女らが生きてきた物語（主観的な意味）を彼／彼女ら自身から教えてもらい（＝無知

のアプローチ）、彼／彼女らが「生きる物語」を伴に紡ごうとする実践（ナラティブ・アプローチ）……。こうして、ソーシャルワークは、援助者と被援助者との「対称的な関係」でのコミュニケーションとそれに基づく援助実践を目指してきた。仮に「共感」を意図した言葉であっても、その言葉が、恐れられあるいは信頼できないと認知された者から発せられたのであるならば、言葉に込めた思いが相手に届くことはない。それは、歯科医療や口腔保健における対人援助の場にも通底するコミュニケーションのあり様であろう。

いずれにせよ、社会福祉と歯科医療・口腔保健には「対人援助」という共通項がある。そして、援助を必要としている者が生きるのは、どこかの遠い世界や架空の世界ではない。歯科医療・口腔保健を学ぶ若者たちが日常をすごす、まさに「身の回り（の地域）」で繰り広げられている。先験的に、その人たちが抱える「生きづらさ」を把握し、対称的な関係性に基づく援助を展開することは難しい。まずは、その人たちが「私たちの周りで生きる現実」を知ることが重要と考える。



口腔生命福祉学科を卒業して

1期生 米澤大輔

今回、口腔生命福祉学科の10年間の軌跡を振り返るという特集を組んでいただき、1期生として原稿依頼を頂きました。1期生は多くの分野で活躍されている方がたくさんいます。その紹介だけで字数制限が埋まってしまうので、恥ずかしながら自分の卒業後から現在に至るまでの経緯について書かせていただきます。

私は卒業後、本学大学院に進学しました。大学院には、博士課程前期・後期と合わせて5年間在籍し、研究のことなど何も分からないところから、研究の基礎を丁寧に教えていただきました。また、当専攻の特色も生かし、前期課程では、歯周病学についての基礎研究をテーマに。後期課程では、福祉研究で質的研究をテーマに。と、まったく異なる分野について学ぶことが出来ました。後期課程在学中は、福祉研究を学ぶ傍ら社会人大学院生として新潟県福祉保健部に所属し、児童養護施設・知的障害者総合援護施設にて働いておりました。その時の経験は、今の自分の職業に活かすことが出来ていると思います。

現在は、母校に戻り、教員として働かせていただいております。自分が受けてきた教育を、今度は教育者の視点から見たとき、口腔生命福祉学科の教育の素晴らしさに改めて驚かされました。講義形式で教えられるだけではなく、学生主体の小グループ学習法を導入されたことも、当時は、「調べものが多くて大変。講義の方がよいのでは」と

感じることもありました。しかし、社会に出てみると、分からない問題に突き当たり、自分で多くのことを調べなければならないことは山のようにあります。また、自分1人では出来ず、人と連携しながら行う課題がたくさんあることに気付かされます。これらの問題・課題に対して、取り組む能力の基礎が大学4年間を通して身についたことは、本当に自分の大きな財産になっていると強く感じています。今後は、口腔生命福祉学科の教員として、今まで私が学んできた経験を現在在籍している学生、将来入学してくるすべての人に伝えていけたらと思います。微力ながら、今後の口腔生命福祉学科の発展に尽力させて頂きたいと思いますので、なにとぞご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、この場をお借りいたしまして、これまで口腔生命福祉学科の教育に携われた先生方および同級生に御礼申し上げます。



新潟市職員として就労して

口腔生命福祉学科3期生 永井里美

早いもので、大学を卒業してから7年が過ぎようとしており、社会人になってからの時間の経過の早さに驚く毎日です。

私は平成22年3月に口腔生命福祉学科を卒業し、取得した社会福祉士の資格を活かし、福祉職採用の公務員として新潟市で就労しています。最初に配属されたのは、東区役所の保護課でした。そこでは、5年間生活保護業務に携わり、事務処理の他にも、面接や訪問で利用者や関係機関と直接関わる機会が多く、とてもやりがいを感じておりました。また、利用者の自立を支援するための自立支援プログラムの立案にも携わらせていただき、自身のステップアップにも繋がりました。

平成27年4月からは、新潟市児童相談所にて勤務しております。

児童相談所は、虐待や非行、障がいなど、児童に関する様々な相談に応じています。私は児童福祉司として、主にケースワークを行っています。業務内容としては、児童福祉施設への入退所調整、支援が必要な世帯へ家庭訪問をし、保護者や児童と面接を行うなどです。児童福祉施設や区役所、学校、医療機関や警察など様々な関係機関と連絡を取り合い、連携する機会も非常に多く、情報収集や関係性の構築はとても重要だと感じております。また、児童相談所内で行われる会議の他に、ケース会議や要保護児童対策地域協議会、学校警察連絡協議会など会議に出席する機会も多く、多忙な毎日です。

対人業務であり、児童を保護者と離す必要がある時には、一時保護を行うこともあるため、保護者との間に軋轢を生じることもあります。児童や保護者相手にケースワークを行っても、うまくいかないと感じることも多く、辛いことも多いです。しかし、世帯に介入することで、世帯状況が改善したり、信頼関係が構築されるなど、やりがいを感じることも多いです。特に、関わった児童の表情が明るくなったのを見ると「頑張ってた良かった」と感じます。

公務員というと、比較的楽なイメージを持たれることも多いですが、実際はなかなか厳しいです。しかし、内部環境は良く、上司や同僚に気軽に相談できたり、助け合って業務に取り組んだりできる状況は自慢したいくらいです。また、業務内容も決して楽ではありませんが、やりがいは十分あります。もし、公務員試験を受けようかと思っている後輩達がこのページを読んでもらうのであれば、是非受験することをオススメしたいと思います。



筆者：左

口腔生命福祉学科を卒業して

口腔生命福祉学科6期生 下内美樹



こんにちは。口腔生命福祉学科6期生の下内と申します。平成25年に卒業してから4年が経ち、時間が経つのは本当に早いなぁと感じています。私は学生時代から今に至るまで歯学部ニュースの執筆は免れてきたのですが（笑）この度、初めて機会をいただきましてとても嬉しく思います。文章を書くのは苦手ですが、卒業して思うことを私なりに書かせていただきたいと思います。

口腔生命福祉学科の大きな魅力の1つは、歯科と社会福祉を学び、卒業後の進路は多くの可能性があることだと思います。ですが、それ故に、卒業後は歯科の道か、社会福祉の道か、自分の進路を悩む学生も多いのではないかと思います。私もその中の1人でしたが、地域のお茶の間へ訪問したことをきっかけに、学生時代の様々な経験から、将来は公衆衛生に携わりたいと思うようになりました。

私は卒業後、新潟市保健所に数年勤務し、現在は新潟市中央区役所健康福祉課で働いています。行政の歯科衛生士として地域の歯科保健推進に日々取り組んでいます。仕事の内容としては、地域の歯科疾患の状態を把握して、乳幼児期から高齢期までライフステージごとに歯科保健事業を実施しています。具体的に言うと、妊婦の方やお子さんの歯科健診で歯科相談や保健指導をしたり、子育て支援センター等で親子を対象に、お子さんの歯磨きの仕方やむし歯予防の方法等についてお話をしたりしています。乳幼児の歯科健診では、

お子さんのお口のことに関して意識がとても高いお母さんもいれば、無関心なお母さんもあり、保健指導の難しさを日々感じています。また、成人や高齢者の方に対して、歯周病予防や、体やお口の体操、噛んで飲み込む機能などについて歯科講話を行っています。

この仕事は、歯科医師、保健師、栄養士、作業療法士など様々な職種の方々と連携を図りながら進めていく仕事となります。また一市職員として、もちろん歯科業務でない様々な仕事もありますが、多職種の方々と意見交換や協力しながら、地域の方々が健康な生活を送っていただけるように支援をしています。私は、この仕事に携われて毎日とてもやりがいを感じています。

また、私は周りの方々に大変恵まれていると思います。皆で協力して実習やテストを乗り切ったりばかなこととして遊んだりした仲間達や、進路に悩んだ時にお話を聞いて下さったり大変お世話になった先生方との出会いが、今の私に繋がっていると思います。様々な分野で活躍している仲間達の話や聞くととても刺激的で、私も頑張らなきゃ！と思います。私は口腔生命福祉学科で本当によかったと思っています。

最後に6期生の皆さんへ。またみんなで集まりましょう！楽しみにしています。



口腔生命福祉学科を卒業して

口腔生命福祉学科 8 期生 赤塚 真奈

口腔生命福祉学科 8 期生の赤塚と申します。私は卒業後、新潟市職員（社会福祉職）として採用され、現在は東区役所の保護課で生活保護のケースワーカーとして働いています。

保護課での日々の業務は家庭訪問や面接などを通じて、担当している世帯の生活状況を把握し、制度に基づき適正な保護費の支給や自立した生活に向けての助言や指導を行っています。単に収入が無い人、少ない人が経済的に自立するための支援だけではなく、社会的に孤立している人が必要なサービスを受けられるよう介護や障がい福祉サービスの利用につなぐなど、社会的自立、日常生活上の自立への支援も行っています。とは言え、各世帯を支援していくにあたっては、ケースワーカーの力だけでは限界があるため関係機関（例えば社協、地域包括支援センター、医療・介護機関）や親族、成年後見人、民生委員、保健師など各分野の専門職との情報共有や連携が重要となります。加えて、生活保護制度は他法優先であるため、各世帯の自立に資する様々な制度の知識も必要です（各種福祉制度の知識についてはもちろんですが、支援の内容によっては戸籍、登記簿、アパートなどの契約書から裁判の判決書まで幅広い文書や書類の読み取り能力が問われます）。また人対人の関係であるため、信頼関係の構築も重要だと感じています。支援を必要とする人は様々な悩みを抱えている場合が多いため言葉遣いにも

気をつけなければなりません。

ケースワーカー 2 年目ですが、まだまだ力不足で職場の先輩方に助けをもらいながら日々の業務を行っています。大学の講義で生活保護について学びましたが、実際に現場に出て初めて、制度の理解と説明の難しさ、支援の難しさ、人との関わりの難しさを実感しています。自分が行った支援が世帯にとって最善だったのか…結果は全てが目に見えるわけではありませんが、少なくとも私に関わった人たちが、その後幸せな人生を送れるよう支援ができたと思っています。

現在東区保護課には私のほかに 7、9 期生も所属しています。卒業生がいることはとても心強いです。そして卒業後も集まってくだらない話ができる（時には真剣な話も…）8 期生の存在も私の力になっています。卒業生のみなさまは歯科、福祉とさまざまな分野で活躍していらっしゃると思いますが、どこかでお会いした際にはどうぞよろしくお願い致します。



筆者：左

准講会の活動について

小児歯科学分野准教授 齊藤 一 誠

小児歯科学分野の齊藤です。今年度の准講会の幹事を口腔生命福祉学分野の中川兼人先生と一緒にさせていただいております。准講会のメンバーは、歯学科と口腔生命福祉学科の准教授と講師で構成され、平成28年12月末で42名の先生方が会員となっています。准講会は、年齢が比較的近い先生が多く、臨床・研究・教育の各方面に精力的に活動している先生方が多いのが特徴です。私が以前に勤務していた2つの大学の歯学部では、このような会はありませんでした。そのため、異動しても他科の先生方と知り合う機会はあまりなく、分からない事があってもなかなか聞けないなど、何かと不自由を感じていましたので、准講会のような横のネットワークの構築ができる集まりがあると、その大学のしきたりなどを聞いて非常に有り難いです。

それでは、准講会の主な活動内容を以下に示します。

・前年度の歯学会で発表した大学院生で2番目に優秀だった発表に新潟歯学会奨励賞を授与

平成28年4月の第1回歯学会総会において、小児歯科学分野の村上智哉先生へ新潟歯学会奨励賞を授与しました(写真)。表彰状と記念品の授与は幹事のお仕事でしたので、私が准講会を代表いたしまして、授与式に参加させていただきました。受賞した先生にとっては非常に励みになると思いますし、村上先生をはじめこれ

から受賞される若手の先生方の今後のご活躍を期待しています。

・歯学部長候補者推薦委員会の准講会委員の選定

准講会のメンバーからは、八木稔先生、依田浩子先生、吉羽邦彦先生を推薦しました。

・准講会総会および忘年会の開催

例年、12月に准講会の総会を開催し、その後親睦を深めるために忘年会を行っています。今年度は、12月21日(水)17時から総会を、また18時半より古町ワイン酒場リリーフランクにて忘年会を開催しました。普段、皆さん臨床、教育、研究に忙しく、なかなかお会いしてお話する機会もないので、忘年会は貴重な交流の機会です。

また、今年度も人事異動において喜ばしいお知らせがありました。口腔再建外科の芳澤享子先生は、松本歯科大学の教授へ、口腔保健学分野の石川裕子先生は、九州看護福祉大学の教授へ、微生物感染症学分野の小田真隆先生は、京都薬科大学の教授へそれぞれご栄転されました。3名の先生方の益々のご活躍を祈念いたします。

また、新たにメンバーに加わった先生もいらっしゃいます。口腔保健学分野准教授の柴田佐都子先生、組織再建口腔外科学分野准教授の片桐渉先生、口腔再建外科講師の小島拓先生の3名の先生方です。准講会のメンバーと一緒に頑張ってください！



新潟歯学会奨励賞の表彰(筆者:左端)



准講会忘年会(筆者:前列右から3人目)

SCRP報告

平成28年度SCRP日本代表選抜大会のご報告

ファカルティアドバイザー・
微生物感染症学分野 土門久哲

平成28年8月19日に、東京の歯科医師会館において、第22回スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会が開催されました。本大会は、歯科学者が自ら研究を行い、英語によるポスタープレゼンテーションを行うことにより、その研究結果を競うものです。現在、世界39ヶ国において開催されており、歯科界の発展を担うリーダーの輩出を目的としています。本年度はSCRP史上初めて、全国29校すべての歯科大学・歯学部が本大会へ参加しました。

私がファカルティアドバイザーを務めさせていただくことになったきっかけは、大会前年の11月頃、当時歯学部3年生だった武田渉君から、「微生物感染症学分野で研究を行いたい」という積極的な申し出があったためです。我々の研究室では、肺炎球菌が引き起こす肺炎の重症化メカニズムについて研究を行っています。当時、肺炎球菌は毒素を放出することで、免疫細胞である好中球を攻撃して、細胞内部からエラスターゼと呼ばれる酵素を漏出させることを明らかにしていました。このエラスターゼが、肺炎においてどのような役割をしているのか、まだ明らかになっていないことを武田君に説明したところ、大変興味を持ってくれました。そこで、研究タイトルを「好中球エラスターゼがマクロファージの貪食能およびサイトカイン産生に及ぼす影響」と設定し、すぐにSCRPへ向けて研究を開始しました。武田君は、部活等もある限られた時間の中で、エラスターゼが肺における宿主の免疫を抑制し、肺炎球菌による感染拡大の一因となることを明らかにしてくれました。参加登録、要旨の作成、英語ポスターやプレゼンテーションの準備など、かなり苦

労したと思いますが、十分に仕事を全うしてくれました。これらの準備は、国内の学会発表以上の労力が必要であったであろうと推察します。大会では、惜しくも上位入賞を果たせませんでした（残念ながらファカルティアドバイザーは発表に立ち会えません）、審査員の先生方からは堂々としたプレゼンテーションであったと聞き及んでおります。

彼の研究の一部は、平成28年11月28日に英国科学誌「Scientific Reports」で公表いたしました。また、本年1月6日には、新潟日報にも本研究が取り上げられました。近日中には続報をお届けできるよう、研究を続けています。当分野での研究経験を、武田君の今後の学生生活に活かしていただきたいと思うとともに、リサーチマインドのある歯科医師として育ててくれることを期待しています。

最後になりますが、SCRPの普及やお世話にご尽力いただいている魚島勝美教授（生体歯科補綴学分野）、石田陽子先生（歯学教育研究開発学分野）、研究活動においてご助言いただいた寺尾豊教授（微生物感染症学分野）、小田真隆先生（現京都薬科大学教授）に心より感謝申し上げます。



SCRP日本選抜大会への参加を通して

新潟大学歯学科4年 武田 渉

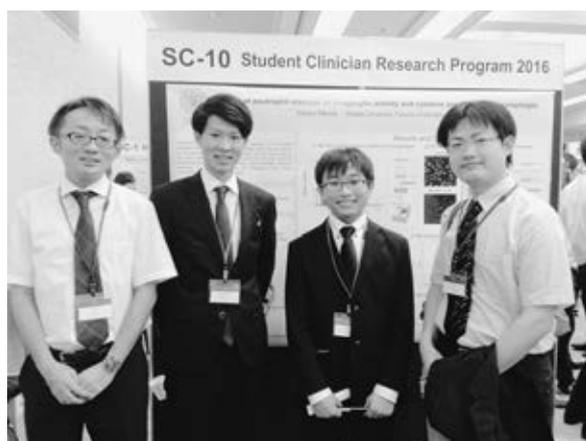
去る2016年8月19日、私は新潟大学の代表としてスチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会に出場させて頂きました。本大会は日本歯科医師会主催で毎年実施されており、学生が英語で研究発表を行い、研究内容及びプレゼン力のクオリティを競い合う大会です。

私の研究テーマは、「好中球エラスターゼがマクロファージの貪食能およびサイトカイン産生に及ぼす影響」でした。細菌性肺炎に罹患した際、本来は生体防御に働く好中球エラスターゼが何らかの機構により過剰な免疫応答を起し、自己組織を傷害しているという報告は本研究を行う以前からありました。しかし、その好中球エラスターゼがどのような機構で生体に影響を及ぼしているかは不明であったため、そのメカニズムを明らかにし、肺炎の予防法や治療法の開発に繋がる可能性を考えたことが本研究を始めるきっかけでした。

数ある分野の中で、私が免疫学のテーマを選択したのは理由がありました。それは、医療が目まぐるしく進歩した現在において、薬剤による治療が今や世界的に普及しています。その中でこれから生きる自分たちが、本来人間が持つ免疫力をもう一度見直し、病気にならない体を作るという予防医療を発展させることが必要と考えたからです。そんな思いを抱きながら、約1年の研究期間とプレゼン発表の準備を経て大会に臨みましたが、結果は残念ながら入賞には至りませんでした。2日間という短い大会期間を通して、私は、

多くのモノを得たような気がしました。1つは大舞台で自分が時間をかけてやってきた事を全て出し切った達成感です。そしてもう1つは、研究に対する凄まじいまでの情熱とリサーチマインドを持った各大学の代表者達と出会えた事です。本大会を通して沢山の仲間達と巡り会えた事は、私にとってかけがえのない財産であり、今後もこの繋がりを本当に大切にしていきたいと考えています。

最後に本大会に参加するにあたって、本当に沢山のの方々からのご支援とご協力を賜りました。今回の貴重な研究機会と環境を与えてくださり、私が免疫学を志すきっかけを作ってくださった微生物感染症学分野の寺尾豊教授、研究の基礎を何も知らない私に厳しくも本当に温かいご指導を日々下さった土門久哲先生、深夜に及ぶまで私のプレゼンのチェックをして下さった微生物感染症学分野の先生方に感謝を申し上げます。さらに私にアドバイスや激励のお言葉をしてくださり、支援して下さいました全ての皆様方にも重ねてお礼申し上げます。今後はこの経験を通して得たモノを自分の周囲や先輩、後輩へと伝え、いずれは社会に還元できるような存在になれるようこれからも日々邁進してまいります。



SSSV報告

2016年度 短期留学受入報告

特任助教（歯学教育研究開発学分野） 石田 陽子

本学で海外短期留学プログラムは、6年目となりました。本年度も、日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度（協定派遣/協定受入）に採択され、多くの短期留学生を迎えることができました。通称、ショートステイ/ショートビジット“SSSV”です。本制度（協定受入）の目的は、「日本の大学・大学院等が、諸外国の高等教育機関との学生交流に関する協定等に基づいて実施される日本への受入れ留学プログラムに参加する外国人留学生を対象として奨学金を授与し、留学受入を促進すること」であり、本学の目的としては学部生・院生という若い時期に積極的に外国の歯科学生と交流してもらい、英語力はもちろん、グローバルな視点を身に付け、将来国際的に活躍できる歯科医師になるきっかけとしてもらうことです。

本年度は総勢41名の短期留学生を受け入れました。協定校に募集をかける際、原則1大学2名を

奨学金授与枠としておりますが、ごらんのように4名や7名という大幅に多い人数が参加を希望してくれます。毎回、学内の多くの先生方からご指導を賜っているおかげです。真に感謝いたしております。この場を借りて御礼申し上げます。

歯学部学生はローテーション学修として、口腔解剖学、口腔生理学、歯科薬理学、予防歯科学、摂食嚥下リハビリテーション学、小児歯科学、歯周診断・再建学、口腔再建外科学、顎顔面外科学、生体歯科補綴学、歯科矯正学の各分野と、インプラント治療部、総合診療部にて、それぞれの教員による指導の下に診療見学をしたり講義を受けたりしました。大学院生は、表にありますように、本人の研究テーマに関連する教室に依頼し、3週間～1か月半の期間、ご指導いただきました。

今年度、ブラジルのノバファピ大学と新たに交流協定を締結し、受入が決まりました。もともと生体歯科補綴学で学位を取得した元国費留学生のFabricio Tapety先生が帰国して大学教員となり、卒業した新潟大学への信頼と母校愛から、このようなご縁を結んでくださいました。他にも、

時期	国名	大学名	学部生/大学院生	指導教室
4月	タイ	チェンマイ大学	学部生7名	ローテーション学修（以下同）
8月	台湾	国立陽明大學	学部生4名	-
11月	タイ	コンケン大学	学部生2名	-
11月	タイ	プリンスオブソンクラ大学	大学院生4名	組織再生工学/インプラント治療部、 歯科矯正学、生体歯科補綴学
1月	インドネシア	インドネシア大学	学部生2名	-
1月	インドネシア	ガジャマダ大学	学部生4名	-
2月	ブラジル	(初) ノバファピ大学	学部生3名	-
2月	タイ	コンケン大学	大学院生2名	硬組織解剖学、歯周診断・再建学
2-3月	インドネシア	ガジャマダ大学	大学院生1名	歯科矯正学/歯科薬理学
3月	タイ	チェンマイ大学	大学院生1名	摂食嚥下リハビリテーション学
3月	カナダ	プリティッシュコロンビア大学	学部生3名	-
3月	ベトナム	ホーチミン医科薬科大学	学部生2名	-
3月	ベトナム	ハノイ医科大学	学部生2名	-
3月	タイ	タマサート大学	学部生2名	-
3月	スウェーデン	マルメ大学	学部生2名	-

来年度は香港大学やオーストラリアの大学からも受入が始まる予定です。

2015年度に初めて、カナダのプリティッシュコロンビア大学（UBC）、スウェーデンのマルメ大学といった世界でも非常に有名な歯学部から留学生を受け入れました。彼らがどのような感想を持つのか、期待と不安が交じり合っていました。プログラムがたくさん組まれていて良かったという評価をいただきました。「日ごろPBLで学修しているので講義はとても貴重で、先生方が一生懸命講義してくださって感動した」（マルメ）、「自大学では口腔外科手術がまったく見学できないので非常に勉強になった」（UBC）等、嬉しい感想をいただきました。昨年度の感想になりますが、UBCのSean君からいただいたレポートを一部紹介いたします。

We had a great experience in Japan and got to taste all the different departments that Niigata University has to offer. We had an opportunity to see Prosthodontics, Endodontics, Orthodontics, and General Dentistry. In addition, we got to see the areas of swallowing disorders, which was very interesting because we do not have that at our university. The program also offered us the opportunity to visit a rural part of Japan (Joetsu) and observe how rural dentistry is practiced in Japan. These are experiences that I will forever appreciate

and cherish because not everyone will get that opportunity.

Before I came to Japan, what I wanted to get out of this trip was a better understanding of how dentistry is practiced abroad. In Canada, we have a very specific way of being taught and of practicing dentistry, so I was curious as to whether or not Japan had the same methods. What I have come to learn is that although there are many differences, for example how the Japanese do not use amalgam and refrain from getting implants due to the high costs associated with them, there are actually very many similarities between Canadian and Japanese dentistry. I hope that in the future, I will have more opportunities to return to Japan to further learn about dentistry. This is only the beginning!



2015年度懇親会



Global Oral Health講義（宮崎教授）



2016年度夏懇親会

陽明大学を訪問して

歯学科4年 高村文香

留学の後、私とは行き違いで台湾から新潟大学に来ていた留学生と話していると突然“君は（台湾にいた時の）写真で見ると、ずっと落ち着いているんだね”と言われました。どこでその写真を見たのだろうと思いつつも、かるく返事をしました。しかし、いざ写真を見返してみると、初めてのエビ釣りに、夜の（すでに閉館した）国立故宮博物館にバイクで行った時、夜市はもちろんのこと、陽明大学の友人の誕生日パーティーでの1枚など。思えばずっとはしゃいでばかりでした。

この2週間の留学では、こうして現地の学生に案内してもらい、沢山楽しませてもらいました。毎日が充実しており、遊びに来たのではと錯覚することも屢々。その一方で、大学や病院での実習はかなり刺激的な毎日でした。

実習内容としては大学病院での見学が主でした。朝から夕方まで診療室にいらることができましたが、初めは、現場で忙しそうに診察や治療をしている歯科医師の方に“今何をしていますのですか”と口を挟む勇気が持てませんでした。しかし、思い切って尋ねてみると、先生たちは流暢な英語でどんな治療法をしているのか、事細かに教えて下さいました。時にはレントゲン写真を用いてどんな所見があるか尋ねられたり、またあるときにはどんな治療が適しているか意見を求められたりしました（非常に戸惑いましたが…）。それがとても嬉しくて、そして何より日本と違うところも同じところも含めて新たな発見ができたのが面白かったです。

今回の病院実習では歯科医師だけでなく、それを取り巻く環境や患者さんの特性も日本とは異なっており、特に、来院する患者さんの主訴と症状は日本の場合とは違う課題を抱えている部分が多かったです。また、それに対してどの程度の治療を望んでいるのか、それも日本とはギャップがありました。その違いは食習慣や生活環境など、さまざまな要因があると思います。その要望の違いが両国の歯科医師の在り方にも差をもたらして

いるようです。これらについてもディスカッションすることができたのは非常に身になったと思います。

夏休み期間中ということもあり、私と同学年の陽明大学の学生は皆、地元へ帰省しており、案内してくれたのは殆ど上級生やOBの方たちでした。その中には昨年日本に留学に来た学生が沢山いて、1年ぶりの再会に会話を弾ませました。“いつか台湾にいくね”という口約束が果たせて、なにより懐かしい顔触れに会えて安心しました。その反面、彼らはすでに病院臨床実習に入って、患者さんを診療しており、そして各診療科で学んだことを英語で論文にまとめて発表している姿は1年前とはまるで別人でした。そうした彼らの姿に、何か奮い立たせられるものがあったのを鮮明に覚えています。

こうして人々と接することで、異国の文化やその現実に触れることができました。その上で、では自分たちはどうか、考えさせられる点が多くありました。例えば歯科治療において、保険適用外のものに関しては多額の費用を必要とします。見学した台湾の患者さんの中にはそれを必要としている人も大勢いますが、高額のためにその治療を受けることができず、治療を拒否する方もいました。そうした治療を十分に受けることができない状況の方々に対して、どう対応すべきなのか。治療面だけでなく、患者さんの社会面からのサポートが必要であるというお話を聞きました。こうした社会問題が関係する歯科医院や歯科医師のあり方については日本においても同様に問題視される点だと思います。この課題について考える機会が得られたのも貴重な財産の1つとなりました。こうした発見は実際に行ってみないと気づけなかったでしょう。

この2週間は自分の見聞を広げるだけでなく、将来の進路や学びたい学問についても考えることのできる、非常に良い機会でした。1人であれこれ考えるよりも、たとえ英語に自信がなくても、ある程度の積極性があれば必ず身のある留学になります。少なくとも今回の台湾への留学から自信を持ってそう言えます。日本の歯科医療や、自分の将来の進路について考える機会を得られる点で

も留学は非常にお勧めできる方法の1つだと思います。この留学が自分にとって大きな転機だったと言えるよう、これからの学生生活に活かしていく所存です。

最後にこうした機会を設けてくださり、携わってくださった両大学の先生方、そして多くの面で支えてくれた家族など、全ての方々に感謝申し上げます。



陽明大学付属病院にて、先生方と



筆者：左



先生方との食事会にて、陽明大学学部長先生や引率の依田先生とともに

海外医療支援活動報告

新潟大学歯学部からヤンゴン歯科大学へ 口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援

歯科麻酔学分野 照 光 真

“口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援”は、新潟大学歯学部とUniversity of Dental Medicine, Yangon, Myanmar (ヤンゴン歯科大学)との姉妹校提携に基づいて、2014年からは開始され、今回で第3回目となった。メンバーは、前田健康 歯学部長、吉田恵太郎 歯

学部事務室長、高木律男 顎顔面口腔外科学分野教授、瀬尾憲司 歯科麻酔学分野教授、照光真 歯科麻酔学分野准教授、児玉泰光 顎顔面口腔外科学分野講師、永井孝宏 顎顔面口腔外科学分野大学院4年生が参加した(写真1)。

2016年12月19日にヤンゴン到着、手術室に新潟から持ち込んだ手術器具、麻酔器具、薬品類を開梱して準備、術前診察を行い、12月23日までの手術日程で以下の症例の全身麻酔と手術を行った(写真2)。

筆者の所属する歯科麻酔科的に最も印象に残った症例は、症例#7である。術前の開口量は数ミリでほぼ開口は不能である(写真3)。右顎関節



写真1：成田空港を出発。手術、麻酔に使用する薬品や機器そして歯学教育を支援する物資も運び込まれる。右より吉田 歯学部事務室長、前田 歯学部長、高木 教授、児玉 講師、瀬尾 教授、永井 先生。



写真2：ヤンゴン歯科大学 手術室。3つある手術室の内一つを使用した。ヤンゴンでは頻りに停電が起きる。手術中も停電があり、自家発電機に切り替えられる。

症例	年齢	性別	体重	診断	手術	特記事項
1	19y	F	48kg	軟口蓋瘻孔	口蓋形成術	軟口蓋形成術後に生じた瘻孔
2	2y	F	7kg	右唇顎口蓋裂	口唇形成術	
3	2y	F	12kg	左唇顎口蓋裂	口蓋形成術	
4	7y	M	16kg	両側口唇顎裂	右顎裂部腸骨移植術	
5	7m	F	6kg	右唇顎口蓋裂	口唇形成術	
6	2y	F	11kg	両側口蓋裂	口蓋形成術	
7	8y	F	24kg	顎関節強直症	右下顎頭切除術	開口困難、ファイバー挿管
8	1y8m	M	10kg	右口蓋裂	口蓋形成術	
9	5m	F	8kg	左唇顎口蓋裂	口唇形成術	
10	1y8m	F	8kg	両側唇顎口蓋裂	口蓋形成術	

y：歳、m：月、M：男、F：女



写真3：顎関節強直症の8歳女児の最大開口。口腔内診査もできない。鼻についている白いものは、ミャンマーの化粧、日焼け止めの“タナカ”。

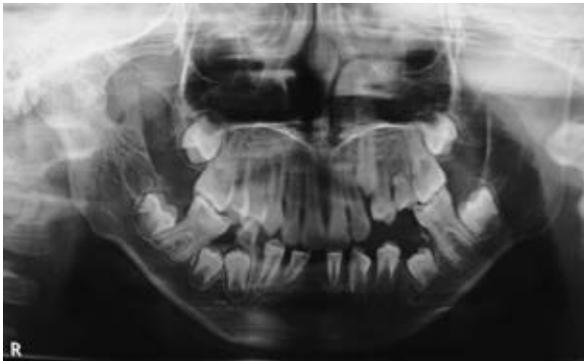


写真4：顎関節強直症の8歳女児のオルソパントモグラフ。右の顎関節に高度な変形。

はオルソパントモグラフに示すように右下顎頭は肥大変形し、顎関節が癒着している（写真4）。全身麻酔のための気管チューブの挿管がきわめて困難な症例だ。設備が整い、人員の豊富な麻酔施設でも相当に慎重にならざるを得ないだろう。こうした場合、第一の手段として、患者さんが意識や自分の呼吸のある状態で気管チューブを挿管する“意識下挿管”が考えられる。通常は麻酔薬で患者さんを眠らせてから気管挿管が行われるが、この方法では鎮静下に自分の呼吸を残し気道の安全性を確保しつつ、チューブを盲目的もしくは、ファイバースコープをガイドに気管に進めて行く。しかし、患者に息を吸ったり吐いたりタイミングを調整してもらう必要がある他に、気道にチューブという異物が入るためある程度の苦痛が伴ってしまう。このため8歳の子供にとっては、指示に従うことも難しいであろうし、途中で暴れ始めてしまっはむしろ危険性を伴ってしまう。

他には、頸部に切開を入れ気管に直接チューブを入れる気管切開だが、やはり切開するまでの間に何らかの挿管をして呼吸管理をする必要性もしくは鎮静で自分の呼吸を残しておかなくてはならない。現地の施設や設備の不十分さ、子供には難しいことから却下。残るは、麻酔薬で完全に眠らせてから、鼻から気管チューブを進め、同時にファイバースコープをチューブの中に入れておき、その画像を見ながらファイバーを声門から気管へと進め、それをガイドにチューブを挿管してしまうという方法だ。これは呼吸が停止した状態で行うため、もし上手くファイバーが進められなかった場合のリスクが残る。さらに現場の状況を困難にしたのは、性能の良いファイバースコープがないこと。手術室に唯一あるファイバーは、新潟大歯科麻酔科が相当昔に使用していた物を一回目の支援の時に贈ったものである。最新鋭のファイバーは、画像を液晶モニタに写し、視野も広く、強力な光源で明るく、かなり明瞭に生体を観察できる。これをもってしても、ファイバー挿管は困難を伴うことがある。しかし、われらが年代物のファイバーは、液晶なしで接眼レンズを直接覗き込む古いタイプで、光源は電池で視界は薄ぼんやり、視野も狭い。ファイバーの先端は自在に向きを変えられるように手元操作で、先端がほぼ直角に2方向に、おじぎと反り返りをするようになっている。しかしこいつは、経年劣化からか、一方向にしか先端が動かなくなってしまっていた。果たしてこの装備の状態で全身麻酔がかけられるのだろうか、安全性は？

スタッフで検討が行われた。もし、この症例は手術の適応外とされたとき、この患者はどうなってしまいますか？ヤンゴン歯科大チームの返答は、この子はこのままの状態生きてゆくしかありません。なんとか、やるしかないようだ。

この症例のために手術は、午後には1例のみとした。顎関節の周囲を剃毛するよう指示していたが、手術室に現れた彼女は頭部すべてを剃毛され、まるで小さなお坊さんのようであった。すでに確保されていた点滴ラインから麻酔薬と口と鼻を覆うマスクから吸入麻酔薬を投与して麻酔の導入を開始した。ヤンゴン歯科大常勤の2人の麻酔

医も本症例の麻酔に加わってくれた。ミャンマーでは歯科医が全身麻酔をすることができないうえ、歯科麻酔学自体も確立された学問体系として教育されていない。麻酔医は医師が担当しているが、本症例のような口腔外科手術での開口困難の挿管を扱うことは稀で、ファイバー挿管は経験が乏しい。

麻酔導入の最中に点滴が外れ、患者が興奮しだすアクシデントがあったが、ヤンゴン大麻酔医が、暴れる患者に迅速に点滴を再確保して難をクリア。そして挿管開始、鼻孔よりファイバースコープを咽頭から声門に向かって進めてゆくと、予想されたとおり、ファイバーの視界が良くない、簡単には声門が見えてこない（写真5）。一方向にしか動かないファイバー先端は意図した方向に進みにくいため、回転させたり首の位置を変えたりして試行する。呼吸が停止しているため長時間、ファイバーを入れたままにしておけない。マスクでの換気を繰り返し、何度目かのトライで頸部にファイバーのライトが外から透過して見えてきた、声門に近づいている、さらに進めてゆくと、そのかすかな透過光は消えてゆく、気管に入った徴候である。あとはこのファイバーをガイドにチューブを進めるのみ、挿管成功。人工呼吸に切り替えられた。スタッフから思わず拍手が沸き



写真5：ファイバースコープで気管挿管中の瀬尾教授と筆者。右の2人はヤンゴン歯科大の麻酔医。

起こった。手術室に入室してから約50分が経過していた。

手術は、口腔外から右関節頭を切断、口腔内より筋突起を切断して約2時間で終了。術後は、正常な開口が可能で問題なく気管チューブを抜管して麻酔終了となった。

本症例をはじめ、今回の口唇・顎・口蓋裂はいずれも比較的重症例であった。この他、ヤンゴン歯科大から手術依頼された症例として、口蓋形成術後に創部が裂開してしまい口蓋に大きな欠損が生じている12歳女兒がいたが、欠損が大きく何らかの組織移植術をするか、義歯のような人工的な義顎を装着するしかないと判断され、残念ながら支援チームでの手術は不可能と判断された。口唇口蓋裂治療の日本からの医療支援は1995年に日本口唇口蓋裂協会が手術をしたことに端を発する。以来、手術の技術移転も進み現地スタッフの水準も上がっている。しかし多くの手術を受けられない患者がまだミャンマーには埋もれているといわれる。今回われわれが支援できたのは10例であるが、引き続き困難な症例の手術への要望に応えられるように研鑽を積んでゆく必要があるだろう。最終日には、病棟でスタッフと患者さん家族も集合して記念撮影、これからもミャンマーのみなさんの笑顔が増えますように（写真6）。



写真6：ミッション終了後、ヤンゴン歯科大病棟にて、スタッフ、患者さんと家族が集合。前列に着席の右から3番目がヤンゴン歯科口腔外科の教授。

歯科外来に着任して



歯科外来に着任して

外来4・5階看護師長 田代 美佐子

平成28年度4月から歯科外来（外来4、5階）でお世話になっています。

昨年の1月に異動の話があり、配属先を歯科外来と告げられました。前任の村山看護師長が退職されることは周知の事実であり、その後任についてはおそらく歯科外来の経験がある方だと思っていましたので、歯科外来への配属を伝えられた際は驚きと不安に包まれました。

私は、新潟大学医療技術短期大学を卒業し、新潟大学附属病院に就職後は幾つかの部署を経験しておりますが、歯科の経験はなく不安があることを看護部長に伝えると、歯科外来の看護師はスタッフそれぞれのスキルが高いので実務は安心して任せてよいこと、外来移転も終わり村山看護師長が外来の体制を整えてくれてあることを話してくれました。私も看護師長になった年に西館病棟の移転、その後異動して東病棟の移転を経験していますので、歯科外来の移転がどんなに大変だったのか、その時関わった方々のご苦勞を想像しながら、移転後の落ち着いた今の状況での配属であることに感謝しております。とは言っても何も知らない歯科外来への異動に対して不安がなくなることはありませんでした。しかし、実際に外来へ来てみると、歯科の先生方、学生さん、そしてスタッフの皆様方はとても挨拶がしっかりとできて気持ちよく働くことができますし、自分のことを受け入れてくれているという安心感もありました。挨拶は基本だということを感じましたし、接遇への教育がしっかりしていると思いました。

仕事の面では、看護スタッフは各自が自立して業務に専念しています。歯科衛生士の皆さんも親切で、分からないことが多く、教わることばかりですがいつも快く丁寧に接してくれるので本当に有難く思っています。また、私が数年前に医療安全管理部に在籍していました際に、色々な場面でお世話になった歯科の先生もいらっしゃるから、相談に乗っていただけることが心の支えとなっています。

歯科外来への異動が決まった際、先輩に、「まだ新しいことを覚えるなんて偉いね。」とプレッシャーをかけられましたが、年のせいか本当に覚えが悪くなっていてご迷惑をおかけしています。医科での処置は、学生の頃から見学や介助を行い、今何をしているか、これから何が行われるか、何が必要で何をすれば良いか、等々予測もつきましたが、歯科治療や口腔領域の処置を経験する機会は少なかったため、器材や器具の名称、その使用目的など、今でもわからないことが多く、新しいことを覚えることは先輩が言うほど簡単ではないことを痛感しています。

この原稿の依頼の中に「趣味など」という項目がありました。独身の若い頃は友人や職場の人たちと旅行に出かけたり、習い事に通ったりしていましたが、子供ができ、仕事が忙しくなってからは趣味と言える様なことは何一つしていません。通勤距離が長く朝早いことから、休みの日の朝、いつもよりゆっくり眠っていることが今は一番の楽しみと言えるかもしれません。味気ない生活ではないかと自分でも思います。せめて退職後は楽

しみを見つけて取り組みたいと考えています。退職された看護師長さん方がガーデニングや野菜作りをしているという話をお聞きすることがあります。我が家には少しですが畑がありますので退職後は何か作ってみようと思っています。

更に私的なことでは、以前子供が、学校の歯科検診で指摘を受け、近医からの紹介で、当院の口腔再建外科、矯正歯科に数年間お世話になっておりました。どの先生も丁寧で親切でありがたく思っておりました。そんな私も歯科外来に就任と同時に歯科の複数の診療科の先生方にお世話になっており、良くして頂いています。私にとって公私ともに平成28年の漢字一文字は『歯』であると思いました。

歯科外来に配属されてから会議の多さに戸惑っています。院内全体のものも含めると1日に2つ3つ入っていることもあります。しかし、色々な会議に参加することで、今歯科では何が行われているか、問題や検討課題は何か、進むべき方向は、などが少しずつ見えてくるようで、私にとってはとても役にたつ時間だと思っています。実務ではなく管理のための配置と言われて着任しました。自分の役割を認識し実行する上で良い情報収集の場と感じます。当院は特定機能病院として、質の高い医療が安全に行われることが求められていますし、医療人の教育の場としての役割も担っています。高齢化社会として種々の合併症を有する患

者への治療が必要になっています。着任前から、一般病棟の患者さんの口腔ケアの必要性や嚥下が困難な患者さんへの対応には難しさを感じていました。ここでは患者さんへの治療やケアを実践しQOLの向上に努めています。医歯学総合病院に勤務しながら歯科外来での実際や医科と歯科との連携について知らないことも多く、十分な活用ができていなかったのではないかと思います。医科に入院し治療する患者さんに対し、適切に歯科治療や口腔ケアが実施できるよう、合併症を有する患者さんの歯科治療を安全に実施するため、医療連携の強化について考えていかなければと思います。また、病院の方針としての育児支援制度から、外来看護師は一部署に長くいるということが難しくなっています。そのため教育体制を整え、新しい人たちを育成していく必要があると思います。更に今後は地域との連携も考えていかなければならないこととは思いますが、今はまだ余裕がなく、今後の課題と思っています。

若い方はご存じないかもしれませんが、昔、「芸能人は歯が命」という歯を白くする歯磨きのコマーシャルがありました。今の私にとっては、美味しいものを食べて人生を楽しむため、元気に生きるためにも「人にとって、歯は命」とつくづく感じています。多くの方が歯を大切に元気な人生を送れることを願っています。こんな私ですがこれからもよろしくお願いたします。

父から教わったこと

診療支援部歯科衛生部門 山田 麻衣子

私の父は観光バスの運転手で、小学生の頃の夢はバスガイドさんになって父といろいろなところへ行くことでした。この話をしたとき、父がとても嬉しそうにしていたのを今でも覚えています。

ところが、お年頃を迎えた私は夢をすっかり忘れ、歯友会歯科技術専門学校（私が入学した次の年から明倫短期大学に変わりました）の国家試験合格率・就職率ともに100%と書いてあるパンフレットにつられ、なんとなく歯科衛生士科に入学してしまいました。2年間で歯科衛生士として働けるように組み立てられたスケジュールはとても厳しいものでした。指導してくださった先生方や、私と同じ班になったしまった班長さんには大変なご苦勞をおかけしてしまいました。おかげさまでなんとか歯科衛生士になることができました。楽しい仲間たちにも恵まれ、良い思い出がありません。

その頃、父は仕事で不在のことが多く、私にとって空気のような存在になっていました。父のことで知っていることといえば、職業とお酒が好きなこと、あと、母に内緒でこっそりタバコを吸っていることくらいでした。その父が9年前、肺がんでステージ4という診断を受けました。父の希望は積極的な治療はせずに『家で過ごしたい』でしたが、父の現実を受け入れられなかった私たちは、父に治療してほしいと頼みました。父は家族のために治療に踏み切る決意をしましたが、放射線も抗がん剤もさほど効果は発揮せず、結局ほとんど家で過ごすことなく半年後に他界しました。父の気持ちを優先してあげられなかったことを後悔するとともに、生前、父と関わりのあった人たちから私の知らなかった父を知ったり、遺品から破ったメモ帳に落書きみたいに書かれた私からの手紙や、父にとって思い出の品であろうガラクタが大切に保管されているのを見つかり、最期まで家族のために生きた父の愛情

に感謝しました。

親が子にできる一番の教育は死ぬことだと聞いたことがあります。意味がよく分からなかった私も親になり、父が亡くなったことでなんとなく理解できた気がしました。ありきたりですが、結果はダメでもチャレンジすることは素晴らしいこと、お酒は楽しいこと、たくさんの人たちと関わり合うこと、良心に従って生きることなどを自分自身が実践して、精一杯生きること子ども達に伝えたいと思います。

なんとなくで歯科衛生士になりましたが、家族と一緒に働く人たちに支えられ、もうすぐ19年目を迎えます。矯正歯科クリニックに勤務したあと、老人保健施設に併設されたクリニックに勤務し、平成26年4月に新潟大学に来ました。今は外来棟4階の顎関節・インプラントのエリアで働いています。通勤に時間がかかるので出勤時間が早く、子ども達に見送られて出勤しています。子ども達の目には『お仕事がんばっているお母さん』に見えているようなので、期待にそえるようがんばりたいと思います。



准教授に就任して

准教授就任にあたりまして

組織再建口腔外科学分野・准教授 片桐 渉

平成28年7月1日付で組織再建口腔外科学分野の准教授を拝命させていただきました。この場をお借りしてご挨拶させていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は大阪府の出身です。ちなみに「シンダイ」と言えば関西では神戸大学を指し、名古屋では「信州大学」を指していましたので、人生で3回目の「シンダイ」→「新大」への変換を頭に叩き込んだところです。さて、平成10年3月に大阪大学歯学部を卒業し、そのまま作田正義先生（現・大阪大学名誉教授）の口腔外科学第二講座に大学院生として入局しました。入局して臨床も研究も悪性腫瘍に携わることとなり、当時大流行であった遺伝子変異の解析を実際の臨床検体で行う研究を行いました。その頃から「臨床に直結する研究」というのが自分の中の一大テーマになったと記憶しています。

大学院修了後3年間は東大阪市立総合病院歯科口腔外科に赴任しました。ここでは土地柄もあり（笑）、外傷（右手で殴られるので左側の顔面骨折ばかり）、ステージIVばかりの悪性腫瘍、ICU即入院の炎症など非常に多くディープな症例を数多く経験させて頂きました。その後、阪大に帰局し臨床に明け暮れる一方、特に腫瘍の術後で食事や会話もままならない患者さんと数多く接してきて、「取る」医療も重要だけれども「取ったところを再び造る」医療の重要性を考えるようになりました。大学院時代に培養上皮を用いて発癌モデルができないかと考えていたので「再生医療」は自分にとっては身近な存在でもありました。そこ

で当時口腔外科領域で再生医療に勢力的に取り組んでいた名古屋大学の口腔外科に移りました。名大では上田実先生（現・名古屋大学名誉教授）を中心に骨髄由来間葉系幹細胞を用いた骨再生医療（いわゆる「培養骨」）の基礎研究から臨床研究までものすごいスピードで進められており、20名を超える大学院生、企業からの研究者などが数多く出入りし、最初は名前を覚えるのも大変だったことを記憶しています。そこは正にトランスレーショナル・リサーチ、すなわち研究成果を患者さんに橋渡しする場として絶えず臨床を念頭に置いて仕事が行われていたのに感銘を受けました。特に上田先生の強烈な統率力は良くも悪くも（笑）良い人生経験になっています。当時ヤンキースにいた松井秀喜選手が橈骨骨折をした時、その日の内に医局員にメールが回り、「ヤンキースに連絡を取って再生医療で骨折を治せ」という指示が出た時は唖然としましたが、結果的に球団広報まで話がいった時には（もちろん実際に治療は行われませんでした）何という医局に入ったものだとさらに唖然としました。当時、マスメディアにも名大の研究が多く取り上げられていたので全国から患者さんに来て頂き、私は骨再生医療とインプラント治療を任されました。骨再生が目的の患者さんばかりですので、インプラント埋入単独の患者さんは殆どおらず、全国各地でお手上げの症例ばかりを担当させて頂きました。おかげさまで今では少しでも骨がある症例では萌えないようになってしまいました。医学部の口腔外科ですから補綴も自分でします。フルマウスのケースも多

く、自分の給料に反映されないジレンマと戦いつつ患者さんのQOL向上と自分の思い描いていた「臨床に直結した研究」ができる喜びを感じていました。また、近年では「幹細胞の培養上清で骨ができたり歯周病が治ったらおもしろいよね」という有難い助言に始まり、「〇月〇日に記者会見をするからそれまでにデータを出して論文をアクセプトさせろ」という一瞬ドッキリかと疑うような指示を頂き、来る日も来る日もヒト（大学院生）とラットとイヌと過ごした時期もありました。おかげさまで無事ミッションクリアし、臨床研究も進み今の私の研究テーマの中心になりました。

こういった中、規制当局やPMDA（医薬品医療機器総合機構）、企業の方々、医学部の関連する先生方と議論や情報交換をさせていただく機会にも恵まれて新たな経験を積むと同時に、新しい医療を患者さんの元に届ける為にはさらに大きな山を越えなければならないということも理解しました。その経験は平成27年末に名古屋大学で行っていた骨髄由来間葉系幹細胞を用いた骨再生医療が「先進医療B」の承認という1つの結果となって実を結びました。国が認める枠組みの中で自分たちが行った研究成果を患者さんの元に届けられることになったのです。これは私の中では非常に

大きな喜びでした。そしてその枠組みの中で治療した患者さんの経過も非常に良好です。

こちらに赴任するにあたり、「日本酒が好きで、山を走るヒト」と小林教授に様々なところでご紹介頂きすっかりそのイメージが先行しておりますが、これは間違いではありません（笑）。この歳になって手足に生傷やブヨ（ブユ？新潟ではどう言うのですか？）に噛まれた痕が絶えないですし、昨秋には山中で低体温症でヤバいことにもなりました（笑）。新潟大学にはマラソンをする先生もたくさんおられ、再生医療とともに親近感を勝手に抱いています。この度、本当に様々なご縁が重なり新潟大学にお世話になることになりました。新潟大学も再生医療の研究が盛んであることは偶然ではないような気がします。私自身、新潟大学でさらに多くのことを学びたい気持ちでいっぱいです。また一方で口腔外科医としての経験もまだまだ必要です。大学教員としては学生教育も重要です。医学部で行う歯科口腔外科の講義は教える方も教わる方も正直モチベーションが低いのですが（笑）、ここではそういうわけにはいきません。自分なりに精一杯努力していきたいと思えます。すでに多々ご迷惑をおかけしておりますが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」を終えるにあたって

取組責任者 前田健康（歯学部長）

新潟大学歯学部は基幹校として、東北大学歯学部、広島大学歯学部と共に、平成24年度に文部科学省事業大学間連携共同教育推進事業「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」に採択され、本年3月末で5年間にわたる事業を終了します。本稿では5年間にわたる取組成果について紹介します。

この事業は3大学がもつ特色ある教育資源を提供・補完し合い、3大学の歯学教育の高度化を目指すもので、優れた歯学教育教材の開発・提供・実践、改善、問題発見・解決型学習の展開、特色ある教育の提供（相互乗り入れ講義）、学生の交流実習（歯学部版エクスターンシップ）、客観的評価方法の開発を行うこととしていました。具体的な達成目標として、平成21年に「歯学教育改善・充実に関する調査協力者会議」第一次報告書で現行歯学教育の問題点および課題として、（1）臨床実習教育の質の低下と形骸化による歯学部卒業時の臨床能力が低下、（2）体系的な歯学教育の実施するうえでの教育資源の充実の必要性、（3）優れた入学者の確保の必要性、（4）次世代を担う歯学研究者の育成の必要性を踏まえ、本取

組の達成目標を、（1）臨床能力を具備した歯科医師の育成、（2）次世代を担う歯学研究者の養成、（3）国際性と社会性の涵養、（4）評価と教育能力の開発とし、その具体的目標を表1のように企図しました。

具体的な取組内容を以下に箇条書きに示します。

- ・PBL教材として「PBLチュートリアル・ガイドブック」を、大学入学直後の学生に自主学習を導くため、テキストである「スタディ・スキルズ」を刊行し、3大学で共有すると共に、成果公開シンポジウム等で配布した【①、②】。
- ・歯学教育の特色の1つである技能教育の充実に向け、患者の一口腔を再現し、治療体系を学ぶために作成した総合模型をアンケート調査により改良版を作成し、毎年、3大学30名計90名を対象にアンケートを行い、改良版病態顎模型を完成させた。また病態顎模型に合わせたX線写真をはじめ、各種臨床データを集積し、実際の患者のデータと病態顎模型の整合性の確保に取り組んでいる。また、現在、臨床実習終了時の

表1 達成目標と取組内容

達成目標	取組内容
臨床能力を具備した歯科医師の育成	①優れた歯学教育教材の開発・提供・実践・改善 ②問題発見・解決型学習の展開 ③特色ある教育の提供
次世代を担う歯学研究者の養成	③特色ある教育の提供 ④学生の交流実習
国際性と社会性の涵養	②問題発見・解決型学習の展開 ③特色ある教育の提供 ④学生の交流実習
評価法と教育能力の開発	⑤客観的評価方法の開発

技能評価への応用の可能性を共用試験実施評価機構とともに検討している。【①、②】

- ・東北大学を中心として、管理する歯科シミュレーションソフト版を完成させた。【①】
- ・広島大学が主催するバイオデンタル実習の継続的な参加者アンケートにより、歯学教育で不足しているバイオメディカル・デンタルの実習書を完成させた。【①】
- ・3大学がもつ教育資源の共有化、補完を目指して共同講義を開設し、平成27年度では「先端歯学講義」（年間9コマ）として開講している。【③】またこれまでの講義はデジタルコンテンツ化している【①】。
- ・当初、広島大学が主催する「バイオデンタル実習」のみであったが、平成27年度には新潟大学が「先端歯科臨床実習」を開講し、平成28年度からは東北大学が「災害歯科医療学実地研修会」を開講し、サマースクールとし、また3大学以外の全国の歯学生に開放した【④】。
- ・JASSOの留学生交流支援制度の支援を受け、3大学協働で毎年15名の学生を海外に短期派遣している。この際、海外留学に向け教材を3大学で作成し、派遣前の教育に活用している。この教材は単独大学派遣の際でも用いられている【①、④】。
- ・技能教育の評価は主観的評価になりがちであるので、ルーブリックを活用した客観的評価法を検討し、病態顎模型を用いた卒業時の臨床能力試験（トライアル）に用いている。パフォーマンス評価に加え、PBLチュートリアル評価にトリプル・ジャンプ評価の導入の可否を検討するため、新潟大学でトライアル評価を行っている。これらは京都大学との共同研究の一部にもつながっている【⑤】。
- ・新潟大学では臨床実習の電子ポートフォリオシステムを完成させ、供用を開始した。なお、このシステムは平成26年度歯科医学教育学会システム開発賞を受賞した【⑤】。
- ・3大学教員の教育に対する共通理解、教育能力の向上を目指し、共通テーマで教育FDを毎年開催している。「新たな教育評価方法」（H24、25年度）、「歯学教育の標準化」（H26年度）、「共

用試験の改革の方向性」（H27年度）【⑤】

・情報発信として、成果シンポジウムの開催に加え、日本歯科医学教育学会（ステークホルダー）に加え、各種国内外の教育系学会、シンポジウムで成果発表を行っている。

本取組の推進にあたり、外部委員による外部評価委員会による進捗状況による評価に加え、平成26年度には日本学術振興会大学間連携共同教育推進事業評価委員会による中間評価が行われ（http://www.jsps.go.jp/j-ppiuce/hyoka_kekka.html）、A評価（計画どおりの取組であり現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる）を受け、また平成28年度には同委員会によるフォローアップを受け、高い評価を受けました。

非常に多岐にわたる事業を展開してきたが、本取組のような補助事業には具体的数値目標が求められますが、その平成27年度現在の達成状況を表2に示すように、ほぼ当初の目標通りの数値を達成することができました。

新潟大学歯学部具体的な成果として、課題解決型学習のさらなる展開のために大学学習法（study skills）のテキストおよびPBLチューターガイドの改訂を行い、教育に活用している。また総合模型実習では実際の患者データと病態顎模型の整合性を図るように対応し、実習レベルでのPBL科目としてのバージョンアップを図ることができ、また毎年3大学各30名、計90名の学生、研修歯科医を対象にトライアル試験を行い、病態顎模型を改良するとともに、臨床実習終了時の技能評価試験としての妥当性を検討しています。またルーブリックを活用した新たな教育評価法の開発を行い、臨床実習では電子ポートフォリオシステム、総合模型実習ではルーブリック、PBLではトリプル・ジャンプを活用とした評価を導入しました。また国際的通用性の涵養のために、学生の短期派遣を行っていますが、派遣前教育の整備を進め、3大学で活用できる教材の開発を行いました。毎年15名（1大学5名）の共同派遣（1ヶ国派遣）に加え、開発した教材を用いて単独派遣、受入も実施し、そのアウトカムとして学生主体の国際交流サークルを発足しました。また現行の力

リキュラムは時代に対応した教育内容を適宜追加してきた「建て増し」カリキュラム、またほとんどの評価がペーパーテストである、意欲のある学生を伸ばす仕組みがない等の問題点を抱えていましたが、平成28年度入学生から新たな歯学教育カリキュラムをスタートすることができました。さらに変革している歯学教育への対応するために、

3大学共同の課題でのFDを開催し、教育能力の醸成に努めたことがあげられます。

また特筆すべき事項として、本取組で行ってきた総合模型による歯科技能試験および評価が、近い将来全国的に実施される臨床実習後技能試験に取り入れられようとしています。

表2 本取組の達成状況

数値目標	達成状況	
事業終了時までに、卒業生全員が歯学モデル・コア・カリキュラムで提案する臨床実習内容を修得する	歯学モデル・コア・カリキュラムの改正に対する対応を3大学ですべて対応済み	
臨床実習シミュレーション教育用統合型モデルを完成させ、卒業生全員が臨床実習前に基本的な臨床基礎能力を具備する	統合型モデル改良は学生・研修医教育への提供、2回のトライアル試験、2カ年にわたるWG、アンケートをまとめ、最終形にほぼ近い形でのモデルを作成 総合模型を用いた臨床技能トライアル試験を2カ年（約30名×3大学×2年＝180名）実施した。補助事業年度中で評価方法を完成予定	
・PBLチュートリアル教育を充実させ、卒業生に対する学生アンケートにおいて80%以上の学生が生涯学習能力の確保ができたことを自覚する、という結果を得る	新潟大学での卒業後1年後の振り返りアンケート結果「自ら問題を見つけ、必要な情報を収集、分析、統合し、問題を解決することができますか」に対する設問では、できる、ある程度できるが80%を超えた	
事業終了時までに、大学院充足率を90%以上にする	平成25年度からの実績 新潟大学 H25、27年度達成済 東北大学 H25年度から達成済 広島大学 H25年度から達成済	
現行ほぼ0である特別研究員採用数を毎年採用される	平成26、27年度採択実績 新潟大学 達成 平均1.33人 (DC+PD) 東北大学 達成 平均3.5人 (DC+PD) 広島大学 未達成 平均0人 (DC+PD)	
事業終了時までに、短期を含め、海外留学経験学生数を20%とする	平成24年度から 新潟大学 52名/260人＝20.0% 東北大学 17名/318人＝5.3% 広島大学 90名/318人＝28.3% 3大学計 159名/896人＝17.7%	
事業終了時までに、教員の80%以上がFD/WSを経験する。	新潟大学 延べ173名 東北大学 延べ166名 広島大学 延べ98名	
事業開始2年目以降、成果報告をステークホルダー（日本歯科医学教育学会）の学術総会で3大学による共同発表を継続する	平成25年度 ポスター 1題 平成26年度 口演 2題 シンポジウム 1題 ポスター 3題	平成27年度 口演 2題 ポスター 5題 平成28年度 口演 2題 ポスター 10題 海外発表 口演 1題 シンポジウム 1題 ポスター 6題

「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」 の下で行った臨床技能評価試験の試み

生体歯科補綴学分野 魚島 勝美・秋葉 奈美

1. はじめに

皆さんご存知のように、現在臨床実習開始の条件として共用試験の合格が必須となっています。共用試験は知識を問うComputer Based Test (CBT) と技能や態度を問うObjective Structured Clinical Examination (OSCE) から構成されています。臨床実習では歯科医師免許を持たない学生が実際の患者さんの治療をさせていただくことになるわけですから、臨床実習に参加する学生はそれ以前にしっかりと知識を蓄え、技能を身につけていることを広く国民に示すために行っている試験です。ところが一方で、1982年に歯科医師国家試験における実技試験が廃止されて以来、本邦では歯科医師免許の取得に際して実技の評価はされていません。もちろん、現行の国家試験に含まれる臨床実地問題によって、ある程度の臨床的知識は担保されていますし、各大学では卒業時の技能向上にそれぞれ努力しています。しかしながら、歯科の臨床に求められるのは知識だけではなく、質の高い歯科医療提供のためには技能も非常に重要であることから、患者さんの立場で考えると歯科医師免許取得時にも技能をしっかりと客観的に評価することは重要です。

本学歯学部では、このような考え方に基づいて、卒業時、すなわち臨床実習終了時の技能評価をいかに行うべきかを検討してきました。平成25年に文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」に本学歯学部が採択されたことを受けて、本学とほぼ同じ歴史と規模、環境を有する東北大学歯学部、広島大学歯学部と共に、卒業時の技能評価試験について具体的な検討を始めました。平成28年度を以ってこの事業が終了することから、ひとつの区切りとして本稿では上記3校が協働で策定してきた技能評価方法についてご紹介したいと思います。

ます。

2. 技能試験用模型開発の経緯と結果

本学では歯学部歯学科5年生、すなわち臨床実習開始直前の学生に対して、総合模型実習を開講しています。これは従前歯学の専門科目ごとにそれぞれ独立して行っていた模型実習を、実際の臨床に近い形で統合的に行う実習です。つまり、ひとつの模型に虫歯や歯の欠損、歯周病、抜歯が必要な歯や根の治療が必要な歯などを再現し、学生自らがどのような順番で、どのような治療オプションを選択すべきかなどを自ら考えながら行う実習です。臨床実習前の実習では通常、根の治療は根の治療、冠を被せる治療は冠を被せる治療として、他の治療とは切り離れた形で治療技能を習得しますが、実際の患者さんの口腔内にはこれら疾患や治療対象が別々に存在するわけではありません。実際の治療にあたっては、いかに患者さんに不都合がない形で最善の治療をどのような順番で提供できるかを考える必要があるのですが、専門科目別に蓄えた知識と技能だけでは、実際の患者さんを前にして、どうして良いか分からなくなることが往々にしてあるのです。本学ではこの総合模型を使用した実習の実績が10年以上に及んでおり、臨床を模倣した模型策定のノウハウがありました。そこで、大学間連携共同教育推進事業では、本学が中心となって卒業時の技能評価に使用する模型の策定を行うこととしました。

卒業時の技能評価に資する模型を開発するために、平成25年9月に3大学の代表が集まり、課題設定に関する協議を開始しました。卒業時に最低限身につけておくべき技能で、模型上での再現が可能で治療対象疾患をひとつの模型上に再現することにしました。その後、数回の会議を経て実際の模型を作製し、平成26年2月3日から27日にか

けて、3大学それぞれがボランティアを対象としてトライアル試験を実施しました。本学では臨床実習開始直後の5年生、臨床実習終了直後の6年生、研修医それぞれ10名に協力を得て、トライアル試験を行いました。ここで問題となったのは、いかに客観的な評価が行えるかということです。筆記試験であれば、正解は決まっていますので評価は比較的簡単です。しかし、模型を対象に受験者が何らかの作業を行った結果を客観的かつ公正に評価することは大変難しく、その後3年間試行錯誤を繰り返すこととなります。平成27年2月2～3日には第2回目のトライアル試験を実施し、平成27年11月6日に最終トライアル試験を行いました。この最終トライアルではそれまでと異なり、臨床実習終了直後の6年生全員に協力を仰ぎ、その実施形態や評価方法の最終調整を行いました。これらの結果、平成28年11月4日には卒業要件のひとつとして、全員を対象とした技能評価試験を実施するに至りました。結果的に卒業時に求めるべき最低限の技能評価項目として設定した課題は、簡単な抜歯、歯石除去、根管治療2課題（根の治療）、う蝕（虫歯）除去、レジン充填、支台歯形成（冠を被せるための歯の形成）、口腔内の記録（どこにどのような疾患や治療対象があるかの記録）の8つとしました（図1）。

課題の設定、模型や人工歯の仕様、評価方法等についての検証結果は毎年の日本歯科医学教育学会で発表し、本技能試験の妥当性や信頼性がある程度示されてきています。

課題：高頻度一般歯科治療から8課題

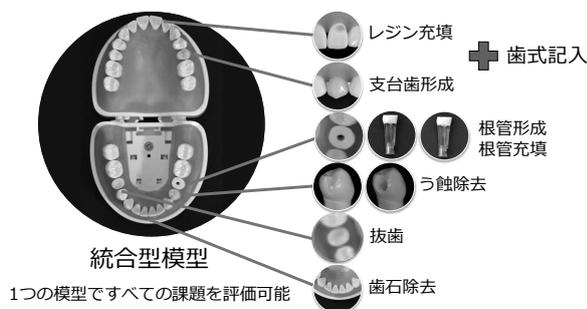


図1 統合型技能評価模型

3. 試験・評価の実施方法

本技能試験は臨床実習終了後1週間以内を目安として基礎実習室で行います。上記8課題が設定された模型を受験者に配布し、受験者はこれをマネキンに装着して試験を受けます。課題ごとにその内容を説明した後に、設定された制限時間内に課題を終了することが求められます。課題の難易度により試験時間は異なりますが、8課題すべてを終了するのに説明の時間も含めておよそ3時間半を要する試験です（図2）。



図2 試験の様子

試験終了後には全員の模型を集め、4名の評価者がすべての課題をそれぞれ評価します。評価基準は全員で共有しますが、課題によっては結果がばらつくこともありますので、今のところ本試験の合格基準設定は毎回の試験結果を見てから判断せざるを得ないと考えています。しかし、将来的には評価結果のばらつきを抑えて、毎年一定の基準で合格判定を行う予定です。平成28年度に行った試験では、残念ながら3名が不合格となりましたが、再試験を行った結果、全員が合格しています。

4. 今後の展望

文部科学省の金銭的援助期間は終了しましたが、このプログラム自体は終了するわけではなく、今後も継続的に改善する必要があります。また、平成29年度以降も臨床実習終了直後に本技能試験を実施し、臨床実習の終了要件とします。OSCEは臨床技能や態度を評価する方法としての有用性が示されていますが、これを行うためにはとても多くの人的資源と金銭的負担が必要です。しかし、我々が開発してきた本技能評価試験

は最小限の資源で実施でき、かつ結果に信頼性があると考えられます。最終的には、本学が行うこの試験が全国的にも広く認知され、本学の歯学教育カリキュラムが多くの優れた臨床歯科医を育て得ることが認められることを期待しています。

5. おわりに

前述のように、質の高い歯科医療の提供には高い技能が欠かせません。現在の歯科医療の多様性を考えれば、6年間での完成教育はほぼ不可能ですが、少しでも卒業時の臨床技能を高める努力を

することは、私たち歯学部教員の義務だと考えています。本学歯学部は、全国でもトップクラスの臨床実習環境を提供しています。であるならば、その有利な環境を結果につなげるために、日々の教育体制と学習環境の充実に努め、その成果を客観的に示すことが大切だと感じています。

最後に、本技能試験の開発にあたって多大なるご協力をいただいた多くの皆様に心から感謝いたします。どうも有難うございました。今後もよろしくご協力をお願いいたします。



大学間連携事業 新潟大学サマースクールについて

歯学教育研究開発学分野歯学教育研究室 加 来 咲 子

今年度は大学間連携事業の最終年度にあたり、これまで行ってきた広島大学、新潟大学に加え、東北大学でもサマースクールを開催していただきました。連携校が本事業の1つである共同講義に関連した体験型実習を開催し、学生の相互派遣をし合うという、全国でも珍しい試みとなりました。これは歯学部教育のさらなる高度化を大目標の1つとして実施したものとなっています。

新潟大学は連携事業の代表校ですので、こういった事業のコーディネートから行いますが、当然のことながら、各校とも既存の日程（試験・行事等）がある上での企画となり、詳細は各大学の連携担当教員が事前会議と綿密な連絡をもとに自大学の調整を行うことで成立しております。今回のサマースクールの企画でも、各校とも日程調整が非常に困難でした。たった3校での調整ですが、学生の参加できる期間、協力していただく学内教員の先生のご都合、学内施設の空き状況等、調整すべき事は非常に多く、それでも至らない部分が多くあったと未だに反省しきりです。

さて、新潟大学では特徴ある実習の提供ということから、平成27年度より生体歯科補綴学分野の治療計画立案実習を魚島勝美教授と秋葉奈美先生のご協力をいただき開始いたしました。今年度はそれに加え特徴ある研究室として摂食嚥下リハビリテーション学分野の実習を井上誠教授からのご指導のもと実施していただきました。更に歯学教育研究開発学分野の藤井規孝教授、中島貴子先生など、歯科外来の多くの方々のご協力をいただき、歯科外来見学実習を加えたものとさせていただきました。参加学生からは、このような体験型の実習を他大学の専門家から直接受けることに非常に満足していただいております。

前述致しましたが、サマースクールは学生の相互派遣ですので、他大学に派遣された学生が、ホスト校の学生として連携校の学生を迎えるという場面があります。これを機会に自大学の特徴を意識することができたという感想が挙がっています。こういった機会が学生のキャリアパス形成の一助になればと連携教員としては期待しております。また、この場をお借りし新潟大学サマースクール開催にあたり、ご指導、ご協力いただきましたすべての方に改めまして心よりお礼申し上げます。

最後に、今年度の新潟大学のサマースクールに参加してくれた広島大学4年生の学生さんからの感想をいただきましたので、あわせて掲載させていただきます。

新潟大学のサマースクールでは、治療計画立案、嚥下造影検査、大学病院の見学などを体験することができました。その中で、最も印象に残っているものは治療計画立案です。私はこれまでの学校の授業で、各科ごとに分類して知識を学んできました。今回、様々な科にまたがる疾患を併せ持った模型に対して治療計画を立てることで、これまで学んできた各科の知識を総合的に考察することができました。それにより、これまでの1つ1つの知識を総合し応用するという、多様な疾患に対応する必要のある臨床の場において重要な考え方を学ぶことができました。ほとんどの科の講義を一通り受け、臨床実習学年に上がる前である4年生のうちにこのような体験ができたことは、自分にとって大変有意義であったと感じています。嚥下造影検査については、これまで授業で見たことはありましたが、今回初めて体験し、自分

の検査結果の説明を受けることができ、大感激でした。大学病院の見学では、実習生が実際に患者さんに対して治療を行っている様子を見学し、自分の大学と比較して、臨床を重視している新潟大学の特徴を体感することができました。私はこれまで他大学の歯学部に行ったことがなかったため、とても新鮮で、視野がひろがるきっかけになったと感じています。

サマースクールの3日間を通して、共に参加した東北大学の学生や、交流会に参加してくれた新潟大学の学生とも仲良くなり、みんなで海に行ったりラーメンを食べたり、実習以外の思い出もたくさんできました。新潟大学の先生方もとても親切でどんな質問にも答えてくださり、最後姿が見えなくなるまで見送ってくれました。

サマースクールに参加することで、普段の授業では体験できない様々な実習や、参加しなければ出会えなかった多くの人の出会いなど、得たものが本当に多くありました。

(新潟のごはんやお酒も本当においしくて、海もとてもきれいでした！ぜひまた新潟に行きたいです。)



図1 治療計画立案実習（魚島教授）



図2 嚥下機能評価実習



図3 外来見学の様子（中島先生）

3 大学連携サマースクール

広島大学 バイオデンタル教育に参加して

歯学科4年 金 珉 廷

私は今年の8月に広島大学でのバイオデンタル教育に参加しました。去年、ポスターを見て細胞培養を学べる点に惹かれて参加したのがきっかけです。バイオデンタル教育とはバイオテクノロジーやITを基礎とした生物系・工学系の講義と実習を行い、21世紀における歯科医学、医療の進歩に対応した歯科医療人を育成することを目的としたプログラムです。今回の実習では主にデジタルデンティストリー、ME機器、細胞培養の3つを4日間かけて学びました。

実習には、東北大学から2名、新潟大学から5名、広島大学から2名が参加しました。広島大学口腔生物工学分野の沢山の先生方にご指導いただきました。

●デジタルデンティストリー

まず、デジタルデンティストリーでは歯科医療で応用が広がりつつあるデジタル技術のうち、CT画像と3Dプリンターの応用と、CAD/CAMシステムの3つについて学びました。CT画像ではソフトウェアを使って下顎骨を三次元に再現しました。再現するには、各画像において再現したい構造物のみを手動で選択していかなければならず、技術が発展しているとはいえ、人の手がまだ必要であることが分かりました。その後、三次元に再構築したデータを3Dプリンター専用のソフトウェアに入れてプリンターに出力すると、約4時間で模型が出来上がりました。

●ME機器実習

ME機器実習では、新潟大学で習ったものから初めて体験するものまで様々な口腔機能の検査を体験しました。主に唾液・プラーク検査や咬合力

検査、咀嚼能力評価、舌圧測定、発音検査などを行いました。

唾液・プラーク検査ではお互いにペアの人の歯肉縁下プラークをとり、歯肉炎の原因菌を調べたり、自分の唾液を様々な試験液と合わせてう蝕のリスクや唾液感受性を調べたりしました。短時間で自分の口腔内環境を把握することができ、食後の歯磨きの仕方や間食などについて見直す機会となりました。

咬合力測定にはシート状のデンタルプレスケールを口に入れてオクルーザーという機械を使用しました。咬合力の強さ、偏り、バランスが一目でわかるようになっており、臨床で使用する際も説明しやすいようになっていました。

また、舌圧測定では、広島大学で開発された機械を用いました。舌圧測定することで機能を数値で評価できることがわかりました。以上のように様々な検査を実際に体験することでさらに理解が深まり、臨床における検査の必要性を実感しました。

●細胞培養実習

細胞培養実習では、細胞の観察・培地交換、解凍・再培養、細胞数の計測、継代、再凍結の5つの作業を行いました。中でも細胞の解凍と再培養、継代は注意しなければならない点が多く少し大変でした。例えば解凍は細胞に負担のかかる作業で素早く行う必要があります。再培養はクリーンベンチ内で行い、培地の汚染が起きないように気をつけなければなりません。この実習の際にはライターの先生方が汚染を防ぐ方法などを優しくご指導くださり、楽しく実習を行うことができました。

●外来見学

上記の実習以外に広島大学病院の歯科矯正科と補綴科の見学もさせて頂きました。補綴科では今回のME機器実習で行った舌圧測定を実際に臨床で使用する様子が見学できました。ワンフロアで診療を行っているのは新潟大学と同じでしたが、受付が1ヶ所で、患者さんを正しく案内するために呼び鈴をもたせていることが違いました。

今回の実習を通して、デジタル技術やME機器は今後も広く臨床に応用される技術なので、これらに関する正しい知識を得ることが必要であることや、細胞培養技術を身に着けることはiPS細胞などこれから盛んになる研究を行う上で重要であることが分かりました。

また、他大学の先生方や学生と交流することで大学を超えた友人を得ることができ、大変有意義

な実習となりました。

最後に、本実習でお世話になった新潟大学の竹石龍右先生、加来咲子先生、広島大学の二川浩樹教授、三村純代先生をはじめとする多くの先生方にお礼申し上げます。



図2 細胞培養実習の様子



図3 病院見学の様子



図4 3Dプリンターを使用した実習の様子

3 大学連携サマースクール

東北大学 災害歯科医療実地研修会に参加して

口腔生命福祉学科3年 大野田 美 祈

2016年9月に行われた、3大学連携サマースクールの災害歯科医療実地研修会に参加させていただきました。このサマースクールは大学間連携事業の1つです。これは新潟大学、東北大学、広島大学の3大学がそれぞれの特色を活かし、互いの歯学部学生に知識の補完、教育の更なる高度化を目指すという趣旨のもとで、2012年度から行われています。

今回の東北大学主催による災害歯科医療実地研修会では、東日本大震災の発災から現地で実際に活躍された先生のお話を伺いつつ、被災地（宮城県南三陸町志津川方面）を実際に巡りました。被災地を訪問し、現在の状況、災害時に歯科医療従事者が果たした役割について学びました。参加学生は、東北大学から4名、東北大学の留学生が10名、新潟大学から15名、広島大学から7名の参加があり、今までで最も多い参加人数となりました。

当日は、東北大学歯学部OBで公立南三陸診療所口腔外科部長として震災当時現地で診療に当たられ、歯科医療従事者として第一線で指揮を執られた斎藤政二先生とともに、1日を通して南三陸の被災地を先生のご説明を受けながらバスで回りました。

ここでは訪れた被災地のうちいくつかを取り上げたいと思います。

まず南三陸町では、嵩上げ工事中の場所や造成中の橋などが見られました。また私たちがバスで通った道では、一見普通の道路のように見えても震災以前より10m高い場所に敷きなおされた箇所もありました。震災から5年経った今でも復興のための工事は続いています。

次に、南三陸町総合体育館であるベイサイドアリーナをたずねました。ここでは、震災直後避難所として使用され最大1,500人が避難生活を送り

ました。町庁舎を失い、ここに行政機能が移り、災害対策本部・医療統括本部・救護所が設置されました。発災後、約1か月間に亘ってここを拠点に歯科診療が行われました。診療バスによるベイサイドアリーナでの定点診療や、訪問診療車による約50か所の避難所への巡回診療を行っていました。情報の錯綜、それぞれの避難所間の温度差、インフラの断絶など厳しい状況もある中の診療であったそうです。

途中、防災対策庁舎にて被災により命を落とした方々のご冥福をお祈りするため、献花を行いました。建物のそばまで行くことは出来ないため、献花は道を挟んで向かい側にて行いました。私達の献花の他にも花や千羽鶴などが手向けられており、現在も多くの方が献花に訪れています。

南三陸病院・総合ケアセンター南三陸は、震災当時は「志津川病院」という南三陸で唯一の総合病院でしたが、5階建ての建物の4階まで津波にのまれ水没しました。震災後、2012年9月に病院の建物は解体され、仮設の診療所などで診療を続けていましたが、台湾を始め国内外からの多くの支援のおかげで、2015年12月14日に「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」が開院しました。この一室にて斎藤政二先生の講義をお聞きしました。この講義を通し、東日本大震災の被害や影響の大きさを改めて実感しました。また、歴史から地域の災害を学ぶこと、想定外を想定すること、恐怖心を持って自分の命を守ることが重要であり、歯科医療従事者としては、どのような状況の中でも諦めず、どのような形でも歯科医療を継続することが大切であるということ学びました。

東日本大震災から5年が経ち、メディアで取り上げられる機会も減少し、こうして自ら知ろうとしなければ現在の被災地の現状を知る機会はなか

なかりません。齋藤先生のお話から、震災が発生したときに私たちがその場で必要とされる能力は、「ノンテクニカルスキル」だといいます。治療などといった技術とは異なる、状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワークなどのスキルです。災害時の特徴として設備が破壊されることや人的被害があることなどから、既存の組織だけでは不十分なことがあります。そこで、ノンテクニカルスキルが必要となります。このスキルは、日頃から歯学部内だけでなくほかの学部の学生など、多くの人々と交流を図ることで養っていくことができると思います。また、震災で物資も人的資源も限られている中では、歯科医療にも限界があります。しかし、限界まで挑戦し、どのような形であっても歯科医療を提供することが私達に求められることです。震災を経験し、復興の中で歯科医療を続けてきた齋藤先生のお話から、この災害大国日本で暮らしていく私たち歯科医療

従事者が、どのようなことを災害発生時にできるかを学ぶことができました。

最後になりましたが、お忙しい日程の中、私たちのために時間を作ってくださった齋藤先生を始め、このような機会を設けてくださった各大学の先生方、関係者の皆さまに感謝申し上げます。



献花を行った防災庁舎前



留学報告

歯科矯正学分野 北 見 公 平

はじめに

歯科矯正学分野の北見公平と申します。この度、大学院在籍中ではございますが、2015年3月～2016年9月までの1年半、留学する機会をいただきましたので、この場をお借りして留学報告をさせていただきます。

テキサス州ヒューストンについて

テキサス州はアメリカ合衆国南部でメキシコと国境を接し、東西的には中央に位置するアメリカ本土では面積が最大の州です。南部にあるため夏は暑く、通勤だけで腕が日焼けで黒くなるほど日差しが強烈です。私が過ごしたのはテキサス州の南東でメキシコ湾にほど近いヒューストンでした。ヒューストンの名前に聞き覚えがある方も多いかもかもしれません。NASAの宇宙管制室がある、あのヒューストンです。ヒューストンは全米でも人口第4位に入る大都市で、日本人が好む食材も手に入りやすい過ごしやすい街でした。

滞在先の大学とラボについて

ヒューストンの中心部に程近い場所に、テキサスメディカルセンターという多くの医療系大学、病院、研究所が集積している世界最大級の医療複合施設群があります。その中の1つであるテキサス大学医学部小児科の小松義広ラボにお世話になりました。この研究室は主に、「顔」と「骨」の発生をテーマに、遺伝子改変マウスを用いて解析を行う研究を扱っています。

自身の研究について

すべての出生時先天異常のうち1/3において顔面領域の異常を認めると言われています。顔面の形態形成は非常に複雑であり、多様な遺伝子制

御が寸分の狂いもなく完璧に行われることで初めて完成するものです。近年の研究で、口蓋裂などの顔面領域における形成異常の一部で、DNA損傷修復機能の異常との疫学的関連性が示唆されています。しかしながらDNA損傷修復機能がどのように顔面の形態形成に関与しているかについて、基礎生物学的な報告はほとんどありませんでした。この点に着目し、あるがん抑制遺伝子を顔の硬組織を形成する細胞群特異的に欠損させたマウスを作成し、解析をしました。その結果、がん抑制遺伝子をかいたDNA修復が正常な顔の骨に重要であり、DNA修復機能が低下すると細胞がアポトーシスに誘導され、骨の低形成が引き起こされることが明らかになりました。

滞在中はこの研究内容で多くの発表機会をいただきました。なかでも印象に残っているのは、2016年3月にカリフォルニアで行われたGordon Research Conferenceへの参加です。顔の研究分野ではトップクラスの研究者が集まり、4日間朝から晩までホテルに缶詰めで発表・質疑応答をし続ける濃い学会です。ポスターに訪れる面々はビッグラボを率いる研究者ばかりで、質問に対して的確な答えができていたかも覚えていないほど舞い上がっていたのを思い出します。自分なりの反省点が多い学会でしたが、ここでの経験がその後の発表の大きな糧になったのは間違いありません。

生活について

テキサスはアメリカ南部でメキシコに接していることもあるせいか、白人は少なく、黒人やメキシコ人が多いようでした。そのためかメキシコ料理がおいしく、アメリカ全土で展開しているCHIPOTLE Mexican Grillというメキシコ料理

のファストフード店の質も、他の地域と比べて高いと噂です。昼ご飯や実験で遅くなる時の夕飯を買いに行くときの第一候補でした。ラボの清掃などに来るメキシコ人スタッフは英語が話せないため、紙の補充をお願いするときはスペイン語を調べてお願いすることもありました。良く働いて、気さくな人が多かった印象が残っています。一方で、アメリカ南部の気質なのか、大学や行政機関を通す書類関係の仕事は雑で遅いのがテキサス流でした。労働許可証やソーシャルセキュリティーナンバー、運転免許証にいたるまで、ありとあらゆるステップで何週間、何か月も待たされ、とにかく進まない。言わないと忘れてるなんて日常茶飯事でした。テキサスの運転免許証を取りに行ったとき、書類を提出するため番号札を渡されたのですが、印刷機が古く数字がかすれて見えなかったので確認したところ、「あなたは314番」と数字を書き足してくれました。呼ばれて行ってみたところもう1人314番の人が、「あなたの番号ちがうんじゃない。受付に聞いて」と言われもう一度受付に聞きに言ったら、「あなたは814番よ。呼び出し画面ちゃんとみてなさいよ」と言われました。そっちが314って書いたじゃん!!! と伝えようにも英語力が追い付かず、結局「Listen!!! (番号聞いとけよ)」と言われ、悔しい思いをしました。こんな経験からか、英語力の上達はそれほど

ありませんでしたが、身振り手振りで自分の感情を伝えようとするたくましさは少しいたような気がします。

アメリカらしい思い出といえば、夏休みの旅行です。日頃は研究の性質上、土日仕事という感じでしたが、その代わりに長い夏休みをもらうことができ、2週間かけてアメリカを縦断しながら国立公園を巡るキャンプ旅行ができました。アメリカの雄大な景色とたくさんの動物のなかで、テントを張って火をおこし、星空を見上げながらボーっとしていると、心が落ち着きます。チャンスがあればもう一度したい事の1つです。

最後に

学位もなく、基礎研究の基礎もままならなかった私が留学する機会を得られたのは、重なった幸運とタイミング、それと背中を押してくれた先輩や先生方の存在があったからだと思います。これからの時間の過ごし方に大きな変化をもたらした大切な経験です。このような貴重な機会を与えてくださった小松義広先生、諸手続きをいただいた事務の方々、大学院在学中にも関わらず留学することを後押ししてくださった齋藤教授ならびに不在中の業務を快く引き受けてくださった医局員の皆様に感謝申し上げます。



学会受賞報告

第16回日本口腔外科学会学術奨励賞

第16回日本口腔外科学会学術奨励賞 受賞報告

組織再建口腔外科学分野 小 島 拓

日本口腔外科学会雑誌61巻12号に掲載されました研究論文「熱可塑性吸収性プレートと β -TCP顆粒を用いた三次元的骨再生の実験的評価」が、第16回日本口腔外科学会学術奨励賞を受賞しましたので御報告させていただきます。

顎顔面口腔外科領域では、腫瘍、嚢胞、外傷、炎症などの多様な疾患によって広範囲で複雑な形態の顎骨欠損が引き起こされます。そこで、三次元的な形態を有する新生骨の開発を目標に本研究をスタートさせました。骨欠損を改善する方法としては、従来、自家骨移植や人工材料の移植などに加えて、骨再生誘導法（GBR法）も盛んに行われています。GBR法は骨欠損部に膜を被覆することで骨新生の空間を確保し新生骨を誘導する方法ですが、広範囲で複雑な形態の顎骨欠損症例では、GBR法で用いられている膜では強度が不十分であるため、膜単独で三次元的に望ましい形態の新生骨を誘導することは困難です。一方で我々は、日常臨床における数多くの顎矯正手術や骨折に対する手術の経験より、手術に用いる熱可塑性吸収性プレートが複雑な三次元形態の骨再生に有用ではないかという発想に至りました。そこで、まず基礎的研究として、ラット頭蓋骨に骨欠損部を作製し、ドーム状に形態付与した熱可塑性吸収性プレートを被覆し骨再生を図る動物実験モデルを開発して、誘導される新生骨を組織学的に解析しました。これは私の学位論文の内容で、今回の論文では、プレートの厚さが薄いながらも機械的強度に優れ、形態付与が容易である熱可塑性吸収性プレートを応用し、さらに、生態親和性が

高く良好な骨伝導能を有する吸収性骨補填材を用いることで、より一層臨床应用到近づけております。

2016年11月25日に幕張メッセで開催された第61回日本口腔外科学会総会・学術集会において授賞式がありました。大学院修了後も少しずつですが研究を継続し、このような賞をいただくことができ大変嬉しく思っております。これもひとえに、御指導、御協力をいただいた多くの先生方のおかげと感謝しております。研究を通じて多くの人々との出会いがあり、かけがえのない経験をすることができました。本当にありがとうございました。今後とも宜しく願い申し上げます。



第75回日本矯正歯科学会総会・学術大会優秀発表賞 受賞報告

北見公平

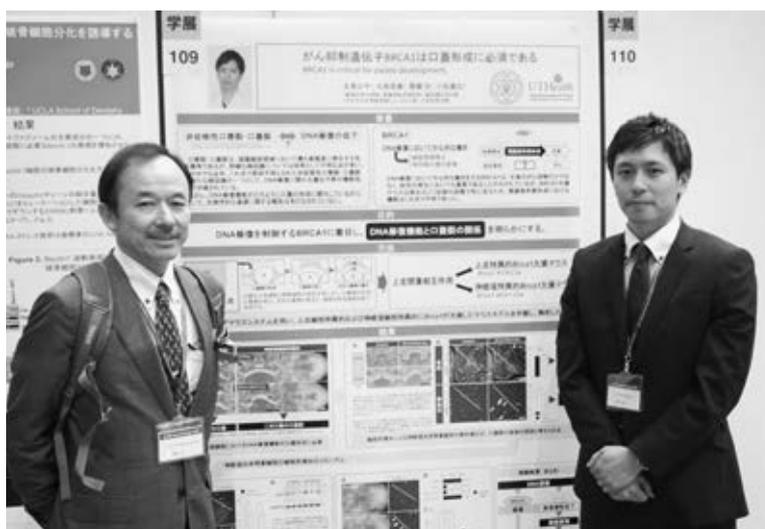
この度、2016年11月に徳島で開催されました第75回日本矯正歯科学会総会・学術大会にて優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

今回受賞した演題名は「がん抑制遺伝子BRCA1は口蓋形成に必須である」です。本研究は、私が大学院在籍中に留学先としてお世話になりました、テキサス大学医学部小児科の小松義広先生のもとで行っていた研究の1つです。

顔面領域に認められる先天異常の中で最も頻発する口唇裂・口蓋裂について、近年、DNA損傷修復に関わる遺伝子群の異常との疫学的関連性が示唆されていました。しかしながらそれに対する基礎生物学的報告はほとんどみられませんでした。そこで本研究ではDNA修復機能に重要な働

きをしているがん抑制遺伝子BRCA1に着目しました。マウスを使って遺伝学的に解析したところ、神経堤細胞特異的にBRCA1が欠損すると、DNA損傷が修復されずに蓄積し、p53を介したアポトーシスによって、口蓋裂が引き起こされることが示唆されました。本研究は口唇裂・口蓋裂の新たな診断・治療法の開発に向けての基礎生物学的知見の第一歩となると考えられます。

今回の受賞を励みに、今後もより一層、研鑽を重ねて参りたいと思っております。最後になりましたが、ご指導いただきました小松義広先生、ならびに齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。



受賞報告

口腔病理学分野・顎顔面口腔外科学分野 隅 田 賢 正

2016年9月にインド南部の都市チェンナイにて開催されました、18th International Congress on Oral Pathology and MedicineにてThe Best Scientific Presentation in the Sessionを受賞しましたので報告致します。

私はSOX9 Expression in Oral Epithelial Lesions and Squamous Cell Carcinomaという演題で発表を行いました。SOX9は、発生段階で軟骨形成や性決定に重要な役割を果たす転写因子として知られていますが、近年、種々の癌においても高発現し、癌の増殖・浸潤に関係しているということがわかってきました。本発表では口腔扁平上皮癌の切除標本を用いてSOX9の発現と臨床病理学的因子を統計学的に解析したところ、口腔癌でSOX9が高発現し、癌細胞内局在の変化によりSOX9が口腔扁平上皮癌の予後不良因子の指標として利用できる可能性を示しまし

た。

本学会では世界中の口腔病理学者および口腔病理学分野の大学院生と交流を持つ機会が多くありました。学会以外でも、彼らと食事（お酒などなど）を共にし、様々な交流ができたことは非常に有意義で楽しい経験となりました。さらにインドという土地も日本の価値観・常識は全く通じず、非常に興味深い思い出となりました。（食事が美味すぎて2kg太りました…）

今回、このような賞を頂けたことは今後の研究を進める上で大きな励みとなりました。最後になりますが、顎顔面口腔外科学分野高木教授、本発表を御指導いただきました口腔病理学分野山崎先生をはじめ口腔病理学分の皆様、そして一緒に学会に参加いただきました程先生に心より御礼申し上げます。



マリーナ・ビーチにて 程先生、北京大学超先生と共に

第26回日本顎変形症学会総会・学術大会 優秀ポスター賞 受賞報告

歯科矯正学分野 坂 上 馨

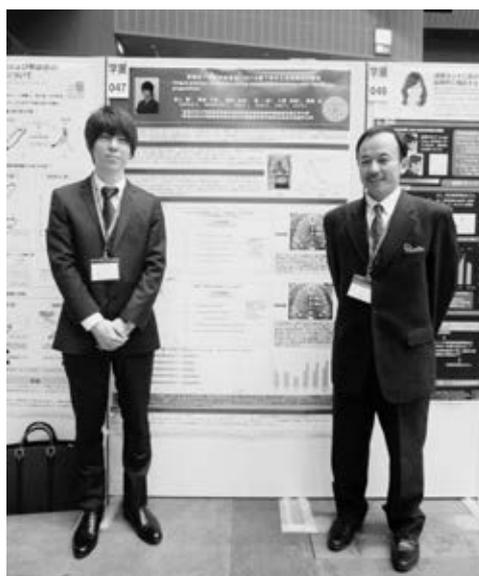
このたび、第26回日本顎変形症学会総会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたのでご報告致します。ポスタータイトルは、「骨格性下顎前突症患者における嚥下時舌圧発現様相の分析」です。

骨格性下顎前突症患者と低位舌との関連性は高いとされ、過去に安静時における舌位の検討はされてきましたが、動的状態下での舌の動態についての報告はありませんでした。そこで本研究では、骨格性下顎前突症患者、正常咬合者をそれぞれ対象として、厚さ0.1mmの舌圧センサシートを用い、ゼリー嚥下時の舌圧を比較検討しました。その結果、個性正常咬合者では、舌尖部と切歯乳頭後方部との強い接触が嚥下動作における固定源としての役割を担っていることが、骨格性下顎前突症患者では舌の口蓋後方周縁部への押し付けが長時間に渡り必要であることが示唆されました。

今後は、骨格性下顎前突症患者の術後における舌動態が新たな固有口腔内でどのように適応変化していくかを縦断的に調査し、術後におけるOral

Myofunctional Therapyの必要性の検討、ひいては術後軟組織に対する新たな治療到達目標の確立へと繋げていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞に当たり、ご指導いただきました齋藤功教授、小野高裕教授、堀一浩准教授、御意見をくださりました医局員の皆様方に心から厚く御礼申し上げます。



日本学口腔機能学会第57回学術大会優秀賞 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 助教 渡 邊 賢 礼



この度、平成28年10月1～2日にかけて開催されました日本学口腔機能学会第57回学術大会において口演発表を行い学術大会優秀賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。

今回の受賞演題名は「小脳高頻度磁気刺激はヒト摂食機能の回復をもたらすか」でした。従来の摂食嚥下リハビリテーションでは、末梢の筋や神経に働きかけリハビリを行う場面が多くありますが、新たなリハビリテーション戦略として中枢への直接的な働きかけにより嚥下機能を回復させることが期待されています。そこで本研究は、ヒトの脳皮質一次運動野（咽頭筋領域）の局所神経活動を一次的に抑制させた状態を創り、小脳半球

へ反復性経頭蓋磁気刺激を行い抑制からの回復効果を検証しました。その結果、小脳刺激によっても脳皮質一次運動野の抑制回復効果が認められました。本研究により摂食嚥下リハビリテーションの新たな治療戦略の基礎データが収集できただけでなく、小脳-脳皮質経路での嚥下関連神経回路で何らかのニューロモジュレーションが起きていることが示唆されました。詳細なメカニズムについては更に検討の余地はありますが、本研究の様なリハビリテーション手法が今後臨床応用されることを目指し研究を継続して参りたいと思います。

今回の発表に際しご指導頂きました当分野の井上誠教授、真柄仁講師ならびに英国Manchester大学のProf. Hamdy、Dr. Michouにこの場をお借りして御礼申し上げます。



第9回日本総合歯科学会学術大会優秀ポスター賞 受賞報告

歯科総合診療部 研修歯科医 小松 万記

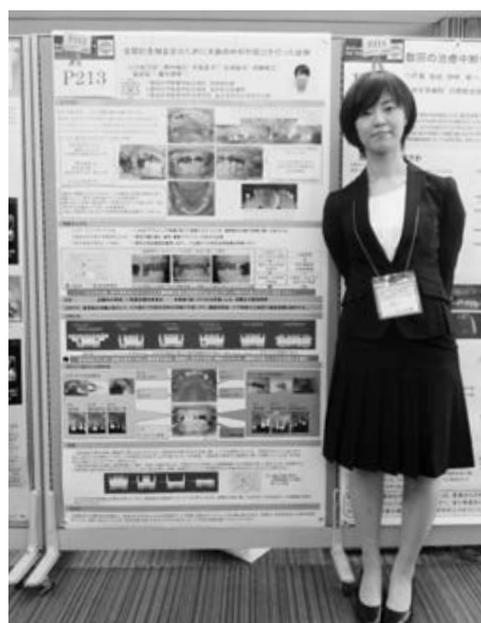
この度、2016年11月に岡山で開催されました第9回日本総合歯科学会学術大会におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

歯科総合診療部の研修歯科医は毎年この学会に参加する機会を頂いており、今年も5名の研修歯科医がポスター発表を行いました。私は学会に参加すること自体初めての経験で、右も左も分からない状態でしたが、ポスター制作や口頭発表、質疑応答を通して、自分の担当した症例についての理解を深めることができ、大変勉強になったと思います。発表当日はとても緊張しましたが、声を震わせながらも何とか質疑応答まで乗り切ることができました。

私の発表演題名は「全顎的長期安定のために、犬歯の外科的挺出を行った症例」です。残根状態となっていた上顎両側犬歯を長期的に機能させることを目的に、外科的挺出を行ったという症例です。事情があったために歯科医院に長年通院できなかったという背景があり、口腔内に残根が多数存在しており、咬合崩壊が進行するかどうかの分岐点にあった症例でした。欠損歯列や欠損形態の状態から、患者それぞれのkey teethを見極めた上で診断・治療を行っていくことが、欠損の進行

を防ぎ全顎的に長期間安定した咬合状態を保つために重要であるということ、この症例を通して学ぶことができました。

最後に、ご指導頂きました藤井先生、指導医の奥村先生をはじめ歯科総合診療部の先生方、学会準備のサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、発表までの間協力してくれた同期の研修歯科医の皆に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。



日本歯科麻酔学会 デンツプライシロナ賞を受賞して

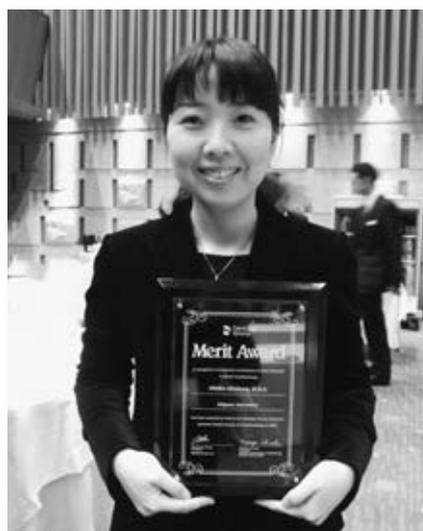
歯科麻酔学分野 平 原 三 貴 子

このたび、平成28年日本歯科麻酔学会デンツプライシロナ賞を受賞致しましたので報告させていただきます。タイトルは、「カルシウムイメージング法を用いた延髄スライス標本における三叉神経脊髄路核尾側亜核内の興奮伝達の解析」です。

三叉神経脊髄路核尾側亜核 (Vc) は脊髄後角と同様な層状構造を持ち、三叉神経支配領域の痛覚伝達に重要な役割を担っていると考えられています。しかし、三叉神経一次求心性線維の三叉神経脊髄路核への投射経路は3次元的に複雑であるため、スライス標本を用いて求心性線維刺激による二次ニューロンの反応を記録することは困難と考えられていました。そこで、三叉神経入口部、神経路、Vc全てを含む新たなスライス標本作製し、その有効性の検証を行いました。作製したスライス標本は、細胞内カルシウム濃度の変化を記録するため、カルシウム指示薬で染色しました。三叉神経への電気刺激により、Vcの浅層部で細胞内カルシウム濃度の上昇が認められ、またこの反応は、主にグルタミン酸受容体を介したものであることが分かりました。今後、本スライス

標本は口腔顔面領域の侵害刺激伝達メカニズムの研究への応用が期待されます。

最後になりましたが、ご指導いただきました瀬尾憲司教授をはじめとする歯科麻酔学分野の先生方、研究のサポートをしてくださいました保健学科 藤原直士教授、実験の見学をさせていただきました麻酔学分野 馬場洋教授に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



日本感染症学会東日本地方会奨励賞受賞報告

微生物感染症学分野 土門 久 哲

平成28年10月に朱鷺メッセで行われた第65回日本感染症学会東日本地方会学術集会において、奨励賞（基礎部門）を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「肺炎球菌性肺炎の重症化メカニズムの分子解析」です。

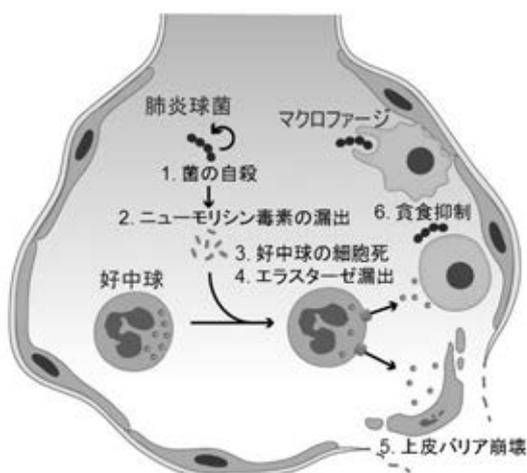
肺炎は、我が国における死因の第3位の感染症であり、その死亡率は高齢者ほど高いことが知られています。したがって、高齢社会を迎えた今日において、肺炎を予防することは重要な課題です。そこで、当研究室では肺炎に関する研究を行って参りました。

肺炎の主な原因菌である肺炎球菌に感染し、肺炎が重症化すると、肺が傷害を受けます。本学会では、そのメカニズムとして、①肺炎球菌が自殺することで菌体から毒素を放出すること、②毒素は好中

球を攻撃し、本来細胞内に存在するエラスターゼを漏出させること、③エラスターゼは肺胞を構成する上皮細胞を壊すとともに、宿主（感染者）の免疫機能を弱めることを報告して参りました（左下図）。本研究は、「SCRP選抜大会のご報告」でもご紹介させて頂きました、「好中球エラスターゼに関する研究」の基盤となるものです。

日本感染症学会への参加は初めてでしたが、専門分野の方々とはさまざまなディスカッションをすることができました。また、臨床家の先生方とも知り合うことができ、有意義な学会となりました。

最後になりますが、研究指導いただいた寺尾 豊教授（微生物感染症学分野）、小田真隆先生（現京都薬科大学教授）、ならびに研究協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。



筆者：中央

受賞報告

高度口腔機能教育研究センター 前川 知 樹



平成29年1月26日から28日まで軽井沢市で開催された第2回骨免疫学会ウインターセミナーにて、幸運にも優秀演題賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。日本骨免疫学会は、骨と免疫が密接に関連していることから、境界領域を扱うことを目的として発足した比較的新しい学会です。私の研究分野は、歯周病に関連する炎症と付随する骨の吸収のメカニズム解明であり、本セミナーでは、「内因性抗炎症分子Del-1はGSK3 β -C/EBP β を介してIL-17により制御される」と題し発表を行いました。難しいことはさておき、簡単に内容を紹介いたします。

Del-1は、第129号の歯学部ニュースでも紹介したように、炎症と骨の吸収を同時に抑制することが可能で、体の中で作り出されるタンパクです。Del-1が、生体内でどのように制御されているのかを解明することにより、加齢によって体の中で自然に起きてしまう自然炎症を抑制し、Del-1が長生きの指標になるのではと考えて研究をおこなってきました。Del-1の制御メカニズムが解明されれば、歯周病だけでなく、難治性炎症性疾患や、肺炎などの炎症性疾患の治療法の開発が可能になると考えています。

私は骨免疫学の分野で新参者の研究者です。しかしながら、歯科医学研究者としての観点から、骨免疫学の発展に寄与できるような研究成果を目指していきたいと思えます。

私は骨免疫学の分野で新参者の研究者です。しかしながら、歯科医学研究者としての観点から、骨免疫学の発展に寄与できるような研究成果を目指していきたいと思えます。



う蝕学分野・歯の診療科

う蝕学分野教授 野 杢 由一郎

はじめに

当分野は、新潟大学歯学部歯科保存学第一講座として、歯学部創設2年後の1967年4月に細田裕康先生（現 新潟大学名誉教授、東京医科歯科大学名誉教授）を初代教授として、設立されました。二代目教授岩久正明先生（現 新潟大学名誉教授）、三代目教授興地隆史先生（現 東京医科歯科大学教授）の後任として、2016年4月より当分野を担当しています。2001年には法人化に伴う改組の為、大学院医歯学総合研究科所属となるとともに、現在の名称『口腔健康科学講座う蝕学分野』になりました。一方診療科は、歯学部附属病院設立当初より存在する3科のひとつ第1保存科として1967年4月に設置されました。2003年10月の医学部・歯学部附属病院の統合により医歯学総合業院『歯の診療科』に名称変更となり、2014年11月の新外来棟移転後『予防・保存系歯科』と改称し現在に至っています。

平成29年1月現在のスタッフは15名で、教員7名（教授1、准教授1、講師1、助教4）、医員2名（内1名は社会人大学院生）、大学院生7名（社会人大学院生2名を含む）です。現在のところ少人数ではありますが、保存修復学、歯内療法学の2領域に関する教育・研究・診療を効率的、精力的に進め、また当分野から異動された口腔生命福祉学科・口腔保健学講座・福島正義教授にも、ご協力頂いております。アンテナを張り巡らせ、科学的根拠に基づいた歯科研究・歯科臨床を追究、実践していくことを分野のモットーに掲げています。本稿では、現在取り組んでいる学部・大学院教育、研究の概要ならびに臨床の現状と特色について述べさせていただきます。

教育の概要

1) 学部教育

「保存修復学」、「歯内療法学」に関する講義・実習を担当しています。両者ともに教育内容が多様化した現在においてもなお臨床歯学教育の根幹をなすものです。その他、う蝕とその関連疾患の病因、病態、予防および治療法に関する基礎的知識を統合的に習得する「う蝕学（カリオロジー）」も並行して行われます。また、「生体材料学」では充填材に関する講義を担当し、これらの材料は保存修復学実習で使用しています。保存修復学実習は歯の切削を始めとする基礎的技能教育の第一歩となるもので、回転切削器具（ハンドピース）の把持法や診療姿勢など歯科治療の基本となるものも本実習で習得します。実習では独自開発したう蝕付きの人工歯を使用し、う蝕除去、窩洞形成およびコンポジットレジンを用いた接着性修復法の基本的操作の習得とともに、最小限の侵襲によるう蝕治療（MI：minimal intervention/ミニマルインターベンション）の実践トレーニングを行います。

歯学科4年次後期に始まる「歯内療法学」実習では抜去天然歯を用いて髓腔開拓、根管形成、根管充填までの一連の操作の習得が中心となりますが、学部実習において、歯科用実体顕微鏡を導入している所は、最大の特徴です。2017年度より、抜去歯に替えて人工歯の導入を決定しました。

5年次には臨床予備実習（ポリクリ）が開始します。本実習では、ラミネートベニア修復窩洞形成やNi-Tiロータリーファイルを用いた根管形成など、より専門的・先端的治療法的一端を体験させています。

5年次後期から始まる臨床実習中盤の6年次早

期の特別講義「クリニカルカリオロジー/エンドドンティクス」では、第一線で活躍されている著名な先生を招聘し、講義を行っています。本年度は「MIの概念に基づいたう蝕への臨床的対応（日野浦光先生）」、および「マイクロエンドドンティクス（井澤常泰先生）」が実施され、来年度には「歯根破折のメカニズムと対処法、う蝕の臨床統計学的解析（林美加子先生）」が追加されました。

2) 大学院教育

当分野では、「Evidence based な臨床・研究を継続できる人材」の育成を目標として「独力での研究遂行能力」と「専門医レベルの臨床技能」の習得を支援しています。大学院生自身の興味や発想も尊重し、また国内・外での学会発表を推奨するとともに、インパクトファクターの高い雑誌への論文掲載や各種の賞や外部資金等の獲得を目指しています。

基礎の先生方とは一線を介した臨床視点でのオリジナルのトランスレーショナルリサーチを目指す一方、研究の実施にあたり、基礎系分野にもご指導・ご協力を頂いております。硬組織形態学、微生物感染症学、口腔解剖学、生体組織再生工学等の各分野の先生方にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

また大学院生の積極的な外来診療参加を推奨しています。日本歯科保存学会や日本歯内療法学会の認定医・専門医の申請に必要な症例を蓄積し、修了後、速やかな申請が可能となるよう指導しています。また、Ni-Tiロータリーファイルの臨床応用や歯科用顕微鏡を全チェアユニットに設置し、手軽にマイクロエンドドンティクスなどの専門的技能の習得のための支援も行っています。

研究の概要

当分野では、う蝕とその継発疾患の病因・病態・治療法に関する幅広い内容を研究対象としています。バイオロジーを中心に、バイオマテリアルサイエンスおよび臨床実習教育システムに関する研究などを進めています。臨床系分野として新

規治療法や治療薬の開発など臨床への応用を目指すものです。

1) オーラルバイオフィルムの形成機構、制御戦略に関する研究

- ・オーラルバイオフィルムの形成メカニズムの解析
- ・小動物のマイクロエンドモデルの確立と新規治療法や治療薬の開発研究
- ・難治性根尖性歯周炎における細菌バイオフィルムの実態検索と抑制・治療法の確立
- ・新規バイオフィルム制御概念の確立とマトリックスを標的とした制御戦略開発
- ・抗菌成分のストレス応答による複合バイオフィルム形成更新機構の解明
- ・根面う蝕の病因論の再考と新しい病因に則った予防法と対応の検討

2) 象牙質・歯髄複合体の創傷治癒、修復、再生に関する研究

- ・歯髄の創傷治癒・再生過程における幹細胞の分化機構の解明
- ・歯髄の組織修復・再生メカニズムに関する研究
- ・歯髄の創傷治癒におけるPGE2の役割に関する研究
- ・歯髄における膜輸送体（transporters）の局在と機能に関する研究
- ・歯髄幹細胞を用いた歯髄組織再生法の確立に関する研究

3) 歯内療法用材料の生体適合性に関する研究

- ・生体機能性を備えたケイ酸カルシウム系歯内材料の開発研究

4) 臨床実習教育システムの開発と応用

- ・根管形成技能指導のためのコンピュータ支援によるファイル操作の視覚表現

臨床

う蝕治療は予防の最前線、歯内治療は歯の保存

の最後の砦として、歯科治療における根幹的内容であるとともに歯の寿命を左右する重要な領域です。う蝕治療も歯内治療も、治癒率の向上を図るため、治療技術が日進月歩で変化しています。当科は、基礎研究に裏付けられた最新技術をいち早く取り入れ、当科のモットーである「Evidenced based dentistryの実践」を通して専門的医療の提供を行っています。

う蝕治療は、ミニマルインターベーション(MI)の理念に基づいて、歯質や歯髄の保存を最優先した保存治療を提供しています(図1)。修復処置が正確でなければ二次う蝕の原因となるため、精密な治療を行うために拡大鏡や歯科用顕微鏡を活用して、目で見て治す予知性の高い治療を提供しています(図2)。

また、誰でもできると思われがちなレジン充填も、残存歯質と調和した色調の再現には技術の鍛錬が必要です。当科では、第三者に認められる「ひと味もふた味も違う専門性」を提供できるようスタッフ全員が日々精進しています。

歯内治療は、歯科用顕微鏡、ニッケルチタン

(Ni-Ti)ファイル(根管拡大形成用器具)、歯科用コーンビームCT(CBCT)の登場により、近年、その診断精度・治療成績が格段に向上しました。当科ではすべての診療ユニットに歯科用顕微鏡を配備しています(図3)。

歯科用顕微鏡は、根管内を最大20倍に拡大して観察できるため、歯根破折や歯の亀裂の診断、パーフォレーションの封鎖、複根管の発見など、治療の精度の向上だけでなく、難症例の治療に必須の機器です。Ni-Tiファイルは、根管湾曲や分岐など複雑な根管形態を破壊することなく効率的に感染源を除去することができます。CBCTは、根尖病巣の広がりや根管分岐など、治療前に三次元的構造を把握できるため、診断には特に有効で、体への侵襲を最小限にとどめることができます。当科では、新潟県内外より毎月多くの難症例の紹介を受け、これらの機器を駆使して治療にあたっています。

歯の診療室は2つの専門外来を開設しています。その概要を紹介いたします。

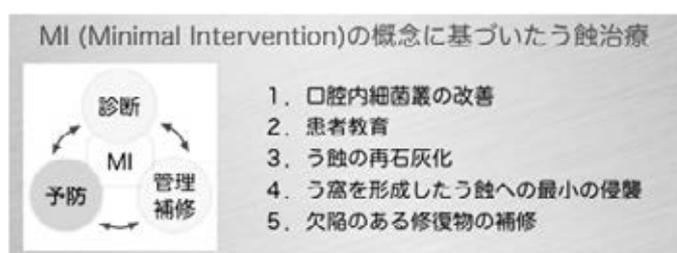


図1



拡大鏡

歯科用顕微鏡

図2



図3

・変色歯外来

変色歯外来は1995年に日本で初めて開設され、福島先生を中心に、歯の色で悩んでおられる患者さんの相談と審美治療に取り組んできました。歯の変色には着色、幼児期に服用した薬物（テトラサイクリン）による変色、歯の形成不全、外傷、失活や加齢等様々で、その原因を究明し治療法を選択する必要があります。また、歯の変色は患者さんの心理的負担が大きく、治療に先立ってカウンセリングを行います。変色歯外来は、単に審美性を改善するキュアだけではなく、悩みに傾聴し、悩みを抱えるに至った背景を捉えるケアも含めた対応を行っています。

・CAD/CAM外来

CAD/CAMはComputer Aided Design/Computer Aided Manufacturingの略で、口腔内に装着される修復物や補綴物の製作工程（設計と加工）の一部をコンピュータ制御の機器に置き換える一連のシステムのことです。2001年に厚生労働省より高度先進医療の認可を受け開設され

ました。現在は製品のアップデートによりシロナデンタルシステムズ社のCERECブルーカムで運用しています。この機器は、口腔内で直接、光学印象を採得する方式で、オールセラミック修復物を来院1回で完了することができます。即日修復（ワンデートリートメント）は、患者さんの来院回数の減少させるだけでなく、印象が不要、窩洞の汚染がない、仮封中の破折の回避や石膏模型が不要で寸法変化がないなど、術者の省力化や作業の効率化とともに、歯質適合性の高い審美修復を提供することができる最先端の技術です。現在では、この分野への参入企業が増加し、数多くのシステムが販売されています。

おわりに

このような誌面において当分野を紹介させていただく機会を頂戴したことに感謝するとともに、今後とも新潟大学大学院医歯学総合研究科う蝕学分野ならびに新潟大学医歯学総合病院歯の診療室をどうぞよろしくお願い致します。



分野構成員の写真

口腔解剖学分野紹介

口腔解剖学分野助教 川崎 真依子

1 はじめに

口腔解剖学分野は平成28年1月、大峽淳教授の就任に伴い、新体制でスタートしました。高度口腔機能教育研究センターより助教の川崎勝盛、4月には助教として川崎真依子が加わりました。また、大学院生として顎顔面口腔外科学分野から3名、組織再建口腔外科学分野から1名、歯科麻酔学分野から2名が当分野で研究を行っております。さらに、4月からは、研究生としてスーダンからの留学生も加わりました。新体制がスタートしてちょうど1年が経過し、ようやく教育、研究ともに軌道に乗ってきたところです。

2 教育について

本分野では、歯学科2、3年生及び口腔生命福祉学科2年生を対象に、人体発生学、組織学、口腔組織発生学のいわゆるミク解剖学の授業・実習を担当しています。顕微鏡で組織や器官の微細構造を見ながら、その組織の機能と形態を結びつけ、組織や器官を理解することが大きな目標となります。できるだけ周りで起きている現象、自分に起きている生理現象、疾病との関連性を意識させることで、組織や器官を俯瞰的に把握する力を養ってもらおうように意識しています。発生過程のドラマチックな形態変化、その裏に隠された巧妙な制御システム、さらに形成後の精巧な組織恒常システム、そんな生命の神秘を感じてもらえるように講義などを工夫しています。今では入手困難な組織標本も多数有り、そのような貴重なものに触れられるチャンスを最大限に生かしてほしいと感じています。基礎科学演習では、通常はたずさわることのできないマウスの胎獣に、実際に見て触れてもらっています。さらに遺伝子発現をマウ

ス胎獣上で可視化することで、一般の講義や授業と違う角度での発生学の理解に繋がればと考えています。

3 研究活動について

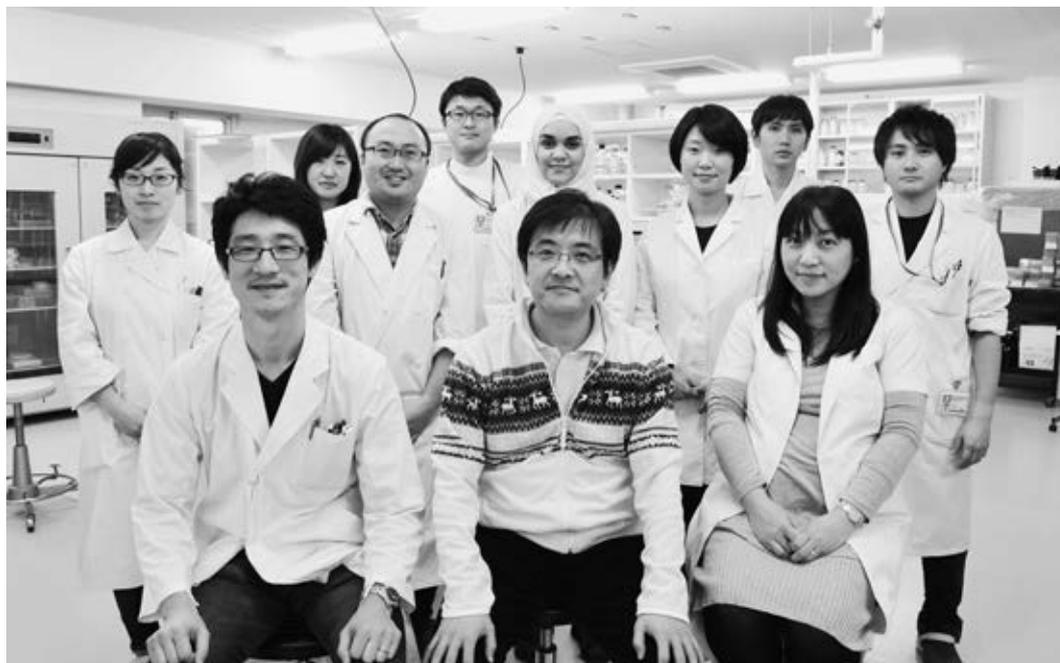
本分野では顎顔面頭蓋における様々な器官の分子発生メカニズムの研究をメインテーマとして行っています。顎顔面頭蓋には、知能、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、発音、咀嚼、嚥下などの重要な機能が満載です。そのため、顎顔面頭蓋の器官の発生メカニズム研究は、単にその形態形成過程の検索にとどまらず、それらの多彩な機能への理解にも直結します。当然、我々の研究も、それらの機能障害や疾病とのつながりも視野に入れています。また、昨今注目されている再生医療の再生は発生過程の再現とも言え、発生学研究は未来の治療法開発へも連動します。このように、分子発生メカニズムの研究は、非常に多岐にわたる事象とリンクしますので、分子発生メカニズムという基礎的研究をメインテーマとしていますが、臨床の教室とのコラボなど、臨床的なテーマにも積極的に取り組んでおります。

我々のターゲットの器官は、頭蓋骨、歯、舌、口蓋、口唇、目蓋、耳、目、顎関節、顎骨、軟骨と、歯科領域にとどまりません。これは、我々は歯科関係者である前に科学者であり、みずから歯科だけと境界を設けてしまうような矮小な考えでなく、頭部は全て守備範囲とし、歯科から他分野へ発信できるような研究を目指すという教授の考えからです。

主な実験の手法としては、遺伝子改変マウスを使用したin vivo研究が主流となります。発生過程では、細胞間、組織間でのクロストークが大きな役割を果たすため、細胞培養という生体とは違

う特殊な環境では実験が成り立たず、あくまでも細胞間、組織間の環境の保持された研究形態が必要だからです。遺伝子改変マウスにおいて引き起こる異常の解析から、その改変した遺伝子の各器官の発生メカニズムを探っていきます。生体ゆえの予想外の出来事に遭遇する事がしょっちゅうあります。多くの遺伝子改変マウスを保有しており、いまでも、さらなる新たな改変マウスを作成中です。これまで誰も見たことのないような先天異常を目にした時の驚きが科学者冥利に尽きる瞬間です。先天異常は、いつも何かが無くなることを意味しません。遺伝子が無くなると、本来そこにあるはずのないものが出現したりします。例を挙げれば、あるはずのない場所に骨ができたり、あらぬところから毛が生えてきたり、顎関節が3つになったり、胎獣なのに老化の遺伝子が発現したり、枚挙にいとまがありません。世界中のどの研究者よりも先に、新しい遺伝子改変マウスを観察する時の緊張感は、言葉では表現し難く、また、その中で生物の発生過程の真実に触れる事が出来

た時の高揚感は、是非皆さんにも実際に体験して頂きたいものです。また、これらの驚くべき現象は偶然起こるのではなく、遺伝子と言う設計図の下に隠れているものが浮き上がってきたことに他なりません。それらの下に隠されたものは、進化の間にマスキングされたものであり、遺伝子変化によって浮かび上がってきた現象は、タイムマシンに乗って、進化を逆走している様なものです。そんな瞬間から、哺乳類誕生の謎に迫れたら最高だなと夢んでいます。様々な夢が当分野でどんどん増殖中です。当分野では、各自が独立した研究テーマを持って、自分で研究し、結果を自分で咀嚼し、次の手を考え進めていきます。毎週1人が、自分の研究の成果報告を行います。他のメンバーの面白い発見を目にすると興奮しますし、次は、みんなをビックリさせてやるとやる気が湧いてきます。そんな活気あふれる研究室です。ご興味のある方は、ぜひ当分野に遊びにいらしてください。



4 おわりに

当分野では、研究や教育だけでなく、お花見、バーベキュー、いも煮会など四季のイベントも積極的に開催しています。朝から晩までみっちり働き、遊ぶ時はとことん遊び、よく食べ、よく飲み

ます。10人程度の研究室ですが、時々高度口腔機能教育研究センターなどの他分野と“旬のものを味わう”などの交流会も開き、臨床の教室に負けないくらいの賑やかさにもなります。そんな遊びにも、ぜひご参加ください。



バーベキューでの1コマ



留学生による自国紹介と自国料理によるランチ

素 顔 拝 見



次世代医療人育成センター

黒 川 亮

平素より大変お世話になっております。次世代医療人育成センターの黒川亮と申します。駄文で恐縮ですが、お付き合いいただけますと幸いです。

私は新潟の生まれで、日本歯科大学新潟歯学部（現新潟生命歯学部）を卒業後、本学顎顔面口腔外科学分野に大学院生として4年間お世話になり、長期出張の後、大学復帰しています。

出張先は、横浜船員保険病院（神奈川県 現横浜保土谷中央病院、指導医：本学OB 堀本 進先生）、ぬまた歯科口腔外科（群馬県 現沼田クリニック歯科、指導医：本学OB 山中正文先生）、両津病院（佐渡市、指導医：本学OB 猪本正人先生）、会津中央病院（福島県、指導医：宮島 久先生）、新潟中央病院（新潟市、指導医：本学OB 鶴巻 浩先生）で、計5病院・6年間に渡る「超」長期出張でした。

横浜では、口腔外科業務に加え、入院患者の口腔ケアを行っており、その後ライフワークとなっています。一方、病院敷地内の宿舎で生活していたため、深夜や明け方の急患対応が多く、医療従事者としての体力づくりもできました。群馬では、歯科治療の基礎を徹底的に教え込んでいただき、更に両津で、地域医療の実状に柔軟に対応する歯科医療（応用編）を経験させていただきました。この「基礎編」と「応用編」が、今も診療を行う上でのベースとなっています。また、会津中央病院は病床数1,200と大きな病院であり、入院患者の抜歯依頼が多く、有病者歯科との出会いがありました。横浜では体力がつかしましたが、会津では有病者にも立ち向かう精神面での修養ができ

たと思います。そして長期出張の集大成となる、新潟中央病院時代は、学会発表や院内で行われる口腔ケアの講師等、伝える立場として、多くの場数を踏ませていただきました。

大学復帰後、はじめの3年間は顎顔面口腔外科医員の所属、3年前より次世代医療人育成センターの特任助教として採用となり、現在に至ります。業務内容は①口腔外科、②医療連携口腔管理チーム（周術期口腔機能管理やMRONJ予防等の有病者歯科）、③次世代医療人育成センター（医学部や他大学への口腔ケア教育）が3本柱となりました。

ところで、次世代医療人育成センターとは聞きなれない部署名かも知れません。本センターは、「未来医療研究人材養成拠点形成事業（文科省）」から設置された部署で、超高齢社会における地域医療を担う人材（すなわち次世代医療人）の養成に力を注いでいます。事業のキーワードに「（誤嚥性肺炎予防目的の）口腔ケア」が挙げられていることから、現在のポストをいただくことができました。また、「多職種連携」も重要なキーワードで、年2回、医学部（医学科・保健学科）、新潟医療福祉大学、新潟薬科大学と本学歯学部、口腔生命福祉学科等の学生を集め、ワークショップとフィールドワークを行っています。先に述べた出張先での醍醐味は、多（他）職種との連携にもあり、診療上の利便性や安心感とともに、スタッフ間の仲間意識や楽しさがあったことが忘れられません。学生さんには、その点についても伝えていきたいと思っています。

最後に趣味について。この歳（40歳）にしてプロ野球好きで、パファローズ、ベイスターズを中心に年数試合観戦に行っています。実は野球歴が長いのですが、選手として全く芽がでず、最近、応援業には才があることに気づきました。横浜スタジアムで1人応援していたところ、大洋ホエールズの応援団員だったという見知らぬ方に声量を

褒められたことが私の最も輝かしい球歴です(笑)。また、妻(本学OG旧姓・青木久絵)が「新潟コアラーズ」という女子ソフトボールチームで選手をしており、その手伝いなんかもしています。選手、マネージャー募集中ですので興味のある方はお声掛けください。

【追伸】ワークショップとフィールドワークも随時参加学生募集中ですので併せてよろしく願います!!



高度口腔機能教育研究センター
助教

川崎 勝 盛

こんにちは。2015年4月より高度口腔機能教育研究センターの助教を拝命いたしました川崎勝盛です。素顔拝見ということで、この場をお借りして、ご挨拶をかねて略歴と自己紹介などいたしたいと思います。私は新潟県新津市(現新潟市秋葉区)出身で、高校は新津高校に通っていました。小中高と柔道をやっていましたが、今は見る影もなく、誰に言っても信じてもらえません(苦笑)。その後、新潟大学歯学部へ進学し、卒業後は小児歯科の大学院へと進学しました。大学院を卒業後は約2年ほど小児歯科の医員として働かせていただきました。2010年に幸いなことに留学の機会をいただき、英国ロンドンのKing's college、Paul Sharpe 教授のCraniofacial Development & Stem Cell Biologyで研究留学をさせていただきました。Paul Sharpe 教授は、先日「アルツハイマー治療薬『タイドグルーシブ(Tideglusib)』を使って、象牙質が再生した」という発表をし、日本でもニュースに取り上げられたので、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。残念ながら、私が携わっていたのは別なプロジェクトでしたが…。留学先での研究は、小児歯科での経験を活かし、過剰歯の発生をメインに遺伝子改変マウスを用いての研究をしていました

が、この辺りの詳細は歯学部ニュースの125号で「留学報告」の中で書かせていただきましたので、そちらを読んでいただければ幸いです。

帰国後、ご縁がありまして、英国でお世話になっていた大峽淳先生が、新潟大学歯学部の口腔解剖学講座の准教授に就任されまして、英国で行っていた研究をそのまま継続して行っております。現在では、大峽先生が同講座の教授に就任され、また研究棟も新しくなり、気分も新たに研究に勤しんでいます。新しい研究棟は実験機材も充実しており、以前より一層できることも増え、毎日新しい知見が得られるのを楽しんでいます。まだ見たことない方がいらっしゃれば、是非一度見学にいらっしゃって下さい。

さて、助教に就任後、今までの研究一辺倒の生活から変わった点と言えば、やはり教育に携わるようになったことでしょうか。同じ講座で研究している大学院生の指導や、学部の2、3年生を対象にした講義など、教育の現場に立つようになると、「何かを教える」と言うことの難しさを痛感します。人に何を教える以上、自分はより深くその事柄について理解しておく必要がありますし、自分が持っている知識を全力で教えても、受け取り手が十全てを吸収してくれるとは限らないのが教育の難しいところです。先日は、「学生参加型の講義形式」を目指し、「Turnig point」と言うPowerPointを利用した投票システムがあることを全学のFDから教えてもらい、早速講義に取り入れてみました。当日教えた内容について、講義の後半にミニテスト形式の選択問題を、全員参加で答えさせる、と言う試みを行いました。学生さんにとっては初めての事だったので、若干戸惑っていたようですが、「知識の定着」という面では有用だったように思われます。しかし、今の真面目な学生さん達と触れ合っていると、自分が学生だった頃、いかに不真面目だったかと言うのを思い出してしまって、赤面することもしばしば…。

趣味は、これといって無いのですが、今3歳の息子がおり、毎日毎日少しずつ成長する姿が微笑ましく、日々の癒しになっています。本当に微笑ましいエピソードのストックが山ほどあるのです

が、文字数の関係で書ききれないので、割愛させていただきます（親馬鹿）。

今後とも教授をはじめ諸先生方にご指導ご協力いただき、研鑽を重ね、自分の得たものを後輩へ伝えていきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。



新潟大学医歯学総合病院
矯正科助教

高橋 功次郎

はじめまして。私はこの度、平成28年4月より新潟大学医歯学総合病院矯正科助教を拝命いたしました高橋 功次郎（たかはし こうじろう）と申します。文才の無い私には自由記載ほど難しいものはなく不安でいっぱいですが徒然なるままに書かせていただきます。それでは生い立ちからその時々のお出来事を振り返っていきこうと思います。私は昭和53年4月に福島県郡山市で生を受けました。この頃我が国では、池袋に超高層ビルであるサンシャイン60がオープンし、原宿では竹の子族という人たちが踊りまくっていたような時代であったそうです。また、私が生後約2か月で被災した宮城県沖地震が起きた年でもあります。地震があった日は父が仕事で不在であり、当時の住まいで母と兄は2人で身を寄せ合って倒れてくる家具から私を守ってくれたそうです。これほどまでに大きな地震は体験したことがなく、後に母は地球全体が揺れたと感じたそうです。その後私はすくすくと成長し、父の仕事の都合で幼稚園の途中から宮城県に移り住むこととなりました。幼少期の私はとにかく昆虫が大好きで、将来はファーブルになる（当時ファーブルは職業名だと思っていました）と息巻いていたそうです。しかし、コオロギとゴキブリを間違えて母親に得意げに講釈を垂れ、怒られ、また家族全員が虫嫌いであったことからこの夢は叶いませんでした。小学校低学年時になると強い男になって大切なものを守れるよ

うにと、父により半ば強制的に少林寺拳法の道場の門を叩き入門させられました。裸足に道着一丁で真冬の田んぼ周りをランニングし、その後数時間の稽古がとても辛かった思い出しかありません。今考えても、当時の私は何に備えて鍛錬していたか不明です。小学校に上がるとバスケットボールのスポーツ少年団に入り週7日練習で汗を流し、膝を壊しました。しかし、我慢強く膝の治療を続けレギュラーポジションを獲得し、晴れてデビュー戦の日、試合開始のホイッスルの直後、ジャンプボールは私の手に吸い込まれ、風のように早くゴールまで到達し、何万回も練習したレイアップシュートをファーストチャンスでたたき込みました。自軍のゴールに。会場は静まり返りました。そうです。OWNゴールです。このエピソードからわかるように私は人前が苦手で極度のあがり症だったので。その後は中学校、高校は仙台市に移り住み、福島県郡山市の奥羽大学歯学部に入學し、歯科医師を志し、勉強に励みました。大学時代はあがり症の克服というわけではないのですが、地元郡山市で活動している劇団に所属し、舞台公演を重ねました。学生生活6年間はあっという間に経過して無事国家試験を突破し、様々な縁で研修医から新潟大学で勉強させていただくこととなりました。また研修修了後は矯正科の大学院生として入局いたしました。学位研究は当科の齋藤教授、口腔生理学分野の山村教授、北川准教授の元で基礎研究に励みました。マウスとラットの違いもわからない状態から根気強く導いてくださった諸先生方には感謝しかありません。大学院卒業後に臨床研究もやってみたいという気持ちにさせてくれたのは4年間の基礎研究があったからこそだと今でも思っております。助教となった現在は、研究、教育、臨床に向き合い、まだまだ周りの先生方に助けてもらいっぱなしの毎日ですが、やりがいを感じております。

最後に、最近痛感させられることは、当たり前のことですが人間は1人では何も成すことができないということ。一緒に仕事をしてもらえる人がいて初めて何かを残すことができるということをお忘れずに、この職務を全うしたいと思います。乱文申し訳ありませんでした。

My Journey

Farah Omari



I grew up in Jordan, a small middle eastern country. Since I was in high school, I wanted to visit Japan. Japanese culture, food, technology, anime has always fascinated me. Soon then, I entered dental school at the University of Jordan, and my life was completely shifted. All I cared about is my lectures, my clinics, patients, lab works, exams... I almost forgot my passion toward Japan. In my fourth year, I took a class which was given by a Jordanian professor who was a former PhD student in the division of bio-prosthetic at Niigata university 15 years ago. I remember saying to him "I want to do my PhD, and I want to do it in Japan, and I want you to help me" . I was lucky enough to have his guidance and presence in my life. Then, when I was in my senior year, he sent to me the application for Japanese Government Monbukagakusho: MEXT Scholarship Program. It was the start of a new chapter in my life.

I was blessed to be accepted by MEXT, and I was even more blessed to be accepted in the same division of Bio-prosthetic, here at Niigata university. In no time, I found myself on the plane heading to Japan. I only realized it, when I looked through the Shinkansen window, "ohhhhh, I'm really in Japan!!!!!" said to myself. I was terrified, it was my first time to be

alone without my family. Yet meeting my division professor, my supervisor, and some of the department staff over dinner on the same day of arrival, somehow reassured me again. They were nice, generous and made me feel welcomed.

After that, I had to take some Japanese language classes at Igarashi campus. I had the chance to meet a lot of exchange students whom I enjoyed my time with. Few months later, I joined the Bio-prosthetic division. By far, I can say this is the most important step I took in my life and I am thankful for it every day. Being around those great dentists/researchers, being able to learn from their experiences, work under their supervision, and being a part of their department, is a once-in-a life-chance. Their warm hearts and kindness are helping me to cope with my feeling of loneliness and home sickness.

For so many reasons, Japan is a unique and mysterious country and for the rest of the world we almost know nothing about it, so since I came, I have tried to explore the culture. I start taking a Japanese traditional flower arrangement (Ikebana) classes every month. I have learned that it's more than an arrangement. It is a disciplined art form in which the arrangement is a living thing where nature and humanity are brought together. It is steeped in the philosophy of developing a closeness with nature. Also, it demonstrates respect for



One of my arrangement using summer flowers

the natural world by following the normal seasons in using and joining the flowers together.

In my period of stay, I had the chance to visit many amazing places, museums, and cities. I have enjoyed snow and winter at Shirakawago in Gifu prefecture. It's a world heritage site where historic farmhouses shine during the winter light-up. It was magical! Enjoyed the cherry blossom at Hakusan park. The New green (Shinryoku)

at Fukushima prefecture. The fireworks at Nagaoka city during summer with my division. The red leaves in autumn at the Yahiko mountain. I shouldn't forget all the remarkable places inside Niigata city like the Northern Cultural museum, Minato Inari Shrine, The Old Saito Residence, Niigata rice cracker museum, and many others.

I also found an endless pleasure in soaking myself in onsen hot water. I always try to find the chance or excuse to go. Japanese food is another pleasure I discovered, especially Soba noodle. Their cuisine is so delicious, various and healthy. No wonder that Japanese have the longest life span in the world.

If we want to divide countries, there would be developed countries, developing countries, and there would be JAPAN! Here are the most surprising things I found in Japan: There is no garbage bin in the streets, yet the streets are so clean. You can find many and many of vending machines. The taxi door opens automatically. Due to health concern, wearing face make is completely normal. People don't eat while waking in public places. Every restaurant has a plastic menu for their food.



Shiragawago during winter



New green at Fukushima prefecture

People are so quit in public transportations. In valentine day, girls give present to their partners! Convenient stores are very convenient. There is an official holiday almost every month. Everything is punctual here, buses, trains, even humans. Stamp (Hanko) is still usable. To inter onsen water, you should be naked! Seasonal changes are a great deal, there is cherry blossom viewing (Hanami), red leaving viewing (Momijigari) and many others. Japanese people love festivals (matsuri), you can join many of them, especially during summer time. The food is delicious, nature is

gorgeous, temples (shrine) are majestic, cities are safe, people is polite. I just love being in Japan.

I still have a research to do, program to accomplish, work to master, cities to visit, people to meet and things to experience, and I should be thankful for the Japanese government, our department professor Dr. Uoshima katsumi, my supervisor Dr. Nagasawa Masako, my professor in Jordan Dr. Ameen Khraisat and to every member in my division for the opportunity, guidance and the chance. Thank you all.



Red leaves at Yahiko mountain

ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 嶋田 菜奈子

プロフェッショナルとは…。ここで語るには些か時期尚早なのでいつか出演した際に回すとして、今回はポリクリについて振り返ることとします。ポリクリとはポリクリニック (Policlinic [英]、Poliklinik [独]) の略で臨床予備実習のことを指します。5年生の5月から臨床実習が始まるまでの間行われ、各診療科をまわります。4年生までに行ってきた実習よりも実践的で、学生同士で麻酔を打ち合うこともありました。痛みを伴う実習の日は恐怖で朝も起きられないほど憂鬱でしたが、今考えると患者さんの立場に立つことができる良い体験だったと思います。

ポリクリではそれぞれの科でよく遭遇するシチュエーションを想定し、決められたシナリオ通りに診療を行う練習をしました。臨床実習が始まり、指示医の先生のもと患者さんの診療を行うようになると、患者さん毎に口腔内の状態が千差万別であることを痛感します。ポリクリでは学生同士、時には模型を使用して、歯周病なら歯周病だけ、う蝕ならう蝕だけ、義歯なら義歯だけを診ていましたが、実際の患者さんではこれら全てが1人の患者さんの口腔内に存在することがあります。患者さんを目の前に「ドラえもん!!」と叫びたくなる事もありました。そんなとき、いったん冷静になり記憶の四次元ポケットからポリクリで学習した基本知識を取り出してみると、基本の組み合わせと応用によって対処することができ、基本の大切さを実感しました。

一方で、シナリオ通りの練習だけでは不十分だったことに気付いた事もあります。そうです、医療面接です。医療面接はかつて問診と呼ばれていたもので、診

断の目処をつけるためのインタビューです。ポリクリでは患者さん役・先生役それぞれに大まかな台本があるため、話をしながら質問を考えることをせず、決められた質問をするだけで終わってしまいました。臨床実習で初めて医療面接を行った時、ポリクリと同様に患者さんに質問をしました。自分の中ではたくさん質問をし、いい仕事したなと満足していましたが、いざ診断をつけようとすると全く情報が足りていないことに気が付きました。なんということでしょう！先生方の医療面接は決められた質問だけでなく、似たような疾患を除外できるように患者さんの症状に合わせて質問を変えているではありませんか。それだけではありません。多くの疾患やその疾患の症状についての知識、さらに解剖学的な構造や生理的な仕組みなど多くの知識を動員して診断を導いていたのです。まさに匠の技だと感じると共に自分の知識不足を思い知らされました。

現在、臨床実習をしていて余裕がなくなる時や大変だと感じる事も多々あります。しかし今後振り返った時、全てが楽しかった思い出となり、ここでの経験は歯科医師となつてからの人生に役立つことでしょう。貴重な経験をさせていただいているという感謝の心を忘れず、“仕事の流儀”を語るその日に向け自己研鑽に努めます。



筆者：左端

ポリクリを終えて

歯学科5年 松崎 奈々香

この原稿を書いている今は、もうすぐセンター試験という時期です。自分が受けてからもう5年と時間の経つはやさに驚いています。新潟大学歯学部に入學してから5年生になるまでは基礎や臨床の講義、模型実習などがメインで、実習では作業が遅い私は毎回あくせくしながら一生懸命になってこなしていました。そうしてあっという間にずっと上の先輩方が着ていると思っていた緑衣（5、6年生の診療着）に自分が袖を通す学年となり、緊張と不安を抱えながら登院式をむかえポリクリが始まりました。

“ポリクリ”とは臨床予備病院実習のことで、新潟大学歯学部にある各科を1日から1週間かけてまわり、臨床を想定した実習を行います。私は歯学部に入るまでは歯科に10を越える数の科があることを知らず、改めて各科の特徴を知る良い機会でもありました。何より今まで授業で学んだ知識を土台に、初めて実際の人を相手にした実習で臨床と結びつけた理解ができ、新しく学ぶ事も多く濃密な実習でした。

口腔外科での採血や、麻酔科での点滴及び下顎孔伝達麻酔といった、学生同士で痛みや恐怖と戦った実習は特に印象に残っています。今までの実習は模型相手ばかりで一様に同じ方法でしたが、人が相手であると当たり前ですが腕の静脈も口の中の見え方も様々で、刺される以上に人に針を刺す時の方が責任を感じ、緊張したのを覚えて

います。

また、私の班のポリクリ初日は歯科総合診療部の“医療面接”でした。簡単に言うと患者さんの訴えやお話を聞くことです。一見、ただ話を聞くだけで良いのではないかと思っていましたが、実際に学生同士で練習すると意外と難しいものでした。例えば痛みがある場合、痛みの種類や程度によって歯の問題なのか、神経までのものか、痛み期間は、今までにその歯に歯科治療を受けたことがあるのか、治療をする上で出血しやすいなど問題となる事項はないか、など症状から頭にいくつかの診断を浮かべながら、こちらから質問をして診断を導き、治療法を選択していかなくてはなりません。必要な情報を聞き漏らさないように答えやすい開かれた質問、また逆に話の内容が多く、話題が逸れることがあれば大事なポイントに絞ってはいいいえで答えられるような閉ざされた質問などを使い分ける必要があったり、患者さんの気持ちに共感した言葉を入れることで話しやすい環境を作ったりと、臨床の間では歯科の知識だけではなく、質問力やコミュニケーション能力も歯科医師にとって大変重要な力であると学びました。

振り返るとポリクリは今まで学んだ知識を臨床実習へ結びつけ、臨床の間に出る責任を次第に形成していく橋渡しのような実習でした。今はまだ失敗と反省を繰り返しながらではありますが、恵まれた環境で実習を行わせていただけることに感謝しつつ、これから続く臨床実習で成長できるよう努力をし、国家試験を48期の皆で乗り越えていけたらと思います。



筆者：左から3番目

早期臨床実習を終えて

早期臨床実習を終えて

歯学科1年 相澤知里



1年次のカリキュラムの中に「早期臨床実習」という言葉を初めて見つけたときの緊張感は今でも忘れられません。実際に早期臨床実習が始まってからも、新しい環境で積極的に物事を吸収しようという前向きな気持ちがある一方で、白衣を着ているにもかかわらず専門知識をほとんど持たない私が医療現場に足を踏み入れるということに戸惑いを感じていました。しかし、実習を進めていく中でそのような戸惑いをも忘れてしまうくらい多くのことを学ぶことができました。振り返ってみると、それらの中には専門知識よりもはるかに大切なことが多くあったように思います。

「患者役実習」では、自らが患者となり6年生の先輩に診察をしていただきました。実習という形で患者役を体験することで、患者としての気持ちに注目しながら診察を受け、普段では気づくことのできなかつたさまざまなことを発見することができました。さらに、診察や治療の進め方、治療器具の使い方なども教わりました。治療器具には患者役実習を行ったユニットだけでも多くの種類がありました。それらを使いこなす姿に憧れを抱くとともに、歯科医師になるためには本当に多くのことを勉強しなければならないのだということを痛感しました。そして、これからの学習に対する決意を新たにすることができました。

「治療見学実習」では、主に4大診療科を見学させていただきました。歯学にもさまざまな専門分野があるということは知っていましたが、実際に治療の様子を見ると、使用する治療器具から治療の進め方に至るまでそれぞれの分野で大きな違いがあるということが改めて分かり驚きました。しかし一方で、共通して見られたこともありました。それは「歯科医師の患者さんとの密なコミュニケーション」です。患者さんに治療方針を説明する際に患者さんが確実に理解し同意しているかを確かめながら行う姿が、私の描く理想の歯科医師像に重なり強く印象に残りました。

「患者付き添い実習」では、来院された新患者さんを案内させていただきました。ご案内していく中で、大学病院の受付から会計に至るまでの連携のすばらしさを実感しました。また、そのような優れたシステムがありながらも患者さんを待合室まで迎えに来る担当医の姿に心が温かくなりました。最初は不安げな表情を浮かべていた患者さんが、別れる時には笑顔になり「ありがとう」と言ってくださいました。それが本当に嬉しくて今でも忘れることができません。この気持ちはいつまでも大切にしていきたいです。

今回の早期臨床実習は、学ぶべきことが凝縮された有意義なものであり私自身も積極的に取り組むことができました。しかしこれらは自分の努力だけで得たものではありません。先生方をはじめ6年生の先輩方、協力してくださった患者さんのご指導があってこそそのものだと感じています。感謝の気持ちと高い志を常に持ち続け、自分の思い描くあるべき歯科医師の姿に少しでも近づくことができるよう日々努力を重ねていきたいと思いません。

早期臨床実習を終えて

歯学科2年 相馬 歩

昨年度までザ・キャンパスライフを五十嵐にて楽しんでいたのが夢だったかのようで、私たち歯学科2年は今年度より旭町に生活の拠点を移し、主に基礎系学問を新たな環境に身を置いて学んでいます。日々学んでいくにつれて知的好奇心をくすぐるような発見が多く、とても充実しているのですが、ある時勉強で得た知識の臨床的意義を考えもしないどころか歯科医師になる自覚すら曖昧なままに私は勉学を進めてきたことに気がつきました。そんな時に早期臨床実習Ⅱがあり、ここでは私が早期臨床実習Ⅱで何を感じ、学んだかについて述べたいと思います。

この授業では新潟大学の臨床の現場を見学するのですが、1年の際にも早期臨床実習Ⅰというタイトルが似た講座がありました。早期臨床実習ⅠとⅡの大きく異なる点は見学内容がより専門的でレベル上がっているのはもちろんのこと、自分たちが得てきた知識量の差、そしてそれに伴って治療現場を見学する際の質が向上したことだと思えます。具体的には歯科材料学を学んでいたことでどのような治療を行っているのかを完全とまではいきませんが、名前は聞いたことある！という位まで理解できるようになり、基礎と臨床がリンクすることでより一層勉強の意欲を掻き立てる一因にもなりました。加えて先生方が私たちが理解できる範囲で説明をしてくださるため、未知なものばかりという昨年度とは全く異なる状況へと変化していました。治療現場の見学に加えて実技実習も数回あり、歯科に直結する実習が本格的に行われていない私にとっては病院見学と同様にとっても刺激的で、自分は将来歯科医師になるという自覚を改めて確認することができました。

最後に歯科医師である前に社会人として成長する必要があると気づかされる機会がありました。とある科の治療見学中に患者さんの血圧と酸素分圧を測らしていただけるチャンスが一度だけありました。突然のことだったのでどのように声をかけて、どのように患者さんに説明し、スムーズに計測できるかをよく把握していなかったためかなりグダグダになってしまいました。たった数分の出来事でしたが患者さんとの接触を経験することで現場での緊張感、歯科医師と患者さんとの距離感をより強く感じる事ができ、見学だけでは得ることができない貴重な体験をすることができました。そこから歯科医師の接遇にはコミュニケーション能力が重要になってくると私は感じました。現在私は居酒屋でバイトをしているのですが接客業としてはとても共通項は多く、特にお客様に心地よい思いを提供する部分は同じだと感じます。バイトで学んだお客様への気遣い、言葉遣いなどを歯科医師での仕事場で還元できるようバイトを励みながら、2年生で得た経験そして知識を基盤とし今後も歯科について意欲的に学んでいこう、そう思えたのはこの早期臨床実習Ⅱがあったからだとは私は思いました。



筆者：左

平成28年度医歯学祭を終えて

歯学部歯学科3年 松田 きよら

10月29日、30日に行われた、第6回になります今年度の医歯学祭は、皆様のおかげで無事に開催でき、成功裡に終えることができました。お忙しい中、大変多くの方にご来場いただきまして、誠にありがとうございました。

今年度は「～LINE～人とのつながり～」をテーマに掲げました。これには、学生と学生、学生と大学、大学と地域など、大学を拠点として様々な繋がりをもって相互に理解を深め合い、協力していく広がりを作りたい、という願いを込めました。その願いどおり、当日は医学生、歯学生が結束を深めるだけでなく、多くの方との交流も行えたと実感しております。

医歯学祭は、資金集め、企画立案、運営まで全て学生たちの手によるものです。そのため、様々な医療分野の企画もあれば、ユニークで学生らしさのある企画もあり、充実した内容になったものと思います。例えば、今年は田村浩一先生による特別講演会がありました。田村先生は、民放で放送されて話題になった人気ドラマ、「フラジャイル」の監修をされた先生です。「病理医とは、病理学診断とは」をテーマに講演していただきました。一般の方にはまだまだなじみがない分野ですが、学生だけではなく地域の方々に向けた、わかりやすく興味深い内容でした。そのほか、部活動の展示など、普段の学生生活を垣間見るような企画が多く行われ、大盛況に終えることができました。

歯学部では、無料歯科相談、歯学部の各部活による模擬店も出店されました。無料歯科相談では、研修医の先生や医局の先生方のご協力のもと行いましたが、この企画は他の企画と同様に体育館で行ったため、相乗効果で例年以上のお客様に

お越しいただくことができました。来てくださった方には歯ブラシや歯磨き粉等の歯科用品のプレゼントを行い、とても好評でした。お越しになった多くのお客様の悩みを解決し、歯科疾患の予防に対する意識向上、定期検診の重要性を理解して頂けたと思います。このように、多種多様なイベントを用意したことで、ご参加くださいました皆様に、1つでも多くの楽しい思い出をつくっていただけたかと思います。私たち医歯学祭実行委員は、各学部学科に所属し、勉学に励む学生です。このような貴重な経験を活かし、地域貢献、社会貢献できるような医療従事者となれるよう、今後も勉学に励みたいと思います。

最後になりましたが、医歯学祭を応援してくださった地域の皆様、大学関係者の皆様、支えてくれた仲間たち、そして医歯学祭の開催にご協力いただきました全ての皆様に、厚く御礼申し上げます。未熟な点多々ありましたが、温かいご声援をありがとうございました。また、今年の医歯学祭にご来場くださいました皆様、そして共に創り上げた仲間たちにとっても、かけがえのない思い出になりましたら、幸いです。



筆者は下段の右から3番目

スキー部

清水 慎太郎

こんにちは。歯学部スキー部主将の清水慎太郎です。今回、部活動紹介でスキー部について執筆する機会をいただき、ありがとうございます。

この機会に、スキー部について多くの方に知っていただけたらと思います。

スキー部では現在8人の現役部員で活動しています。現役部員が8人という「少ないな」という印象を持たれるかと思いますが、確かに人数こそ少ないですが、3月に行われるオールデンタルを1年間の目標として、充実した部活動をする事ができています。オールデンタルのスキー部門にはジャンプやモーグルは無く、競技はアルペンのみです。アルペンとは決められたコースを滑る速さを競う競技で、スキー競技の中で最もスピードが出る競技です。

スキー部は他の運動部と比べても、とても自由な雰囲気部の活です。練習や大会への強制参加はなく、自分のペースでスキーをすることができます。もちろんしっかりスキーをしたい人は部活動全体で応援してもらえます。

僕自身、1年生の時に北海道で行われたデンタルに1人で出場したところ、3人の先輩方が北海道まで応援に来てくださいました。初めての大会での先輩の存在はとても心強く、自分もこんな先輩になりたいと思ったことを今でも覚えています。

スキー部での練習は主に1月以降、水曜日の夕方から新発田市にある二ノックススノーパークでおこなっています。多くの大学では長期休みの合宿でしかできない練習が、平日の夜にできるのは新潟大学生の特権です。

また、この練習は、新大全学・医学部・歯学部・日歯大新潟歯学部のスキー部の合同練習のため、人数が少ない歯学部スキー部でも仲間やライバルができ、充実した練習をするとても良い機会になっています。

もちろん、平日練習の他にも週末の練習や、3

月にデンタル会場に前乗りして合宿をおこなったりしています。

部員が少なく大変なこともありますが、他大学のスキー部との交流の場には恵まれています。例えば昨年度、菅平（長野県）で行われたオールデンタルでは、19大学から約160人が参加しました。さらに男子は大阪大学・鶴見大学さんと、女子は朝日大学さんと相部屋にして頂きました。初対面だったので初日こそ少し辛かったものの（笑）、5日間の大会期間中に仲良くなることができ、今から次のデンタルでの再会が楽しみです。

また、スキー部は顧問の福井先生をはじめ、多くの先生方にご支援を頂いて活動をすることができます。先生方はいつも（新入部員を勧誘することができなかった年の新入生歓迎コンパでさえ）温かく、優しく私たちを指導して下さいます。

最後に、スキー部では部員を大募集しています！1年生でなくても構いません。

スキーは運動が苦手な方も楽しめますし、生涯の趣味にできるスポーツです！他の部活動を引退した方やスキーをやったことがある方ない方、新しいことを始めたい方など、少しでも興味を持って下さった方は、ぜひ、スキー部と一緒にスキーをしましょう！



デンタルでの集合写真 筆者右端

剣道部

歯学科3年 森川雄太

剣道部は、歯学部だけでなく医学部と合同で行っていて、医学部歯学部剣道部として活動しています。部員は総勢22名（1月6日現在）で、現在の3年生を中心に日々稽古に励んでおります。活動場所は、以前までは使用していた体育館の取り壊しにより、およそ2年の間、近辺の体育館施設や学校の体育館をお借りしていました。現在では、新たな体育館が建設され、その3階に設けられた武道場で活動しています。19時から21時までを月・水・金曜日の週に3回という少ない練習時間ではありますが、先輩や後輩は関係なく学生同士が互いにアドバイスをし合うなど切磋琢磨して技術の向上に努めています。

今年の歯学体の結果ですが、個人戦は男子1名がベスト16、団体戦は残念ながら男子は予選リーグ敗退に終わり、女子はベスト8まで進出しました。歯学体における団体戦は、1チームにおいて男子は一般的な5人、女子は3人によって構成されます。ただし、男子のチームのみ人数が足りない場合は女子選手の男子団体戦への出場が認められています。もちろん、男子の方が女子よりも体格や体力的にも有利ですので、人数が足りているチームは基本的に男子のみでチームを組みます。しかし、新潟大学は歯学部生の人数が少ないため男女混合のチームで出場しました。昨年は、男子3人・女子2人のチーム編成でベスト8まで進出することができましたが、今年は、男子2人・女子3人というやや無理のあるチーム編成で試合に臨みました。相手チームには、女子選手相手には男子は三本勝負で二本勝ちしなくてはならないという自尊心から発生するプレッシャーが少なからずあると思われる、当時のことを振り返るとそういった意味では相手は戦



いづらかったのではないかと思います。

歯学体の剣道部門の他の競技部門ではあまり見られない1つの特徴として、大会の日程の全てが終了したその日の晩に、とある集会在執り行われます。その集会の内容は、その大会に参加した国公立大学が一か所に集まり、盃を酌み交わすことです。これは通称、「国立飲み」と言われておりますが、世間一般ではこのことを「打ち上げ」と呼ぶのかもしれませんが。これを機に、私たちは他大学に多くの友人ができました。試合では互いに戦い、国立飲みで打ち解け、また来年一緒に剣道をしようといってその日は別れを告げます。私は今でもそこでできた仲間たちと連絡を取っていますが、今後歯科医師になった後も彼らとの関係が続くことを願っています。

剣道には「交剣知愛」という言葉があります。剣道は勝負事である以上、剣で相手を負かすことも必要であり、ときに重要視されます。しかし、我々新潟大学医学部歯学部剣道部は、勝負に勝つことと共に、先に述べた交剣知愛を胸に今後の稽古に励んでいきます。

交剣知愛：「剣を交えて“おしむ”を知る」を読まれ、剣道を通じて互いに理解しあい人間的な向上をはかることを教えたことばである。愛はおしむ（惜別）、大切にしてお手離さないということの意味しており、あの人とはもう一度稽古や試合をしてみたいという気持ちになること、また、そうした気分になれるように稽古や試合をしなさいという教えを説いたことば。（Weblio辞書引用）



学会報告

平成28年度 新潟歯学会報告

平成28年度新潟歯学会集会幹事 船山 昭典
組織再建口腔外科学分野

平成28年度歯学会の集会係は組織再建口腔外科学分野が担当させていただきました。大きなトラブル無く歯学会を行うことができました、まずもって会員の皆様にお礼申し上げます。

平成28年4月23日（土）に第49回新潟歯学会総会を例年通り歯学部講堂で開催致しました。総会議事では平成27年度の会計決算報告および会計監査報告が行われ、今年度の事業計画ならびに予算案が承認されました。平成27年度に創設された、新潟歯学会賞が歯周診断・再建学分野の中島麻由佳先生に、新潟歯学会奨励賞が小児歯科学分野の村上智哉先生にそれぞれ授与されました。総会議事終了後、6題の一般口演が行われました。生体歯科補綴学分野教授の魚島勝美先生にご協力いただき、特別講演として大阪大学大学院 生命機能研究科/医学系研究科 幹細胞・免疫発生研究室教授 長澤丘司先生を講師にお迎えし、「造血幹細胞・前駆細胞を維持する骨髄の微小環境（ニッチ）」と題するご講演をいただきました。

平成28年7月9日（土）には平成28年度新潟歯学会第1回例会を歯学部講堂で開催致しました。12題の一般口演と、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科 摂食環境制御学講座 口腔解剖学分野教授 大峽淳先生に「ミステリアスな旅の謎に挑む」と題するご講演をいただきました。

平成28年11月5日（土）には平成28年度新潟歯学会第2回例会を歯学部講堂で開催致しました。18題の一般口演と、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔健康科学講座 う蝕学分野教授 野杵由一郎先生に「バイオフィルムと対峙して4半世紀」と題するご講演をいただきました。

総会、第1回例会、第2回例会において、お忙しい中、座長をしていただいた先生方をはじめ演者の方々や参加して下さった会員の皆様のご協力により、平成28年度の新潟歯学会を無事に終了できましたことを、この場をお借りして、皆様に



新潟歯学会賞 中島麻由佳 先生



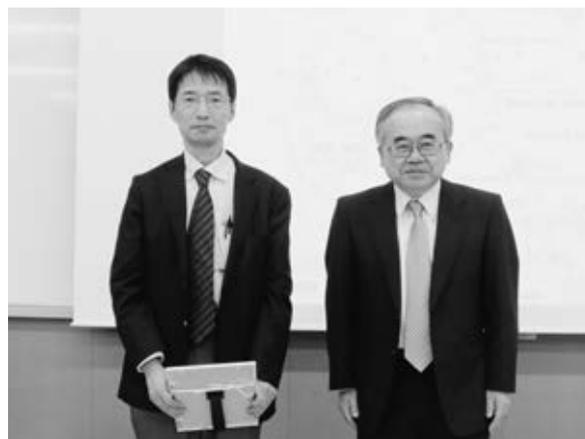
新潟歯学会奨励賞 村上智哉 先生

厚く御礼申し上げます。また、平成29年度も新潟歯学会集会係は再建口腔外科学分野が担当させていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください (<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。平成

29年度も会員の皆様からの多数の演題をお待ちしております。また、新潟歯学会賞の詳細についても同ホームページに記載しております。平成29年度の新潟歯学会賞の応募締め切りは平成29年3月31日の予定ですので奮ってご応募下さい。



長澤丘司 先生 特別講演



大峽淳 先生 教授就任講演



野杻由一郎 先生 教授就任講演

同窓会だより

最近の同窓会活動について

同窓会副会長 野内 昭宏

私からは、前回の歯学部ニュース以降の3つの出来事について、報告させていただきます。

◎歯学部50周年記念のお祝い金贈呈

新潟大学歯学部は昭和40年4月に、日本海側唯一の国立大学歯学部として設置されました。以来、この3月に歯学科47期生と口腔生命福祉学科10期生を含めて、約2,700名の卒業生を輩出しました。

歯学部50周年記念祝賀会は歯学部主催で平成28年7月19日（土）に行われましたが、それに先立つ7月14日（木）午後、当同窓会から前田学部長に金一封を贈呈しました。

当同窓会も、まもなく50周年を迎えます。どのような形で迎えるか、検討していきます。



前田学部長に金一封を贈呈する有松会長

◎第32回全国歯科大学同窓会・校友会学術担当者連絡会

この会は、全国の歯科大学歯学部同窓会・校友会の学術部門担当者が集まり、各同窓会で開催する学術研修会やセミナーの開催方法やあり方などの情報交換をして、学術事業をよりよいものにする目的で、平成9年に発足しています。当初は年2回、平成21年からは年1回の開催となっています。

今年度は共催校として明海大学歯学部同窓会にお手伝いいただき、当同窓会学術部が主管し、平成28年8月20日（土）にホテルラングウッド新潟で開催されました。長崎大学を除く27校70名の参加者がありました。

今回は「同窓会学術イベントを成功させるためには何が必要か」をメインの協議テーマとして、当同窓会学術部が企画した事例をケースプレゼンテーションし、そこから導き出されるキーワードを抽出し、学術イベント成功のための要因を参加者皆で討論しました。これは本会開催の趣旨に最もマッチしたテーマであり、大変有意義な議論ができました。

また、後半には日本歯科医学会会長住友雅人先生から「同窓会学術活動に期待すること」と題して、同窓会が学術活動をしていくにあたり参考となる話題を多数紹介いただきました。

連絡会終了後、同ホテル宴会場で懇親会が行われました。当同窓会の役員も加わり、参加者80名で開催されました。ここでも様々な情報交換が行われました。

歯科に限りませんが、医療業種に携わる者はその在職中、不断の努力・勉強を行う必要があります。しかも学部卒業後は、通常は自発的に行わなければならないし、なおかつchargeが必要です。

歯学部ニュース前号にも報告したように、関東



第32回 全国歯科大学同窓会・校友会学術担当者連絡会



議長をする奥田先生



発言をする東北大の先生



住友先生の講演



懇親会（住友先生を囲んで）



信越厚生局新潟事務所との折衝により、以下の3つの事項が認定されております。

1. 当同窓会が、施設基準の認定に必要な研修を開催できる「学術団体」に該当すること
2. 平成28年度第2回の学術セミナーが、医療安全対策および「歯科外来診療環境体制加算（外来環）」対応の研修に該当すること
3. また、「在宅療養支援歯科診療所」並びに新設された「かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所」の施設基準に関する研修のうち、緊急時対応に係る事項の研修にも該当すること

特に1. については、(1) 当同窓会員のみならず他大学卒業の方にも門戸を開いていること、(2) 当同窓会学術部が、「学術団体」に相応しい活動をしていること、(3) セミナーも、施設基準認定に必要な研修たり得る十分な内容であること等により、同窓会としては異例の認定を受けています。

当同窓会学術部では、今後も会員のニーズに合わせた講演会やセミナーを企画運営していきます。

◎歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生との交流会

平成28年9月9日（金）夕方に、歯学部講堂にて表記の会が行われました。昨年までは説明会後に懇親会が行われていましたが、今回はガラッと趣向を変えて説明会のみとさせていただきました。

同窓会で行っている事業や会員向けサービスを一通り説明した後、感想を聞きました。

- ・学生への援助支出もなされている事を聞いて、身近に感じた。→運動会（6,000円）、医歯学祭（70,000円）、SCRP（30,000円）への援助をしております。
- ・同窓会から支えてもらっていたことを感じた。→同窓会から既に表彰を受けたことのある学生から。
- ・卒業生ネームプレートに名前を載せたい。→国試がんばってください。 etc

卒業したら、良きにつけ悪きにつけ、「新潟大学歯学部の卒業生」という看板をしょって立つことになります。時には順風満帆でしょうし、時にはつまづくこともあるでしょう。しかし、全国津々浦々に「新潟大学歯学部の卒業生」がいます。同窓会（組織、同窓生、事業、サービス等）を上手く利用して、身体は離れていても心は団結していきましょう。卒業後の皆様の受け皿は「新潟大学歯学部同窓会」です。





平成28年度 新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅡ

リハビリテーションがめざすもの — 歯科との連携を考える — を受講して

歯学科17期生 堀 口 良 子

平成28年10月16日、本学講堂にて、新潟リハビリテーション大学の山村千絵学長のご講演がありました。

WHOによる「国際障害分類、ICIDH、1980年」「国際生活機能分類、ICF、2001年」「リハビリテーションの定義、1981年」についてのお話があり、障害を、機能・形態障害に限定せず、能力障害、社会的不利にまで拡げて定義し、障害のある人の心の中に生まれてくるプラスの心の働きに着目し、障害者を、社会的な有利さをも備えている存在であるにとらえ、プラスを増やす事で、リハビリテーションの大きな成果を上げることが出来るとしています。そしてリハビリテーションは訓練ばかりでなく、環境や社会に手を加える事も目的とし、地域社会が、リハビリテーションに関するサービスの計画と実行に関わり合わなければならないとしています。

リハビリテーションには、医学的、社会的、職業、教育、福祉分野でのアプローチがあり、歯科医師が関わるのは、それらのうち、医学的リハビリテーションで、障害の回復の場面では、言語聴覚士との連携、指示、指導が出来るほか、予防的なアプローチも行うとのことでした。

新潟リハビリテーション大学で行われている、「活動」「参加」型の、地域の高齢者の介護予防事業、使われていなかったソフトスチーム機と廃校を使った高齢者向け食品開発ほか、岩船大祭やマラソン大会でのボランティア、清掃活動、特別支援学校の運動会、小学校の総合学習への参加など、学生、教職員の皆様が、地域の高齢者ばかりでなく小学生とも交流し、いきいきと活動されている様子も見せていただき、とても感動しました。

山村先生は、第1回共通一次試験を経て本学に入学されたとのこともありました。地域でのびのびと実践、御活躍されている山村先生のご講演を聴き、後輩として誇らしく、励みになったのと同時に、自分は地域にどれだけ参加出来ているのかと反省しました。歯学部創立50年の年に、さわやかな風のようなご講演をどうもありがとうございました。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	28. 8. 31	櫻井直樹		包括歯科補綴学分野 助教
退職	28. 8. 31	黒澤美絵	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科 助教	小児歯科学分野 教務補佐員
採用	28. 9. 1	渡邊賢礼	摂食嚥下リハビリテーション学分野 助教	医歯学総合病院医員
退職	28. 9. 30	小田真隆		微生物感染症学分野 准教授
配置換	28. 10. 1	岩瀬陽子	小児歯科学分野 助教	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科 助教
配置換	28. 10. 1	黒澤美絵	小児歯科学分野 助教	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科 助教
退職	28. 10. 31	ARIANI NINA		予防歯科学分野 助教
採用	28. 11. 1	LISDRANTO HANINDRIYO	予防歯科学分野 助教	
採用	28. 12. 1	船山さおり	摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助教	医歯学総合病院医員
配置換	29. 1. 1	三上俊彦	組織再建口腔外科学分野 助教	医歯学総合病院口腔再建外科 助教
採用	29. 1. 1	笹杏奈	摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手	
採用	29. 2. 1	岸川咲吏	口腔生化学分野 特任助教	
定年退職	29. 3. 31	程 珺		口腔病理学分野 准教授
任期満了	29. 3. 31	越知佳奈子		歯科矯正学分野 助教
任期満了	29. 3. 31	加来咲子		歯学教育研究開発学分野 特任助教
任期満了	29. 3. 31	澤味規		小児歯科学分野 特任助教
任期満了	29. 3. 31	大口繭美		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者
任期満了	29. 3. 31	佐藤茜		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	29. 3. 31	保 田 麻 里		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 11. 1	山 下 啓 太	歯学部事務室総務係	
任期満了	29. 3. 31	市 橋 恵美子		歯学部事務室学務係 事務補佐員



病院

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	高 橋 功次郎	矯正歯科助教	矯正歯科医員
配置換	28. 4. 1	川 崎 真依子	(28.4.1医歯学系助教)	冠・ブリッジ診療科助教
採用	28. 4. 1	金 丸 祥 平	口腔再建外科医員	継続
採用	28. 4. 1	高 辻 紘 之	口腔再建外科医員	新規
採用	28. 4. 1	浅 井 佑 介	口腔再建外科医員	新規
採用	28. 4. 1	高 田 寛 子	口腔再建外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	内 川 恵 里	口腔再建外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	須 田 大 亮	口腔再建外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	竹 内 涼 子	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	荻 野 奈保子	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	原 太 一	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	齋 藤 太 郎	顎顔面口腔外科医員	新規
採用	28. 4. 1	結 城 龍太郎	顎顔面口腔外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	深 井 真 澄	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	渡 部 桃 子	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	中 谷 暢 佑	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	原 夕 子	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	永 井 孝 宏	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	木 口 哲 郎	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	隅 田 賢 正	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	北 村 厚	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	清 水 志 保	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	曾 我 麻里恵	歯科放射線科医員	継続
採用	28. 4. 1	小 林 太 一	歯科放射線科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	吉 川 博 之	歯科麻酔科医員	継続

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	金丸 博子	歯科麻酔科医員	継続
採用	28. 4. 1	山崎 麻衣子	歯科麻酔科医員	継続（育児休業中）
採用	28. 4. 1	佐藤 由美子	歯科麻酔科医員	継続
採用	28. 4. 1	小玉 由記	歯科麻酔科医員	継続（育児休業中）
採用	28. 4. 1	平原 三貴子	歯科麻酔科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	山田 友里恵	歯科麻酔科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	須田 有紀子	歯科麻酔科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	澤味 規	小児歯科・障がい者歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	鹿児島 暁子	小児歯科・障がい者歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	松枝 一成	小児歯科・障がい者歯科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	花崎 美華	小児歯科・障がい者歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	中島 努	小児歯科・障がい者歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	村上 望	小児歯科・障がい者歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	左右田 美樹	小児歯科・障がい者歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	鈴木 絢子	小児歯科・障がい者歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	大竹 正紀	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	坂上 馨	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	西野 和臣	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	井表 千馨	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	眞舘 幸平	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	大倉 麻里子	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	上村 藍太郎	矯正歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	大森 裕子	矯正歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	網谷 季莉子	矯正歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	市川 佳弥	矯正歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	藤田 瑛	矯正歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	阿部 遼	矯正歯科レジデント （パートタイム）	継続

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	新 島 綾 子	矯正歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	村 上 智 子	矯正歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	中 田 樹 里	矯正歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	栗 原 加奈子	矯正歯科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	大 澤 知 朗	矯正歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	深 町 直 哉	矯正歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	水 越 優	矯正歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	皆 川 久美子	予防歯科医員	継続 (育児休業中)
採用	28. 4. 1	宮 本 茜	予防歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	瀧 口 知 彌	予防歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	笹 嶋 真 嵩	予防歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	野々村 絢 子	予防歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	野 中 由香莉	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	堀 水 慎	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	宮 澤 春 菜	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	松 田 由 実	歯周病科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	島 田 惇 史	歯周病科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	佐 藤 圭 祐	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	根 津 新	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	保 苺 崇 大	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	黒 木 歩	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	山 田 実 生	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	横 地 麻 衣	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	大 倉 直 人	歯の診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	長谷川 泰 輔	歯の診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	坂 上 雄 樹	歯の診療科医員 (パートタイム)	継続

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	遠 間 愛 子	歯の診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	末 山 有希子	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	枝 並 直 樹	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	竹 内 亮 祐	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	鈴 木 裕 希	歯の診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	江 口 香 里	冠・ブリッジ診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	宮 福 子	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	水 鳶 一 尊	冠・ブリッジ診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	高 岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	三 上 絵 美	義歯診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	山 鹿 義 郎	義歯診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	小飯塚 仁 美	義歯診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	大 川 純 平	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	菊 地 さつき	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	設 楽 仁 子	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	上 原 文 子	義歯診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	兒 玉 匠 平	義歯診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	酒 井 翔 悟	口腔リハビリテーション科医員	新規
採用	28. 4. 1	砂 田 悠香子	口腔リハビリテーション科 レジデント	新規
採用	28. 4. 1	船 山 さおり	口腔リハビリテーション科医員	継続
採用	28. 4. 1	鈴 木 拓	口腔リハビリテーション科 レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	吉 原 翠	口腔リハビリテーション科 レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	長谷川 真 奈	歯科総合診療部医員	継続
採用	28. 4. 1	三 上 あずさ	歯科総合診療部医員	継続
採用	28. 4. 1	永 井 裕 子	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	渡 邊 大 祐	歯科総合診療部レジデント	継続

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	関 根 彩央里	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	28. 4. 1	服 部 陽 一	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	28. 4. 1	佐 藤 拓 実	歯科総合診療部医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	中 村 太	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	高 嶋 真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	河 村 篤 志	顎関節治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	永 井 康 介	顎関節治療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	山 崎 裕 太	顎関節治療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	山 田 一 穂	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	小 川 信	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	清 水 太 郎	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	上 松 晃 也	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	阿 部 達 也	病理検査室医員	継続
育児休業	28. 4. 13	佐 藤 美寿々		予防歯科助教
採用	28. 5. 1	竹 内 玄太郎	魚沼地域医療教育センター (歯科口腔外科) 特任講師	新規
採用	28. 5. 1	砂 田 悠香子	口腔リハビリテーション科 レジデント (パートタイム)	口腔リハビリテーション科 レジデント
退職	28. 5. 31	金 子 友 厚		歯の診療科助教
採用	28. 6. 1	渡 邊 賢 礼	口腔リハビリテーション科医員	医歯学総合研究科研究員
退職	28. 6. 13	河 野 承 子		小児歯科・障がい者歯科助教
任期満了	28. 6. 30	澤 味 規	(28.7.1学系特任助教)	小児歯科・障がい者歯科医員
退職	28. 6. 30	佐 野 富 子		小児歯科・障がい者歯科助教
昇任	28. 7. 1	小 島 拓	口腔再建外科講師	医歯学系助教
採用	28. 7. 1	岩 瀬 陽 子	小児歯科・障がい者歯科助教	医歯学系特任助教
採用	28. 7. 1	久保田 悠	予防歯科助教	新規
退職	28. 8. 31	渡 邊 賢 礼	(28.9.1学系助教)	口腔リハビリテーション科 医員
採用	28. 9. 1	黒 澤 美 絵	小児歯科・障がい者歯科助教	歯学部教務補佐員
採用	28. 9. 1	大 倉 直 人	歯の診療科助教	歯の診療科医員
任期満了	28. 9. 30	瀧 口 知 彌		予防歯科医員
任期満了	28. 9. 30	笹 嶋 真 嵩		予防歯科医員 (パートタイム)
任期満了	28. 9. 30	清 水 太 郎		インプラント治療部医員
配置換	28. 10. 1	岩 瀬 陽 子	(28.10.1学系特任助教)	小児歯科・障がい者歯科助教
配置換	28. 10. 1	黒 澤 美 絵	(28.10.1学系特任助教)	小児歯科・障がい者歯科助教

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 10. 1	村 上 望	小児歯科・障がい者歯科医員	小児歯科・障がい者歯科医員 (パートタイム)
採用	28. 10. 1	坂 上 雄 樹	歯の診療科医員	歯の診療科医員 (パートタイム)
採用	28. 10. 1	大 川 純 平	義歯診療科レジデント	義歯診療科レジデント (パートタイム)
採用	28. 10. 1	設 楽 仁 子	義歯診療科レジデント	義歯診療科レジデント (パートタイム)
採用	28. 10. 1	今 井 秀 明	インプラント治療部医員	新規
採用	28. 10. 1	三 上 俊 彦	口腔再建外科助教	口腔再建外科特任助教
育児休業 復帰	28. 10. 1	皆 川 久美子		予防歯科医員
採用	28. 11. 1	佐 藤 由美子	歯科麻酔科特任助教	歯科麻酔科医員
育児休業	28. 11. 3	三 上 絵 美		義歯診療科医員
退職	28. 11. 30	船 山 さおり	(28.12.1学系特任助教)	口腔リハビリテーション科 医員
採用	28. 12. 1	村 上 智 哉	小児歯科・障がい者歯科助教	新規
育児休業	28. 12. 31	三 上 あずさ		歯科総合診療部医員
配置換	29. 1. 1	三 上 俊 彦	(29.1.1学系特任助教)	口腔再建外科助教
採用	29. 1. 1	小 川 信	生命科学医療センター特任助教 (パートタイム)	インプラント治療部医員
採用	29. 1. 23	前 川 和 也	口腔リハビリテーション科 レジデント	新規
採用	29. 2. 1	吉 川 博 之	歯科麻酔科助教	歯科麻酔科医員
退職	29. 3. 31	田 中 みか子		義歯診療科講師
退職	29. 3. 31	小 島 拓		口腔再建外科講師
退職	29. 3. 31	中 山 美 和		歯科放射線科助教
任期満了	29. 3. 31	高 辻 紘 之		口腔再建外科医員
任期満了	29. 3. 31	浅 井 佑 介		口腔再建外科医員
任期満了	29. 3. 31	高 田 寛 子		口腔再建外科レジデント
任期満了	29. 3. 31	内 川 恵 里		口腔再建外科レジデント
任期満了	29. 3. 31	須 田 大 亮		口腔再建外科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	結 城 龍太郎		顎顔面口腔外科レジデント
任期満了	29. 3. 31	深 井 真 澄		顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	渡 部 桃 子		顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	原 夕 子		顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	29. 3. 31	永井孝宏		顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	平原三貴子		歯科麻酔科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	山田友里恵		歯科麻酔科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	鹿児島 暁子		小児歯科・障がい者歯科医員
任期満了	29. 3. 31	村上 望		小児歯科・障がい者歯科医員
任期満了	29. 3. 31	花崎美華		小児歯科・障がい者歯科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	左右田 美樹		小児歯科・障がい者歯科レジデント (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	井表千馨		矯正歯科医員
任期満了	29. 3. 31	野中由香莉		歯周病科医員
任期満了	29. 3. 31	島田 惇史		歯周病科医員 (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	坂上雄樹		歯の診療科医員
任期満了	29. 3. 31	江口香里		冠・ブリッジ診療科医員
任期満了	29. 3. 31	宮 福子		冠・ブリッジ診療科レジデント
任期満了	29. 3. 31	水 鳶 一 尊		冠・ブリッジ診療科レジデント (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	三上 絵美		義歯診療科医員
任期満了	29. 3. 31	酒井 翔悟		口腔リハビリテーション科医員
任期満了	29. 3. 31	砂田 悠香子		口腔リハビリテーション科レジデント (パートタイム)
任期満了	29. 3. 31	永井裕子		歯科総合診療部レジデント
任期満了	29. 3. 31	渡邊大祐		歯科総合診療部レジデント
任期満了	29. 3. 31	関根彩央里		歯科総合診療部レジデント
任期満了	29. 3. 31	服部 陽一		歯科総合診療部レジデント

【看護・診療支援部】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	28. 4. 1	遠藤 可奈子	看・東3階病棟看護師	新規
採用	28. 4. 1	高橋 彩	看・東3階病棟看護師	新規
採用	28. 4. 1	中野 佑香	看・東3階病棟看護師	新規
育児休業 復帰	28. 4. 1	吉田 加織		看・外来4・5階看護師
育児休業 復帰	28. 4. 1	村上 絵理香		看・東3階病棟看護師
所属換	28. 4. 1	田代 美佐子	看・外来4・5階看護師長	看・東4階病棟看護師長
所属換	28. 4. 1	渡邊 悦子	看・東3階病棟副看護師長	看・東10階病棟副看護師長
所属換	28. 4. 1	吉田 加織	看・放射線部看護師	看・外来4・5階看護師
所属換	28. 4. 1	村上 絵理香	看・血液浄化療法部看護師	看・東3階病棟看護師
育児休業 復帰	28. 5. 17	大貫 倫子		看・東3階病棟看護師
採用	28. 6. 1	小林 さやか	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
所属換	28. 6. 1	齋藤 みゆき	看・集中治療部看護師	看・東3階病棟看護師
所属換	28. 8. 1	能瀬 美鈴	看・外来4・5階看護師	看・外来エントランス・ 1階看護師
育児休業	28. 8. 12	大貫 倫子	看・東3階病棟看護師	
所属換	28. 8. 15	林 晶子	看・外来4・5階看護師	看・手術部看護師
所属換	28. 9. 4	田村 真弓	看・血液浄化療法部看護師	東3階病棟看護師
任期満了	28. 9. 30	村上 ゆみ		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	28. 9. 30	上村 由紀子		摂食嚥下機能回復部言語聴 覚士（パートタイム）
所属換	28. 10. 1	堀川 杏奈	看・高次救命災害治療セン ター看護師	東3階病棟看護師
採用	28. 10. 1	山口 彩花	歯科衛生部門歯科衛生士 (パートタイム)	新規
所属換	28. 10. 1	田巻 好	看・東3階病棟看護師	手術部看護師
所属換	28. 10. 1	井浦 舞	看・東3階病棟看護師	東11階病棟看護師
育児休業	28. 11. 4	野村 愛	看・外来4・5階看護師	
育児休業	28. 11. 17	石井 絵美	看・外来4・5階看護師	
所属換	29. 2. 1	星野 苑美	看・外来4・5階看護師	手術部看護師
所属換	29. 3. 19	坂本 富美子	看・外来4・5階副看護師長	外来エントランス・1階 副看護師長
所属換	29. 3. 19	白川 道子	看・東4階病棟副看護師長	外来4・5階副看護師長
退職	29. 3. 31	西川 典代		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	29. 3. 31	菅原 希美		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	29. 3. 31	山口 彩花		歯科衛生部門歯科衛生士 (パートタイム)

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
昇任	28. 4. 1	井 関 慶 喜	管理運営課臨床研究支援係長	管理運営課主任
昇任	28. 4. 1	横 山 康之介	管理運営課専門職員	総務課主任
昇任	28. 4. 1	伊 藤 圭 子	医事課病歴管理係長	医事課主任
昇任	28. 4. 1	田 澤 由紀子	医事課専門職員	医事課主任
配置換	28. 4. 1	渡 辺 春 美	総務部人事課専門職員 (給与企画担当)	総務課人事労務係長
配置換	28. 4. 1	石 川 和 彦	学務部学生支援課保健管理係長	医事課救急医療係長
配置換	28. 4. 1	吉 田 誠 司	人文社会・教育科学系学務 課法学部学務係長	医事課診療請求係長
配置換	28. 4. 1	鈴 木 忍	人文社会・教育科学系学務 課経済学部学務係長	管理運営課医療材料係長
配置換	28. 4. 1	佐 藤 泉 穂	医歯学系保健学科事務室総 務係長	管理運営課臨床研究支援係長
配置換	28. 4. 1	矢野目 健	総務課人事労務係長	人事課非常勤人事係長
配置換	28. 4. 1	星 野 智 裕	管理運営課薬品材料係長	管理運営課医薬品係長
配置換	28. 8. 1	村 山 登	財務部資産管理課収入係長	医事課診療管理係長
配置換	28. 8. 1	伊 藤 能 成	学務部学生支援課奨学支援係長	医事課公費医療係長
配置換	28. 8. 1	今 村 尊 博	医事課救急医療係長	医事課医事総括係長から
配置換	28. 8. 1	佐 藤 栄 作	医事課医事総括係長	財務部資産管理課収入係長
配置換	28. 8. 1	伊 藤 憲 興	医事課診療管理係長	総務部人事課人件費・給与 計算係長
定年退職	29. 3. 31	斎 藤 芳 章	再雇用 (保健学科事務室学務係)	医事課患者支援係長



編集後記

初めて歯学部ニュースの作成に関わる機会をいただきました。主な仕事は原稿の依頼でしたが、依頼することの難しさを今回、経験できたことは私にとって貴重な経験だったと思っています。最後に原稿を執筆していただいた学生さん、先生方、お忙しい中、かなりきついスケジュールでの原稿依頼を快諾していただきありがとうございました。またご協力いただいた編集委員の先生方、ウィザップ本間様にもこの場をお借りして御礼を申し上げます。

組織再建口腔外科学分野 長谷部大地

今回の歯学部ニュースの編集委員を通し、先生方や学生の皆様と知り合う機会を得ることができ大変貴重な機会となりました。また、ご多忙にも拘らず、快く御寄稿いただきました方々にお礼申し上げます。本号も歯学部の皆様の思い出となりますことを祈っております。

歯学教育研究開発学分野 加来 咲子

はじめに、この度は大変お忙しい中、原稿執筆をしてくださいました先生方、学生さんに心より感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。今回このお仕事をいただきまして過去の歯学部ニュースを少し読んだのですが、結構、面白い原稿があるのだなと感じました。他科の先生方や学生さんがどんな方で、今現在何に向かって、何をやっているのか知るのにとっても貴重な場であり、今の新潟大学歯学部を知るための大切な雑誌だと改めて思いました。編集委員として関わりましたことを感謝しております。

生体歯科補綴学（2補綴） 長澤麻沙子

この度、「素顔拝見」「看護・支援部だより」「ポリクリを終えて」「早期臨床実習を終えて」を担当致しました。ご多忙のなかご協力いただいた先生方、看護師さん、歯科衛生士さん本当にありがとうございました。学生さんに関しては執筆経験のない方を優先し依頼致しました。これを機会に今後の勉強や臨床実習へのモチベーション向上に役立ってもらえれば幸いです。最後に、中川先生をはじめ編集委員の先生方どうもお疲れ様でした。またご一緒に仕事する機会がありましたらご指導ご鞭撻の程どうぞ宜しくお願い致します。

顎顔面口腔外科 勝見 祐二

初めて歯学部ニュースの作成に関わる機会を拝命しました。福祉学が専門の私は歯科の他の先生と連携を取って業務を行うことがあまりなかったため、今回はその貴重な連携の体験をさせて頂き、大変勉強になりました。お世辞にも上手くこなしたとは言えませんが、原稿を依頼することの難しさ、全体の構成を考える大変さも私にとって貴重な経験だったと思っています。そして最後に原稿を執筆していただいた皆様、お忙しい中、きついスケジュールでの原稿作成、ありがとうございました。またともに協力していただいた編集委員の先生方と業者の方にもこの場をお借りしまして御礼を申し上げます。

口腔生命福祉学科 中川 兼人

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮影地：山形市（蔵王）

撮影日：2017年3月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F9・シャッター速度：640分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮影地：新潟市

撮影日：2017年2月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F9・シャッター速度：400分の1秒

コメント：今回は冬景色の写真でまとめてみました。表紙は蔵王の樹氷、裏表紙は雪を頂いた佐渡をのぞむ萬代橋と新潟島の俯瞰です。雪は、撮影が非常に難しい被写体の代表かもしれません。撮影機材が進歩してダイナミックレンジが広がっても、その白さを活かしつつ質感を出す露出の決定は、カメラ任せではなかなか思うようにいきません。いいシーンに出会ったら、撮影条件を変えて何枚も撮らざるを得ないように思います。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS E-M5 Mark II, E-M10, E-P5, E-P2

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12-50mm F3.5-6.3 EZ, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8, M.ZUIKO DIGITAL 45mm F1.8

撮影者：林 孝文

歯学部ニュース

平成28年度第2号（通算130号）

発行日 平成29年4月5日

発行者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 中川 兼人、魚島 勝美

編集委員 長谷部大地、長澤麻沙子
勝見 祐二、加来 咲子

印刷所 (株)ウイザップ

